磐越自動車道関係発掘調査報告書

え 内 遺 跡

1996

新 潟 県 教 育 委 員 会 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

磐越自動車道関係発掘調査報告書

新 潟 県 教 育 委 員 会 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

平成9年度に全線開通予定の磐越自動車道は、大平洋側と日本海側を結ぶ一大動脈として、沿線地域を中心とした経済・文化活動に多大な役割りを果たすものと期待されています。

磐越自動車の通過する地域には、旧石器時代から近世にかけての数多くの遺跡が所在 しており、道路法線に係わるものについてはこれまでに発掘調査を実施し、多くの貴重 な成果を得ています。

今回調査を実施した江内遺跡では、奈良時代から近世の土器・陶磁器などの遺物や、中・近世の溝・掘立柱建物・土坑・井戸などの遺構が検出されています。この中で特に注目されるのは、出土した遺物や遺構の分析を通じて14世紀から近世に至る集落の変遷が明らかにされたことで、阿賀野川流域の新田開発や集落の衰退を考える上で重要な資料を提供しています。

これらの調査成果が、今後の中・近世史研究に資とすると共に、県民の方々の埋蔵文 化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸いです。

最後に、発掘調査に際して多大なご協力とご援助を賜りました新津市教育委員会並びに地元の方々、また調査から報告書刊行に至るまで格別のご配慮を賜った日本道路公団 新潟建設局・同新潟工事事務所に対し、深甚なる謝意を表します。

平成8年3月

新潟県教育委員会

教育長 平野清明

例 言

- 1 本報告は新潟県新津市大字川口字江内に所在する江内遺跡の発掘調査記録である。発掘調査は磐越自動車道の建設にともない、新潟県が日本道路公団から受託して実施したものである。
- 2 発掘調査は調査主体である新潟県教育委員会(以下県教委と略す)が財団法人新潟県埋蔵文化財調査 事業団(以下埋文事業団と略す)に調査を委託し、平成4年度に実施した。
- 3 整理作業及び報告書作成にかかる作業は平成 $4\sim6$ 年度に実施し、埋文事業団調査課がこれにあたった。
- 4 出土遺物と調査にかかる資料は、すべて県教委が保管している。遺物の注記記号は「エウチ」もしくは「江内」とし、出土地点や層位を併記した。
- 5 遺物番号は土器・陶磁器、土・陶磁・石製品、木製品ごとに通し番号とし、図面図版と写真図版の番号は一致している。
- 6 本文中の註はすべて脚註とした。また、引用文献は著者及び発行年(西暦)を文中に[]で示し、 巻末に一括して掲載した。
- 7 本書の記述は藤田豊明(埋文事業団主任調査員)・春日真実(同文化財調査員)・石山精哉(同文化財調査員)・佐藤 恒(同嘱託)がこれにあたった。分担は第II章1・2が藤田、第 I 章・第II章3・第 III章・第IV章1・4・第 V章が春日、第 IV章2が石山、第 IV章3が佐藤・石山である。ただし、石器の記述・石材の鑑定については高橋保雄・沢田 敦・鈴木俊成、第 II章3については亀井 功より指導を受けた。出土遺物観察表は土器・陶磁器が春日・佐藤、土・陶磁製品・石製品が石山、木製品は佐藤が作成した。編集は春日が行なった。
- 8 本書の遺物写真撮影は石山・佐藤が中心になって行なった。
- 9 発掘調査から報告書作成に至るまで、下記の方々から多くのご教示・ご助言を賜った。厚く御礼申し 上げます。

石井由美、宇野隆夫、垣内光次郎、柿田祐司、金子正典、木立雅朗、坂井秀弥、田村浩司、鶴巻康志、 滝川重徳、藤田邦雄、増山 仁、宮田進一、安 英樹、山本幸俊、渡辺朋和、渡辺ますみ

目 次

第1章 序 說	
1. 調査にいたる経緯 ····································	1
2. 調査・整理の経過	
A. 調査経過	1
B. 整理経過	3
第II章 遺跡の位置と環境	
1. 位置と地理的環境	4
2. 周辺の遺跡	4
3. 川口集落について	6
第Ⅲ章 遺 跡	
1. 調査方法	
A. 調査区の呼称とグリットの設定	7
B. 基本的な調査工程	8
2. 層 序	8
3. 概 観	10
4. 遺構各説	11
第Ⅳ章 遺 物	
1. 土器・陶磁器	
A. 器種分類	26
B. 土器・陶磁器各説	26
2. 土・陶磁製品・石製品	37
3. 木製品	39
4. その他	44
第Ⅴ章 ま と め	
1. 中・近世の土器・陶磁器	
A. S D166出土の土器・陶磁器	45
B. 近世の土器・陶磁器	
(1) 主な遺構出土の土器・陶磁器	45
(2) 近世の瓦器・土師器	51
2. 遺構の変遷	53
《要 約》	54
《別 表》 1 土器・陶磁器観察表	58
2 土製品・石製品観察表	6
3 木器観察表	68
《引用•参考文献》	7

挿 図 目 次

第1図	一次調査設定トレンチ位置図	1
第2図	江内遺跡発掘調査・整理作業工程	3
第3図	周辺の地形	4
第4図	江内遺跡周辺の遺跡	5
第5図	グリット設定図	7
第6図	遺跡の層序	9
第7図	遺構模式図	10
第8図	土器・陶磁器器種分類図	27
第9図	砥石の大きさと重量	38
第10図	井戸側部材の大きさ	43
第11図	主要遺構出土土器・陶磁器	47
第12図	揃いの食器	49
第13図	16~17世紀の土器・陶磁器	50
第14図	遺構変遷図 1	52
第15図	遺構変遷図 2	53

図 版 目 次

図面図版

図版1 遺構全体図 1:400 図版2・3 遺構実測図1 1:100 図版4・5 遺構実測図2 1:100 図版6・7 遺構実測図3 1:100 図版8・9 遺構実測図4 1:100 図版10・11 遺構実測図5 1:100 図版12·13 遺構実測図 6 1:100 図版14・15 遺構実測図 7 1:100 図版16 遺構実測図8 1:40 図版17 土器·陶磁器1 S D166 図版18 土器・陶磁器2 SD15, SK20 図版19 土器・陶磁器3 SD41, SE45, SE47, E7・ピット10 SK95, SK100, SE21, SK91, SD130 図版20 土器·陶磁器4 SD116, SK122, SK144, SD178, SE176, SE190 図版21 土器 · 陶磁器 5 S E 198, S E 212 図版22 土器·陶磁器6 SB1, SK8, SK69

- 図版23 土器・陶磁器7 S K 69
- 図版24 土器・陶磁器8 SK96, SK112, SE80, SK131, SK177
- 図版25 土器・陶磁器 9 包含層・その他の遺構(中世・近世:陶器椀・皿)
- 図版26 土器・陶磁器10 包含層・その他の遺構(近世:陶器椀・皿・おろし皿・小杯・蓋,磁器 椀)
- 図版27 土器・陶磁器11 包含層・その他の遺構(近世:磁器椀)
- 図版28 土器・陶磁器12 包含層・その他の遺構(近世:磁器皿・蓋・仏飯器・徳利・陶磁器香炉)
- 図版29 土器・陶磁器13 包含層・その他の遺構(近世:陶器徳利・壺・甕・鉢・すり鉢)
- 図版30 土器・陶磁器14 包含層・その他の遺構(近世:陶器すり鉢)
- 図版31 土器・陶磁器15 包含層・その他の遺構(近世:陶器すり鉢・鍋,土師器・瓦器)
- 図版32 土・陶磁製品,石製品1
- 図版33 石製品2 SD166, SE198, SK20
- 図版34 石製品3 SD15, SK112, 包含層・その他の遺構
- 図版35 木製品1 S D116
- 図版36 木製品2 SE25, SE47, SK69
- 図版37 木製品3 SE80
- 図版38 木製品4 SE198
- 図版39 木製品5 SE198, その他の遺構
- 図版40 木製品6 その他の遺構
- 図版41 木製品7 SE90 井戸側部材
- 図版42 木製品8 SE45 井戸側部材
- 図版43 木製品9 SE45 井戸側部材
- 図版44 木製品10 SE45 井戸側部材

写真

- 図版45 調査区近景
- 図版46 土層堆積状況
- 図版47 調査前近景,作業風景,暗渠敷設工事風景,ラジコンへりによる航空撮影風景
- 図版48 遺構 A区全景, B区全景, D5 · 6 周辺
- 図版49 遺構 E5・6周辺, E7・8周辺, F5・G8周辺
- 図版50 遺構 SE1土層断面, SK8土層断面, SE34, SE34土層断面 SE47, SE47土層断面, SE140, SE140土層断面
- 図版51 遺構 SB1, SB2, SB1・ピット2・4
- 図版52 遺構 SE90, SE72, SK68, SK68土層断面, SK82ab, SK82ab土層断面, SK67, SE80
- 図版53 遺構 SE100, SK91, SK91土層断面, SK92, SK92土層断面, SE93, E 7 ピット10
- 図版54 遺構 SB3, SB3・ピット1・2・4・6
- 図版55 遺構 SK20とSD15, F・G 6 周辺, SK20土層断面, SD15土層断面, SD40土層断面
- 図版56 遺構 SE45, SE45土層断面, SK29, SE14, SE14土層断面 SE28, SE28土層断面
- 図版57 遺構 SE25, SE25土層断面, SE21, SE21土層断面, SK24, SD41土層断面, G6周辺
- 図版58 遺構 S K151, S K144, S K122, S K132, S D124 · S K125 土層断面, S K120, G · H 7 · 8 周辺
- 図版59 遺構 F7・8周辺, F8周辺, G8周辺
- 図版60 遺構 B区全景, G · F 2 · 3周辺, E 2 · 3周辺

図版61 遺構 D2・3周辺, SK226土層断面, SK226遺物出土状況, SK226

図版62 遺構 S D166土層断面, S D166, S D166遺物出土状況

図版63 遺構 SK230, SK230土層断面, SK204, SK204土層断面, SK197, SK197土層断面

図版64 遺構 S K210, S K210土層断面, S E 198遺物出土状況, S K199土層断面, S K197, S K197土層断面

図版65 遺構 S K 202土層断面, S K 202土層断面, S K 203, S K 203, S K 200土層断面, S K 205, S K 205完掘

図版66 遺構 S K190遺物出土状況, S K190土層断面, S K201, S K201土層断面, S K192, S K192土層断面, S D165・E 2 ・ピット10土層断面

図版67 遺物 土器·陶磁器1 S D166

図版68 遺物 土器 · 陶磁器 2 S D 15, S K 20

図版69 遺物 土器・陶磁器 3 S D 41, S E 45, S E 47, S K 95, E 7 - ピット10, S E 100 S E 21, S K 91, S D 130, S D 116, S K 122

図版70 遺物 土器・陶磁器4 SK144, SD178, SE176, SE190

図版71 遺物 土器·陶磁器5 SE198

図版72 遺物 土器·陶磁器6 SE202, SB1, SK8

図版73 遺物 土器・陶磁器7 SK69

図版74 遺物 土器・陶磁器8 SK69, SK96, SK112

図版75 遺物 土器・陶磁器 9 SK112, SK177, SK131, SE80, 包含層・その他の遺構(中世)

図版76 遺物 土器・陶磁器10 包含層・その他の遺構(近世:陶器椀・皿)

図版77 遺物 土器・陶磁器11 包含層・その他の遺構(近世:陶器皿・おろし皿,磁器椀・蓋)

図版78 遺物 土器・陶磁器12 包含層・その他の遺構(近世:磁器椀・蓋・皿)

図版79 遺物 土器・陶磁器13 包含層・その他の遺構

(近世:磁器皿・蓋・仏飯器, 陶磁器香炉・徳利・壺・甕)

図版80 遺物 土器・陶磁器14 包含層・その他の遺構(近世:陶器甕・鉢・すり鉢)

図版81 遺物 土器・陶磁器15 包含層・その他の遺構(近世:陶器すり鉢)

図版82 遺物 土器・陶磁器17 包含層・その他の遺構

(近世:陶器すり鉢,行平鍋・土師器鉢・火入れ・焜炉・火消し壺・焙烙)

図版83 遺物 土製品•石製品1 S D166, S E 198

図版84 遺物 石製品2 SK15, SK112, 包含層・その他の遺構, 鉄滓・焼礫

図版85 遺物 木製品1 SD166, SE25, SE45

図版86 遺物 木製品2 SK69, SE80

図版87 遺物 木製品3 SE198, 包含層・その他の遺構

図版88 遺物 木製品4 その他の遺構

図版89 遺物 木製品5 SE90井戸側部材

図版90 遺物 木製品6 SE45井戸側部材

図版91 遺物 木製品7 SE45井戸側部材

第1章 序 説

1. 調査にいたる経緯

磐越自動車道は福島県いわき市を起点とし、常磐自動車道から分岐し、同県郡山市で東北縦貫自動車道 に連結し、さらに同県会津若松市を経て新潟市で北陸自動車道と結ばれる総延長212kmの高速道である。

磐越自動車道のうち江内遺跡にかかる区間(新潟〜津川間)は、昭和53年12月に基本計画路線が決定された。昭和60年4月、新潟県教育委員会(以下、県教委とする)は日本道路公団新潟建設局(以下、公団とする)の依頼を受け、新潟市〜北蒲原郡安田町の遺跡分布調査を実施し、新津市川口集落周辺ほか、計17ヵ所の埋蔵文化財包蔵地が存在することを確認し、同年5月にこの結果を公団に通知している。その後、県教委は平成3年12月・4年1月に第一次調査を行い、川口集落周辺には中世の集落跡の性格が認められるとした。この結果により川口集落周辺の遺跡を江内遺跡とし、平成4年3月に文化庁あてに遺跡発見の通知をしている。

また県教委は江内遺跡3,500㎡について二次調査が必要である旨を公団に伝え、磐越自動車道の工事工程や県教委・財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団(以下、埋文事業団とする)の体制などを考慮した結果、平成4年度4月~7月にかけて二次調査を実施することで協議を整えた。

2. 調査・整理の経過

A 調査経過

第1次調査

第一次調査は県教委により平成3年12月5・6日、平成4年1月13日の2回に分けて行った。調査方法



第1図 一次調査設定トレンチ位置図

日本道路公団新潟建設局 新潟工事事務所作成 1:500 昭和63年測図 は対象地域全体に任意にトレンチを設定し、遺構・遺物の有無・土層の堆積状況などを確認するものである。トレンチの数は23本(461.5㎡)で、調査対象面積14,950㎡に対する割合は約3%である。調査の結果、5・7トレンチで近世陶磁器の他に中世陶器・土師器等が出土し、井戸・土坑・ピット等が検出され中世の集落跡である可能性が高まった。また江内遺跡の第二次調査必要範囲についてはSTA881+51,000から主要地方道新潟新津線までの3,200㎡とした。

第2次調査

調査体制および調査期間は下記のとおりである。

調査期間 平成4年3月22日~7月21日

調査主体 新潟県教育委員会(教育長 本間栄三郎)

調 查 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団(理事長 本間栄三郎)

管 理 藍原 直木 (専務理事・事務局長)

渡辺 耕吉(総務課長)

茂田井信彦 (調査課長)

庶 務 藤田 守彦(総務課主事)

調査指導 戸根与八郎 (調査課第一係長)

調查担当 望月 正樹(調查課第一係主任)

調査職員 藤田 豊明(同 主任)

春日 真実(同文化財調査員)

佐藤 恒(同嘱託員)

第2次調査の経過

調査区内を市道22号線およびこれに沿った農業用水路が横断するため、市道22号線を境に調査区を二分し、先行して調査を行った東側の調査区をA区、A区の調査終了後に調査に着手した西側をB区とした。

A区:平成4年3月25日から6月20日まで調査を行った。ただし、3月25日から4月2日までは調査区内に存在する盛土削平の立ち合い調査である。4月6日以降は調査区東側から西側に向かって包含層掘削・遺構精査・遺構発掘の順で調査を行った。

5月10日に調査区内の排水溝の土層観察により、下層に包含層が存在する可能性が高まったため調査区 北東部の一角について実測・写真撮影を行い、5月20・21日に下層の確認調査を行った。その結果下層に 包含層は存在しないことが判明した。以後、通常の工程で調査を行う。6月15日には遺構発掘がほぼ終了。 6月17日に航空測量、6月18~20日に掘り残し確認を行い調査を終了した。

B区:平成4年5月20日から23日、6月12日から7月22日にかけて調査を行う。このうち5月20~23日はバックフオーによる表土除去作業であり、本格的な調査は6月12日からである。調査途中に調査区西側の市道に面した壁面の崩落が著しくなったため、6月27日に杭と板材による簡易な土留め工事を行う。

また調査区を南北方向にのびる溝(SD166)は調査区外南側にのびることが明らかとなり、7月2日 に公団と協議、南側約200㎡を拡張することが決定した。7月15日には拡張部分も含め遺構発掘がほぼ終 了、7月17日に航空測量、7月21日に掘り残し確認調査を行い調査を終了した。

B 整理経過

出土遺物の水洗作業は調査現場で発掘調査と平行して実施した。その後の本格的な整理作業は平成4年12月~平成5年3月、平成5年12月~平成6年3月、平成7年1月~3月、平成7年12月~平成8年3月にかけて埋文事業団曽和分室において実施した。

遺物の製図・拓本・挿図の作成については日々雇用職員の協力を得たが、遺物の注記・接合・実測など の作業は基本的に調査員が行った。

各年度の整理体制と主な作業内容は以下に示すとおりである。

主 体 新潟県教育委員会(教育長 4~6年度 本間栄三郎 7年度 平野清明)

整 理 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

管 理 藍原 直木 (専務理事・事務局長)

4~6年度 渡辺 耕吉 7年度 山上利雄(総務課長)

4~6年度 茂田井信彦 7年度 亀井 功 (調査課長)

庶 務 4・5年度 藤田 守彦 6・7年度 泉田 誠(総務課主事)

平成4年度 指 導 戸根与八郎(調査課第一係長) 鈴木俊成(調査課第一係主任)

担 当 藤田 豊明(出土遺物の整理・実測)

職 員 佐藤 恒(出土遺物整理・実測)

平成5年度 指 導 藤巻 正信(調査課第一係長)

担 当 藤田 豊明(出土遺物の整理・実測)

職 員 春日 真実(遺構図版作成)

佐藤 恒(出土遺物整理・実測)

平成6年度 指 導 藤巻 正信(調査課第一係長)

担 当 春日 真実(総括・原稿・編集)

職 員 石山 精哉(出土遺物実測・製図・写真撮影・原稿)

佐藤 恒(出土遺物実測・製図・写真撮影・原稿)

日々雇用職員 (復元・拓本・製図・挿図作成の補助)

平成7年度 指 導 藤巻 正信 (調査課第一係長)

担 当 春日 真実 (原稿・編集・校正)

年度月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	日月	12月	1月	2 月	3 月
平成4年度	***********	***		地区調査		Ē				- 基码	楚整理 	
平成5年度					6				遺物:	実測・遺4	構図面作 <i>E</i>	战等
平成6年度		日々雇		よる整図	・復元 				遺(物実測・2 	字真撮影	· 原稿等
									原: 	稿・編集 入		

第2図 江内遺跡の調査・整理経過

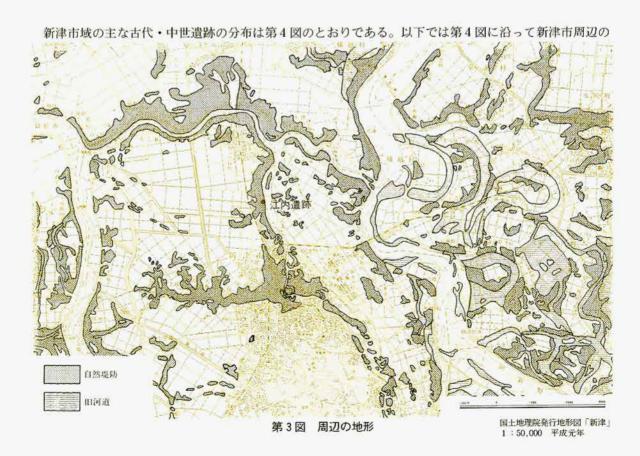
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1. 位置と地理的環境

江内遺跡は新潟県新津市大字川口字江内31番地ほかに所在し、標高は4~5 mを測る。新津市は新潟平野のほぼ中央部に位置し、東西11.4km、南北12.1km、面積77.99km、人口64,877人(平成元年7月現在)の中都市である。東は阿賀野川を境に北蒲原郡京ケ瀬村・水原町・安田町に接し、西は信濃川を境に白根市、南は新津丘陵を挟んで五泉市・中蒲原郡小須戸町、北は小阿賀野川を境に新潟市・中蒲原郡横越村と接する。市の中央部にはJR信越本線が縦貫し、新津駅で羽越本線・磐越西線と連節する。また、かつては県内随一といわれる油田を持ち、鉄道の町・石油の町と称されていた。

新津市の地勢は阿賀野川・信濃川が形成した沖積平野、南東の新津丘陵、その裾野に広がる台地・段丘の3つに大別できる。市域の大部分を占めるのは沖積平野であり、これは北に向かって緩やかに傾斜し、水捌けの悪い低地帯になっている。この中には旧自然堤防・微高地が点在する。これらの多くは阿賀野川が形成した自然堤防であり、阿賀野川が西から東へと流路を変更させてきた結果と考えられている(鈴木1975)。旧自然堤防・微高地上には古墳時代から中世の遺跡のほか多くの新田村が存在するが、江内遺跡もこのような旧自然堤防上に位置する。

2. 周辺の遺跡



遺跡分布について概要を述べるが、これについては『沖ノ羽遺跡』[石川他1994]、『細池・寺道上遺跡』 [小池他1994] に詳しいので、詳細についてはこれらを参照していただきたい。

新津市の南東に存在する新津丘陵は、旧石器~弥生時代の遺跡がいくつか見られ、古くから人々の活動の場となっていた。

弥生時代後期になると二重の環濠を持つ大規模な高地性集落である八幡山遺跡が成立し、古墳時代前期には新津八幡山古墳が築かれる。このことは当地に一定の政治勢力が存在したことを示すとともに、畿内から越前・能登を経て蒲原平野に至り、会津へ抜ける際の陸路の要衝と意識された結果であろう(甘粕1993・川村1993)。奈良・平安時代になると、かっては地域の王の奥津城であった丘陵地に多くの須恵器窯・製鉄遺跡などが作られ、工業地帯へと変貌する。ただしこれらの須恵器窯・製鉄遺跡は中世には至らず消滅する。中世には東島城跡・金津城跡など山城が作られ、防御的機能を持った施設が再度出現する。近世・近代にはふたたび陶器作りや石油の採掘などが行われるようになり、陶器窯や多くの油井が作られたが、現在はこれらは消滅し、丘陵裾部は宅地、他は山林として利用されている。こうした丘陵利用の変化は、当時の政治や権力のあり方を考える上で興味深い。



新津丘陵周辺地域における古代・中世の主要遺跡

1.	長沼遺跡	(奈良・平安、中世)	14.	中郷遺跡	(奈良・平安)		26.	古津初越 A 遺跡 (奈良·平安)
2.	結遺跡	(奈良)		北郷遺跡	(奈良•平安)			大入遺跡 (奈良・平安)
3.	上浦遺跡	(奈良・平安、中世)			(古墳、奈良・平安、	中##)	28.	
4.	川口甲遺跡	(奈良•平安、中世)			(奈良・平安)	/		居村C遺跡 (奈良・平安)
5.	江内遺跡	(中世)	18.	秋葉ブドウ園遺跡	(奈良・平安)			
	沖ノ羽遺跡	(古墳、奈良・平安、中世)	19.	七本松窯跡	(奈良・平安)			
	西沼遺跡	(奈良・平安)	20.	滝谷窯跡	(奈良・平安)		32.	西江浦遺跡 (奈良・平安)
			21.	草水窯跡	(奈良・平安)		33.	寺道上遺跡 (奈良・平安、中世)
	浄楽遺跡	(中世)			(奈良・平安)		34.	組池遺跡 (奈良・平安、中世)
	新津城跡	(中世)		東島城跡	(中世)		35.	山崎窯跡 (奈良)
	小戸下組遺跡		24.	八幡山遺跡・			36.	金津城跡 (中世)
	浄楽遺跡	(中世)			賁(奈良・平安)			
13.	新津城跡	(中世)	25.	東島城跡	(中世)			

第3図 位置と周辺の遺跡

(国土地理院「新津」1:50,000原図 平成3年発行)

3. 川口集落について

一方、北側に広がる沖積地に明確な遺跡が確認できるようになるのは、現在の調査状況からは古墳時代以降である。これらの遺跡は自然堤防上や微高地上に位置することが多い。古墳時代・奈良時代の遺跡数はそれほど多くないが、平安時代に遺跡は増加する。これは、奈良時代から平安時代にかけての生産力の増大という側面は無視できないが、平安時代の遺跡は小規模で短期間で廃絶することが多く、遺跡(集落)の小規模分散化という面も考慮に入れなければならない。中世の遺跡数は平安時代に比べ少ない。古墳~平安時代の遺跡と比較し遺物の出土量の少ない中世の遺跡は、分布調査では発見しづらいという面はあるが、この点を考慮に入れても当期における沖積地の開発はそれほど活発ではなかったであろう。中世および近世初頭にはいまだ多くの未墾地や湖沼が残っていたものと考える。現在の新津市は平野部が街区・宅地・耕地としてくまなく利用されているが、このような景観の形成は慶長から元和にかけての新田村の出現を起点として成立していった可能性が高い。

3. 川口集落について

江内遺跡は現在の新津市川口集落内に位置する。以下では『新津市史』通史編1 (新津市 1994)・『角川日本地名大辞典 15 新潟県』(小村他編 1989) に沿って、近世の川口集落について概要を述べる。

川口集落は新発田藩領であり鎮守は諏訪神社、寺院は真宗大谷派改観寺である。川口という地名の由来は、かつて当地が小阿賀野川と能代川の合流地点であったことからつけられた可能性が高い。

近世の川口集落の成立がいつまで遡るかは明確でないが、元和9 (1623) 年に小須戸在住の二右衛門に 川口新田の開発免許状が新発田藩から出されている。開発免許状は開発前に与えられるものではなく、あ る程度開発が進展したのちに開発人に与えられるものであり、集落の成立は1623年に若干先行する頃であ ろう。

名主は田中家である。田中家の祖先新六郎は本来上杉家の家臣であったが、文禄年間に帰農土着し横越島砂崩(現在の中蒲原郡亀田町)を開発。その後嘉瀬村(現在の新潟市)の肝煎を勤めていたときに二右衛門のあとをうけ川口新田の開発にあたり、息子である仁兵衛が同村の肝煎りに任命された。以後名主は田中家により世襲されるが、幕末には加藤家に変わる。

水利は能代川の三ノ堰から取水する五ケ村江を利用している。能代川を水源とする水利組合には当時、 一ノ堰組、二ノ堰組、三ノ堰組があり、川口新田の利用する三ノ堰組はこのなかではもっとも下流に位置 する。五ケ村江を利用する村には川口新田のほかに結・荻島・中野・車場の4ヶ村があった。

村高は正保 3 (1646) 年が154余石、寛文10 (1664) 年には223余石、天保年間は470余石である。検地は、延宝 5 (1677) 年、寛政 7 (1795)年、文政年間(1818~1830年)頃の小須戸組書上帳で238石、田畑55町余、家数56、人数368人である。

村落の構成は、元禄11 (1698) 年の川口新田宗旨御改帳によれば本家14軒 (129人)、名子21軒 (141人)、間脇12軒 (48人) で、人口は合計318人である。また慶応2 (1865) 年両組産業開物之巻によれば、家数6 1、大工・木挽・屋根葺・紺屋・髪結・ざる作り・船乗り・漁業などがあったことが知られ、幕末には一定量の手工業民が存在した。

なお能代川が氾濫することはしばしばあり、寛政8年(1796)には洪水により家屋の流失11軒、全半壊8軒、罹災者75人があったことが記録されている。

第Ⅲ章 遺跡

1. 調 査 方 法

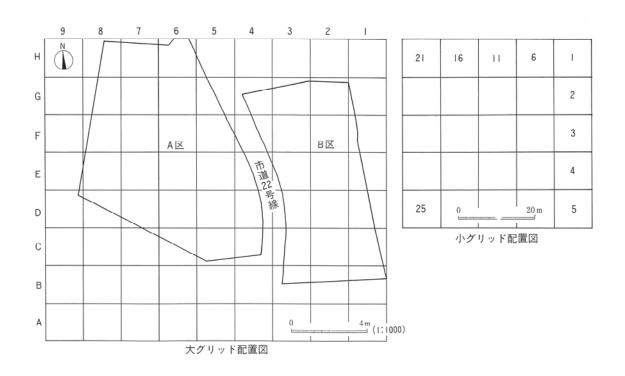
A 調査区の呼称とグリッドの設定

調査区の呼称

本遺跡は阿賀野川左岸の川口集落内に位置しており、市道22号線およびこれに沿った農業用水路が調査 区内を横断する。これらの機能を停止させて調査を行うことは不可能であるため、市道22号線を境に調査 区を二分し、先行して調査を行った東側の調査区をA区、A区の調査終了後に調査に着手した西側をB区 とした。

グリッドの設定(第5図)

調査の合理性を考え、磐越自動車道のセンター杭を用いて、これをグリッドの基準線とした。センター 杭881と882を結ぶ方向を横軸とし、これに直行する方向を縦軸とし、 $10\,\mathrm{m}$ 方限を組みこれを大グリッドとした。グリッドの縦軸の方向は真北より $2\,\mathrm{g}$ 30分西傾する。また、グリッドは東-西方向を算数字、南-北方向をアルフアベットとし、この組合せにより表示した。大グリッドはさらに $2\,\mathrm{m}$ 方眼に細分し、 $1\sim250\,\mathrm{m}$ グリッドとしE $4-160\,\mathrm{m}$ のように表記した。



第5図 グリッド設定図

B. 基本的な調査工程

排水方法

調査区は沖積地であるため調査区内の排水は不可欠であった。そのため調査前に調査区の周囲をめぐる 暗渠を敷設し、集水桝を設け電動ポンプで常時強制排水を行った。暗渠は幅50~100cm、深さ150~200cm の深さをバックフォーで掘削し、多孔の塩化ビニール管を入れたのち砕石で充塡したものである。また暗 渠以外にも調査区内の状況に応じて適宜排水溝を人力で掘削した。

盛土・包含層削平

A・B区ともに厚い盛土が存在したためバックフォーによる掘削を行った。また出土遺物の多少に応じ、バックフォーによって包含層掘削を行った箇所もある。ただしバックフォーによる包含層の掘削中に、多くの遺物が出土したり、遺構と考えられる覆土などが検出された場合は、その場の包含層を残し、人力による掘削に切り替えた。

層序確認

調査区の面積が比較的広いA区は、十字にセクションベルトを残し、必要に応じ1/20縮尺でセクションベルトの一部を実測した。また排水溝や調査区の周囲をめぐる壁面なども土層観察に利用した。調査区の面積の狭いB地区については調査区東側と北側の壁面を精査し、土層観察を行いA区同様必要に応じ1/20縮尺でセクションベルトの一部を実測した。

遺構精査・発掘

包含層掘削が終了したのち、ジョレン・鶴首ホー (手ジョレン) を用いて遺構の平面的な広がりを確認するための作業を行った。

遺構発掘はセクションベルトを残して掘るか、半截したのちに土層観察・写真撮影・土層断面実測等を 行ったのち完掘した。ただし明確な柱痕や柱根のないピットについては、野帳などにに覆土の状況のメモ を行い、完掘したものもある。

遺構番号は土坑(SK)・井戸(SE)・溝(SD)・不明遺構(SX)と掘立柱建物(SB)では別の通し番号を付けた。またピットについては大グリッドごとに通し番号をつけ、E4・ピット25のように表した。

遺構実測

土坑・井戸・溝については縮尺1/20の土層断面図を調査員もしくは作業員が作成した。遺構平面図については一部を除き業者に委託し、縮尺1/40の航空測量を行った。

掘り残し確認調査

各地区の調査が終了したのち、調査区の全体または一部を削平し、掘り残した遺構の有無を確認した。 遺構を確認した際は、発掘・写真撮影・実測を行い記録に加えた。

2. 層 序

江内遺跡は調査区の長さ約80m,幅約50mを測る。標高は4.0~5.0m、遺跡の現状は宅地である。現地 形は西から東に向かっていったん高くなり、以後再び東に向かって低くなるが、これは旧地形とほぼ一致 する。調査区内の層序は宅地造成の際の改変、旧地形の様子により、土色・堆積する土層に若干の違いが あるものの、基本的には地形の傾きに沿って堆積する。基本層序は I \sim IV 層に区分したが、 II 層についてはさらに $a \cdot b$ の 3 層に区分した。以下、各層ごとに概要をのべる。

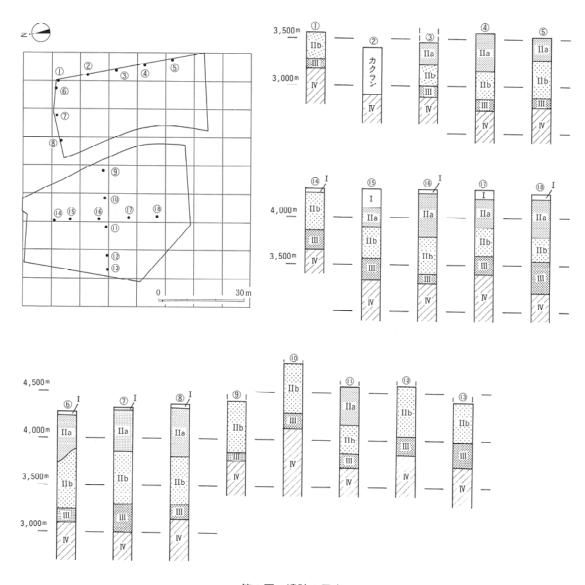
I 層:表土層

II層: 2層に細分した。ともに洪水堆積層と考える。

II a 層 茶褐色シルト層。 $1\sim 2$ cm前後の茶褐色シルトブロックを小量含む。東側(B区)に厚く堆積する。

II b層 茶褐色シルト層。混入物をほとんど含まない均質な土層である。調査区にほぼ満遍無く存在する。厚さは40cm前後であり、17~18世紀代と考える遺構の履土上層に堆積している例がいくつかみられる。本層位の上面から掘り込まれている遺構には出土遺物から考え18世紀末から19世紀代のものがある。文献に残る寛政8年の洪水の際に堆積した土層である可能性が高い。

III層:灰色粘土層。中・近世の遺物包含層である。B地区からA地区にかけて漸移的に茶色味を増し、 土層を構成する粒子も粗くなるが、A区西側では再び灰色味が強くなり、構成する粒子も細かく なる。厚さはほぼ均質で20cm前後である。

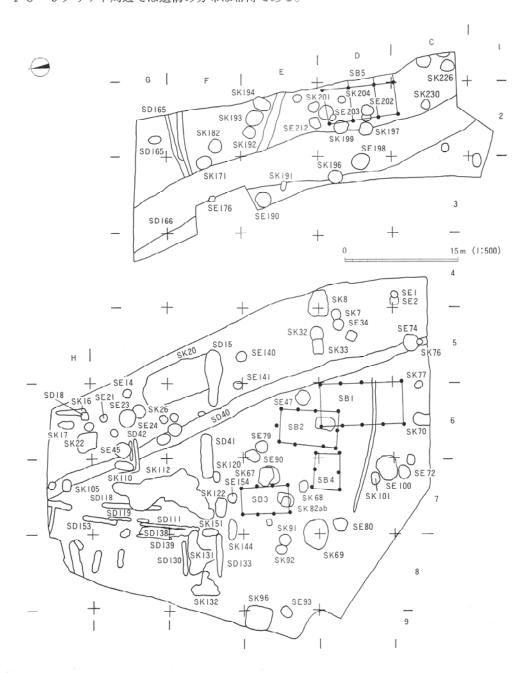


第6図 遺跡の層序

Ⅳ層: 黄褐色シルト層。いわゆる地山である。B区南側ではグライ化が進み、青灰色を呈する。下位になるほど粒子が荒くなる傾向がある。

3. 概 観

A区は近世の遺構が大半を占める。中世の遺構はSD40がその可能性があるが、ほかには存在しない。近世の遺構は $D\sim H5\sim 7$ グリッド周辺に集中し、掘立柱建物・井戸・土坑などが確認できる。またG・H5・6 グリッドからは建物跡は確認できなかったが、近世の井戸・土坑が比較的まとまって検出された。近世の井戸の中には石組みの水溜めを持つものや木製の井戸側を持つものも存在する。G・ $H7\sim 9$,D・E・F8・9 グリッド周辺では遺構の分布は希薄である。



第7図 遺構配置模式図

B区は西側を南北方向に流れるSD166が中世の遺構であり、中世の土坑(SK203)も存在する。近世の遺構は $C \cdot D2$ グリッドに土坑・井戸・ピットなどが集中する。

遺物は中世のものはA区に少なく、B区に多い。B区SD166からは中世の土器・陶磁器・木器が多く 出土した。近世はA区SD15・SK8・20・SD41・SK69・96・112、B区SK190・198から土器・陶 磁器・木製品がまとまって出土した。

4. 遺 構 各 説

SE1 (図版2・3・50)

D4 にある円形の素掘り井戸。SE2 を切る。直径90~100cm、深さ80cmを測る。底面はやや内彎し、側壁はわずかに外傾して立ち上がる。覆土はレンズ状堆積であり、2 層に分かれる。上層は灰色シルト、下層は青灰色粘土である。遺構覆土に茶褐色シルトを含まない。寛政8(1796)年以後に構築された遺構である。陶器灯明皿(図版26 219)が出土している。

SE2 (図版2・3)

 $D4 \cdot 5$ にある隅丸方形の素掘り井戸。SE1 に切られる。長さ110cm、幅90cm、深さ90cmを測る。底面は内彎し、側壁はわずかに外傾して立ち上がる。覆土はレンズ状堆積であり、大きく2 つに分かれる。上層($1 \sim 3$ 層)は茶褐色ないしは暗茶褐色シルトを基調とする土層であり、下層は暗灰色ないしは暗青灰色粘土に地山ブロックが混じる土層である。上層の茶褐色ないし暗茶褐色シルトを基調とする土層は寛政 8(1796)年の洪水堆積層と考える。寛政 8 年以前に構築・廃棄された遺構である。肥前系磁器椀の小片のほか軽石がまとまって出土した。

SK7 (図版2・3)

D 5 にある略円形の土坑。 S E 34に切られる。長軸150cm、短軸130cm、深さ30cmを測る。底面から緩く外傾して立ち上がる。 覆土は 2 層で上層が暗灰色土、下層が灰色シルトである。 寛政 8 (1796) 年には完全に埋没していた遺構と考える。 遺物は出土していない。

SK8 (図版2・3・50)

E5にある略台形の土坑。SE9・10を切る。近世の遺物がまとまって出土したが(図版22 128~148)、近・現代のガラス片・陶磁器なども出土したため、調査時は近・現代の攪乱と考えたが、近現代のガラス片・陶磁器は部分的な攪乱から出土したもので、SK8は近世の遺構である可能性が高いと現在は考えている。長軸350cm、短軸260cm、深さ106cmを測る。底面はほぼ平坦で、側壁は外傾して立ち上がるが、北壁に比べ南壁の立ち上がりは急である。覆土はレンズ状堆積であり、茶褐色シルトは含まない。寛政8(1796)年以後に構築された遺構である。

SE9 (図版2・3)

 $D5 \sim E5$ にまたがってある素掘り井戸。大半はSK8に切られるが、直径120cm前後の略円形となるものと思われる。深さは110cmを測る。底面は内彎し、南壁はわずかに外傾して立ち上がる。覆土はレン

4. 遺構各説

ズ状堆積であり、大きく2層に分けられる。上層(1・2層)は黄褐色シルト混茶褐色シルト、下層は暗 青灰色粘土である。上層は寛政8(1796)年の洪水堆積層と考える。寛政8年以前に構築・廃棄された遺 構である。遺物は出土していない。

SE10 (図版2・3)

E5にある円形の素掘り井戸。SK8に切られる。平面形は直径90cm前後の略円形になるものと考える。深さは90cmを測る。底面は彎曲し、側壁はわずかに外傾する。覆土はレンズ状堆積であり、3層に分かれる。1・2層が茶褐色シルトを基調とする土層、3層が暗青灰色粘土である。1・2層は寛政8 (1796)年の洪水堆積層と考える。寛政8年以前に構築・廃棄された遺構である。遺物は出土していない。

SE34 (図版2 · 3 · 50)

D5にある円形の素掘り井戸。直径は144~154cm、深さ106cmを測る。底面は内彎し、側壁はやや外傾して立ち上がるが、南壁は途中段をもつ。覆土はレンズ状堆積であり、暗青灰色粘土ブロック混茶褐色シルト層(4層)を境に2分でき、これより上層(1~3層)は茶褐色シルトを基調とする土層、これより下層は暗青灰色粘土であり、上層は寛政 8 (1796) 年の洪水堆積層と考える。寛政 8 年以前に構築・廃棄された遺構である。出土遺物には陶器擂鉢(図版30 329)がある。

SK32(図版2・3)

D・E5にある土坑。西側をSK33に切られ、東側は攪乱を受けているが、長軸230cm、短軸170cm前後の楕円形になるものと考える。深さは60cmを測る。底面は彎曲し、側壁は外傾するが、南壁に比べ北壁は立ち上がりが急である。覆土はレンズ状堆積。上層の茶褐色シルトは寛政8(1796)年の洪水堆積層と考える。寛政8年以前に構築・廃棄された遺構である。遺物は出土していない。

SK33(図版2・3)

D・E 5 にある方形の土坑。 S K32を切る。長軸160cm、短軸140cm、深さ70cmを測る。底面は西側に傾斜し、側壁は外傾する。覆土はレンズ状堆積であり、黒褐色シルト (7層)を境に2層に大別できる。上層 (1~6層)は暗茶褐色ないしは暗灰褐色シルト質粘土を基調とする土層、下層 (8・9層)は砂粒を多く含む土層である。覆土に茶褐色シルトを含まない。寛政8 (1796)年以後に構築された遺構である。遺物は出土していない。

SE47 (図版2・3・50)

E6にある円形素掘りの井戸。径190~200cm、深さ140cmを測る。底面はほぼ平坦、側壁は南北両壁ともはば垂直に立ち上がるが、途中に段をもちち、外傾してのびる。覆土はレンズ状堆積であり、暗青灰色粘土ブロック混青灰色粘土層(3層)を境に2つに分かれ、上層(1・2層)は茶褐色シルトを基調とする土層、下層(5層)は暗青灰色粘土を基調とする土層である。上層の茶褐色シルトは寛政8(1796)年の洪水堆積層と考える。寛政8年以前に構築・廃棄された遺構である。底面付近からは焼礫が複数出土した。遺物は陶磁器椀・皿・擂鉢(図版19 64~68)、木製品(図版36 17~20)が出土した。

SE74 (図版2・3)

C 5 にある円形の素掘り井戸。上半は攪乱をうけている。またS D40を切りS K76に切られる。検出面で径200~240cm、深さ110cmを測る。底面は内彎し、側壁は外傾する。遺物は肥前系磁器椀(図版26 229)が出土している。17世紀後半を中心とする時期のものと考える。

SK76 (図版2・3)

C 5 にある円形の土坑。上半は攪乱を受けている。S D40・S E74を切る。検出面で直径70~80cm、深 さ68cmを測る。底面はほぼ水平、東側壁はほぼ垂直に立ち上がるが、西側壁は途中に段をもつ。覆土はレンズ状堆積。18世紀以降のものと考える。遺物は出土していない。

SK77 (図版2・3)

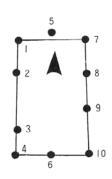
C 5 にある円形の土坑。上半は攪乱を受けている。検出面で直径80~90cm、深さ50cmを測る。底面はほぼ水平で側壁はやや外傾しながら立ち上がる。年代は特定できない。遺物は陶器擂鉢(図版31 334)が出土している。

SK49 (図版4 • 5)

D6 にある隅丸方形の土坑。長さ264cm、幅154cm、深さ50cmを測る。底面はほぼ平坦であり、側壁はわずかに外傾して立ち上がる。土坑北側の覆土中位付近から、樹皮の残る木柱が東西方向に2本、南北方向に1本直交して検出された。用途は不明。SB2-ピット1を切る。覆土は3層に分けられ、 $2\cdot 3$ 層は混入物の少ない精良な青灰色粘土層である。時期を決定できるような遺物は出土していない。

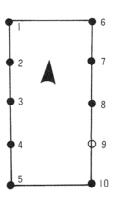
SB1 (図版4・5・51)

D・E6にある梁間2間(430~480cm)、桁行4間(750cm)の南北棟建物(N-4-E)。平面積は34.9㎡である。東桁行の柱穴3、北妻の柱穴6は検出されなかった。柱間寸法は北から西桁行が190cm・400cm・150cm、東桁行が210cm・200cm、160cm・150cm、北梁間は430cm、南梁間は西から230cm、250cmと不揃いである。柱掘方は径40~100cm、深さ20~45とかなりばらつきが見られる。柱掘り方の埋土は茶褐色シルトを基本とする。近世の遺構と考える。



SB2 (図版4・5・51)

 $C \cdot D$ にある梁間 1 間 (550cm)、桁行 4 間 (1120cm)の南北棟建物 (N-1-W)。平面積は61.6㎡である。東桁行の柱穴 9 は検出されなかった。柱間寸法は東・西桁行ともいずれも約275cmとほぼ等間隔、南・北梁間は約550cmと桁行の柱間寸法の倍である。柱掘方は径80~150cm、深さ60~80cm、柱掘方の埋土は灰色シルトを基本とし、覆土には茶褐色シルトを含まない。柱根は柱穴 4 ・ 5 で、柱痕は柱穴 2 ・ 7 で確認された。寛政 8 (1796)年以前に構築された遺構と考える。遺物は柱穴 5 から肥前系陶器皿 (図版 22 127)、柱穴 8 からは肥前系磁器皿 (図版 22 126)が出土した。



4. 遺構各説

SK70(図版4・5)

C6にある隅丸長方形になると思われる土坑。南側は暗渠に切られ、北側は攪乱を受けている。南側に さらにのび、溝となる可能性もある。幅140cm、深さ35cmを測る。底面は内彎し側壁は外傾する。年代は 特定できない。寛政8 (1796) 年以後に構築された遺構である。

SE79 (図版4 · 5 · 52)

E6にある円形の素掘り井戸。直径146~150cm、深さ80cmを測る。底面はほぼ水平で、側壁はやや外傾する。覆土はレンズ状堆積。最上層の茶褐色シルトは寛政8(1796)年の洪水堆積層と考える。寛政8年以前に構築・廃棄された遺構である。遺物は出土していない。

SE90 (図版7·16·52)

E 6・7にある円形の掘り方をもつ井戸。掘方は径120~140cm、深さ210cmを測る。井戸側は縦板を組合せタガで巻いたもの(桶の底を抜いたもの)を二段に重ねる。上段は、長さ87~93cm、最大幅10.2~15.0cm、厚さ2~3cmの縦板を用い、下端15cmのところに一箇所タガを巻く先細りの形態である。下段のものも上段とほぼ同じ形態のものであるが、上端から15cmと、下端から10cmのところに二ヶ所タガがある。タガの材質はいずれも竹。上段と下段の結合には何も用いず、キャップ状にはめ込むだけである。遺構覆土の上層は茶褐色シルトがレンズ状に堆積していた。寛政8(1796)年以前に構築・廃棄された遺構である。遺物は肥前系磁器小片が出土している。

SE100 (図版4 · 5 · 53)

D7にある円形の掘り方をもつ井戸。掘方は径120~140cm、深さ160cmを測る。底面は内彎し、側壁は外傾して立ち上がる。SE72に切られる。水溜めは、人頭大の自然礫を擂鉢状に最高4段に積み重ねる。使用した自然礫の石材はチャート・花崗岩が多い。井戸側は確認できない。遺構覆土には茶褐色シルトを含まない。寛政8(1796)年以後に構築された遺構である。遺物は肥前系磁器椀・皿(図版19 75・76)がある。

SE72 (図版6·7)

D7にある円形素掘りの井戸。径160~190cm、深さ80cmを測る。底面は内彎し、側壁は外反して広がる。 覆土はレンズ状堆積。覆土上層の茶褐色シルトは寛政8 (1796) 年の洪水堆積層と考える。遺物は出土していない。寛政8年以前に構築・廃棄された遺構である。

SK68 (図版6 · 7 · 52)

E7にある隅丸方形の土坑。長さ152cm、幅116cm、深さ45cmを測る。底面はほぼ平坦であり、側壁はやや外反ぎみに立ち上がる。覆土は3層に分けられ、レンズ状堆積。茶褐色シルトは含まない。寛政8 (1796) 年以後に構築された遺構である。遺物は出土していない。

SK69 (図版6 • 7)

D・E 7・8 にある楕円形の土坑。長軸400cm、短軸320cm、深さ72cmを測る。底面は南に向かって緩や

かに傾斜する。側壁は外傾して立ち上がるが、北壁に比べ南壁の立ち上がりは急である。覆土はレンズ状 堆積。寛政 8 (1796) 年以後に構築された遺構である。土器・陶磁器 (図版22・23 143~167)・木製品 (図版36 21~26) がまとまって出土した。

SE80 (図版6 · 7 · 52)

D7にある円形の素掘り井戸。長軸180~196cm、深さ145cmを測る。底面はやや彎曲し、側壁はともに外傾するが、北壁に比べ南壁の立ち上がりが急である。覆土はレンズ状堆積であり5層は炭化物、6・7層は小枝や木の葉などの植物遺体を多量に含む層である。寛政8(1796)年以後構築された遺構である。土器・陶磁器(図版24・29 183~185・319)の他に木製品(図版37 27~34)がまとまって出土した。

SK82a (図版6 · 7 · 52)

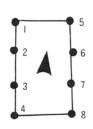
E7にある隅丸方形の土坑。長さ216cm、幅140cm、深さ32cmを測る。底面はわずかに南側に傾斜する。 側壁は内彎して立ち上がる。SK82bを切る。覆土はレンズ状堆積であり4層に分けられ、最上層は暗茶 褐色シルト質粘土である。遺物は出土していない。寛政8(1796)年以後に構築された遺構である。

SK82b (図版6 · 7 · 52)

E7にある隅丸方形の土坑。長さ128cm、幅116cm、深さ46cmを測る。底面は彎曲し側壁は内彎して立ち上がる。北半をSK82aに切られる。覆土は遺存しているところでは暗褐色シルトの単層。遺物は出土していない。近世の遺構である。SB3と関連する可能性がある。

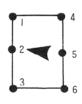
SB3 (図版6・7・54)

E 7 にある梁間 1 間 (350~370cm) ×桁行 3 間 (645cm) の南北棟建物 (N-4-E)。 平面積は23.3 m²である。柱間寸法は西桁行が北から200cm・225cm・225cm、東桁行はいずれも215cmで等間隔である。柱掘方は径75~100cm、深さ40~65cmである。柱穴のの覆土上層には茶褐色シルトがレンズ状に堆積していた。柱穴からは柱根は出土していない。またいずれの柱穴もセクションに明確な柱痕が確認できなかった。寛政 8 (1796) 年以前に構築・廃棄された遺構である。柱穴 5 からは石臼が出土した。



SB4 (図版6 · 7)

 $D6 \cdot 7$ 、 $E6 \cdot 7$ にある梁間1間 (340~360cm) ×桁行2間 (470~500cm) の東西棟建物 (N-1-W)。平面積は17.0㎡である。柱間寸法は南桁行が約250cmでほぼ等間隔、北桁行が東から220cm・250cmである。柱掘り方は径60~80cm、深さ約40cm前後である。柱掘方の埋土は茶褐色シルトを基本とする。寛政8 (1796) 年以前に構築廃棄された遺構である。



E 7 ・ピット10 (図版 6 ・ 7 ・53)

E7にある方形の土坑。長さ80cm、幅66cm、深さ56cmを測る。底面はほぼ水平で側壁は直立気味に立ち上がる。覆土はレンズ状堆積。寛政8(1796)年以後に構築された遺構と考える。遺物は肥前系磁器椀・

4. 遺構各說

仏飯器等(図版19 69~72)が出土した。

E8・ピット2・3 (図版6・7)

ピット 2 は径75~110cm、深さ56cm、ピット 3 は径50~55cm、深さ16cmを測る。ピット 3 はピット 2 を切る。ピット 3 の底面はほぼ平坦であり、側壁は外傾して立ち上がる。覆土はピット 2 ・ 3 ともにレンズ 状堆積である。年代は特定できない。遺物は出土していない。

SK91 (図版6 · 7 · 52)

E8にある円形の土坑。径148~156cm、深さ35cmを測る。底面はほぼ水平、側壁は外傾して立ち上がる。 SK92と一部切りあいがあるが、前後関係は不明。覆土はレンズ状堆積で、4層に分かれる。肥前系磁器 椀(図版19 79・80)が出土した。出土遺物から18世紀末から19世紀の遺構と考える。

SK92 (図版6 · 7 · 52)

E8にある惰円形の土坑。長さ124、最大幅152cm、深さ32cmを測る。底面はやや彎曲し、側壁は内彎して立ち上がる。SK91と切り合うが、前後関係は不明。覆土はレンズ状堆積。 $4 \cdot 6$ 層は地山とよく似た土であり、 $2 \cdot 5$ 層は炭化物を多量に含む層である。年代は特定できない。遺物は出土していない。

SE93 (図版6 · 7 · 53)

E9にある円形素掘りの井戸。径124~156cm、深さ89cmを測る。底面はほぼ水平であり、側壁は外傾して立ち上がり、下方で大きく開く。覆土は水平堆積で2層に分けられる。上層に厚く堆積する茶褐色シルトは寛政8(1796)年の洪水堆積層と考える。寛政8年にかなり近接した時期まで機能していた遺構である。遺物は陶器擂鉢(図版30 327)が出土した。

SE140 (図版8 · 9 · 50)

E5にある円形の素掘り井戸。径130~140cm、深さ140cmを測る。底面は内彎し、側壁は外反して広がる。覆土はレンズ状堆積。1層の茶褐色シルトは寛政8 (1796) 年の洪水堆積層と考える。寛政8年以前に構築・廃棄された遺構である。遺物は出土していない。

SE141 (図版8・9)

E5にある円形素掘りの井戸。径100~110cm、深さ110cmを測る。底面は内彎し、側壁はほぼ垂直に立ち上がり、上端付近でやや開く。覆土はレンズ状堆積。1層の茶褐色シルトは寛政8(1796)年の洪水堆積層と考える。寛政8年以前に構築・廃棄された遺構である。木片が出土したが、遺物は出土していない。近世の遺構と考える。

SD15 (図版8 · 9 · 55)

F 5 ・ 6 区にある東西にのびる溝。長さ840cm、幅120~240cm、深さ60~80cmを測る。底面は内彎し側壁は外傾して立ち上がる。また中央よりやや西側に段があり、これより西側は浅くなる。 S K20を切る。 覆土はレンズ状堆積。寛政 8 (1796) 年以後に構築された遺構である。陶磁器 (図版18 $21\sim36$)・石製

品(図版34 42~44)・木製品(図版39 50)がまとまって出土した。

SK20 (図版8・9・55)

F・G-5・6にある楕円形で大型の土坑。南端をSD15に切られるが、長軸8m以上、短軸4.9m、深さ60cmを測る。底面はほぼ平坦で、側壁は外傾して立ち上がる。覆土の $1\sim5$ 層はレンズ状堆積であるが、最下層(6層)の粘土混じり青灰色砂層は水平に堆積する。最上層の茶褐色シルトは寛政8(1796)年の洪水堆積層と考える。寛政8(1796)年以前に構築・廃棄された遺構と考える。遺物は $1\sim5$ 層にかけて土器・陶磁器(図版18 $37\sim53$)、石器(図版33 $34\cdot35$)などが出土した。

SE14 (図版8 · 9 · 57)

G6にある円形素掘りの井戸。径110~120cm、深さ90cmを測る。底面は内彎し、側壁はわずかに外傾する。覆土はレンズ状堆積で、3層に分かれる。1・2層の茶褐色シルトを基調とする土層は寛政8(1796)年の洪水堆積層と考える。寛政8年以前に構築・廃棄された遺構である。2層下部から大量の軽石が出土した。

SK16 (図版8 • 9)

H6にある隅丸方形の土坑。南東は攪乱を受ける。最大幅95cm、深さ40~50cm、長さは150cm前後になるものと思われる。底面はわずかに彎曲し、側壁は内彎して立ち上がる。SD18との切り合うが、前後関係は不明。覆土はレンズ状堆積。最上層は茶褐色シルトであり、これは寛政8年(1796)の洪水堆積層と考える。寛政8年以前に構築・廃棄された遺構である。遺物は出土していない。

SD18 (図版8・9)

H~6 にある南北にのびる溝。最大幅84cm。深さ30~40cmを測る。底面は彎曲し、側壁は内彎して立ち上がる。南よりに段があり、これ以南は深さ40cmと、深くなる。S~K16と切り合うが前後関係は不明。肥前系磁器椀(図版26 243)・軽石が出土している。

SE21 (図版8・9)

H6にある円形素掘りの井戸。径112~116cm、深さ100cmを測る。底面はほぼ水平であり、側壁はわずかに外傾して立ち上がる。覆土はレンズ状堆積。最上層は黄褐色シルト混茶褐色シルトであり、これは寛政8 (1796) 年の洪水堆積層と考える。寛政8年以前に構築廃棄された遺構である。肥前系磁器椀・皿(図版19 77・78) が出土した。

SK22 (図版8・9)

H6にある方形で歪んだ形の土坑。長軸250cm、短軸240cm、深さ26cmを測り、断面は浅い皿状となる。 年代は不明。遺物は出土していない。

SE23 (図版8・9)

G6にある円形の素掘り井戸。直径96~104cm、深さ70cmを測る。底面はほぼ水平であり、側壁はわず

4. 遺構各説

かに外傾して立ち上がる。覆土はレンズ状堆積。最上層の茶褐色シルトは寛政8 (1796) 年の洪水堆積層 と考える。寛政8年以降に構築・廃棄された遺構である。遺物は出土していない。

SE24(図版8)

G6にある円形の素掘り井戸。直径84~92cm、深さ100cmを測る。底面はほぼ水平であり、側壁はわずかに外傾して立ち上がる。覆土はレンズ状堆積。遺物は出土していない。

SE25 (図版8・9・57)

G6にある円形の素掘り井戸。直径220~240cm、深さ115cmを測る。側壁は途中段をもち、これより上はほぼ垂直に立ち上がる。SK26に切られる。覆土は9層に分けられ、 $1 \cdot 8 \cdot 9$ 層はレンズ状堆積であるが、 $2 \sim 7$ 層はほぼ水平に堆積する。 $5 \cdot 7$ 層は小枝や木の葉などの植物遺体を多く含む。1層の茶褐色シルトは寛政8(1796)年の洪水堆積層と考える。寛政8年以前に構築・廃棄された遺構である。

SK26 (図版8・9・57)

G6にある円形の土坑。径176cm、深さ24cmを測る。底面は彎曲し、側壁も内彎気味に立ち上がる。S K25を切る。寛政8年以後に構築された遺構である。遺物は出土していない。

SK27 (図版8・9)

F6にある円形の土坑。径98~112cm、深さ28cmを測る。底面は北から南へゆるく傾斜し、側壁は外傾して立ち上がるが、北壁にくらべ南壁の立ち上がりは急である。1層の茶褐色シルトは寛政8 (1796) 年の洪水堆積層と考える。寛政8年以後に構築・廃棄された遺構である。遺物は出土していない。

SE28 (図版8・9・56)

G6にある円形の素掘り井戸。径108~112cm、深さ80cmを測る。底面は彎曲し、側壁はほぼ直立する。 覆土はレンズ状堆積。1層の茶褐色シルトは寛政8 (1796) 年の洪水堆積層と考える。寛政8年以前に構築・廃棄された遺構である。遺物は出土していないが、4層(最下層)中位からは焼礫が出土した

SK17(図版8)

H6にある幅円形の土坑。長軸204cm、短軸100cm、深さ32cmを測る。底面は北から南に向かって緩やかに傾斜し、側壁は外傾する。覆土はレンズ状堆積。最上層の茶褐色シルト層は寛政8 (1796) 年の洪水堆積層と考える。寛政8年以前に構築・廃棄された遺構と考える。遺物は出土していない。

SK29 (図版8・9)

F6にある幅円形の土坑。長軸124cm、短軸76cm、深さ44cmを測る。底面は内彎し、北壁は外傾して立ち上がるが、南側壁は途中に段をもつ。覆土はレンズ状堆積。上層の茶褐色シルト層は寛政8 (1796) 年の洪水堆積層と考える。寛政8年以前に構築・廃棄された遺構である。遺物は出土していない。

SD40(図版8・9)

南南東一北北西方向に直線的にのびる溝。両端とも調査区外までのびる。幅 $160\sim270$ cm、深さ $140\sim160$ cm前後である。SE74・SK76・SB1ーピット5・SE44・45・SK1 $10\cdot155\cdot156$ 等に切られる。底面はわずかに彎曲し、側壁は内彎気味に立ち上がる。覆土はレンズ状堆積。最下層には黒化した植物遺体を少量含む層がある。遺物は出土していない。後述する中世の溝SD166とほぼ並行しており、中世にさかのぼる可能性がある。

SD41 (図版8 · 9 · 57)

F6・7にまたがる溝。東西方向にのびる。長さ740cm、最大幅108cm、深さ52~60cmを測る。底面中央よりやや南側に段がありそれ以南はやや浅くなる。側壁は外反気味に立ち上がる。覆土はレンズ状堆積。最上層の茶褐色シルトは寛政8(1796)年の洪水堆積層と考える。陶磁器(図版19 54~60)・木製品(図版39 49)が出土した。

SE45 (図版8 · 9 · 16 · 56)

G6区にある円形の掘り方をもつ井戸。掘り方の大きさは径210~248cm、深さ290cmを測る。井戸側は縦板を先細りの円筒形にタガで巻いたもの(桶の底板を抜いたもの)を3段に重ね、その外側に縦板を方形に組み四隅に柱を立て横桟で保持したものがつく。

内側の円筒の直径は、上段の上端は不明だが、下端は66cm、中段は上端59cm、下端72cm、下段は上端62cm、下端70cmである。これに用いる縦板は、上段のものは腐食で長さはわからないが、幅は13~20cm、厚さ2~3 cm、中段は長さ90~93cm、幅10~20cm、厚さ約2 cm、下段は長さ90~93cm、幅10~16cm、厚さ約2 cmである。中・下段の円筒には上端・下端付近の2ヵ所にタガが付く。タガの材質は竹。円筒同土の結合には特別なものは用いず、キャップ状にはめ込むだけである。

外側の方形枠は一辺約80cmであり、これに使用する縦板は長さ200cm以上、厚さ約3 cmで、一辺4 枚前後となる。また四隅の柱は、一辺約9 cm前後の角柱を用いる。横桟は2 $_{n}$ 所にあり、結合にはホゾ穴を用いる。横桟の材は幅8~10cm、厚さ約4 cmである。肥前系磁器椀・皿等(図版19 $_{61}$ ~63)が出土した。出土遺物から考え17世紀末~18世紀にかけての遺構と考える。

SK110 (図版8・9)

G7区にある長円形の土坑。長さ194cm、最大幅84cm、深さ23cmを測る。底面はほぼ平坦であり、側壁は内彎気味に立ち上がる。覆土は寛政8 (1796) 年の洪水堆積層と考える茶褐色シルトの単層である。肥前系陶器鉢(図版29 313) が出土した。

SD42・43 (図版8)

G7・8区にある溝。S D42は東西方向に伸びるが、S D43は途中で「L」字状に屈曲する。断面形は「U」字型で深さは $15\sim20$ cm。覆土は寛政8(1796)年の洪水堆積層と考える茶褐色シルトの単層である。S D43からは軽石および肥前系陶器擂鉢(図版30 324)が出土した。

4. 遺構各説

SK105 (図版10·11)

H7にある隅丸方形の土坑。長さ156cm、幅124cm、深さ41cmを測る。底面は彎曲し、側壁はほぼ垂直に立ち上がる。SD40を切る。覆土は水平堆積で2層に分けられる。寛政8 (1796) 年以後に構築された遺構である。遺物は出土していない。

SK112 (図版10·11)

F・G6・7にある不整形で大型の土坑。長軸約14m、短軸約6.6mを測る。近・現代の磁器とともに近世の土器・陶磁器が出土したため調査時は近・現代の攪乱と考えたが、近・現代の磁器は部分的な攪乱から出土した可能性も高い。ただしその場合でも寛政8 (1796) 年以後に構築されたものである。土器・陶磁器 (図版24 175~182)・土製品 (図版32 12~14)・石製品 (図版34 45・46) が出土した。

SK120 (図版10·11·58)

F7にある隅丸長方形の土坑。長さ121cm、幅96cm、深さ22cmを測る。底面は彎曲し、側壁は内彎気味に立ち上がるが、南壁は北壁に比べ立ち上がりが急である。覆土はレンズ状堆積。寛政8(1796)年以後に構築された遺構の可能性が高い。遺物は出土していない。

SK122 (図版10·11·58)

F7にある隅丸長方形の土坑。長さ254cm、幅136cm、深さ45cmを測る。底面は狭く、側壁は外傾するが、西壁に比べ東壁の立ち上がりは急である。覆土はレンズ状堆積で5層に分かれ、 $1 \cdot 2$ 層は茶褐色シルトを基調とする土層である。寛政 8 (1796) 年以前に構築された遺構である。遺物は磁器皿(図版20 85~87) 等が出土している。

S E 154 (図版10・11)

F7にある円形の素掘り井戸。径88~104cm、深さ95cmを測る。底面はわずかに内彎し、側壁は両壁ともほぼ垂直に立ち上がるが途中で屈曲し外傾して広がる。覆土はレンズ状堆積で4層に分けられ、最上層の茶褐色シルト層は寛政8 (1796) 年の洪水堆積層と考える。寛政8年以前に構築・廃絶した遺構と考える。遺物は出土していない。

S D116 (図版10·11·58)

G7にある南-北方向にのびる溝。長さ780cm、最大幅56cm、深さ24cmを測る。底面は彎曲し、西側壁はほぼ垂直に立ち上がるが、東側壁はやや外傾する。SK112に切られる。覆土はレンズ状堆積で2層に分かれる。上層の茶褐色シルト層は寛政8(1796)年の洪水堆積層と考える。肥前系磁器椀・徳利(図版20 83・84)が出土した。

S D 153 (図版10·11·58)

G7にある南北にのびる溝。長さ328cm、最大幅60cm、深さ58cmを測る。断面形は「U」字型、覆土は 水平堆積で2層に分かれ、最上層の茶褐色シルト層は寛政8 (1796) 年の洪水堆積層と考える。

SK117 (図版10・11)

G7にある不整円形の土坑。長軸120cm、短軸100cm、深さ42cmを測る。排水溝により一部を切られる。 底面は内彎し、側壁は外傾する。覆土はレンズ状堆積で、3層に分かれ、1層は茶褐色シルトであり寛政 8 (1796) 年の洪水堆積層、3層は炭化物を多量に含む層である。寛政8年以前に構築・廃棄された遺構 である。遺物は出土していない。

S D111 (図版10·59)

G7にある南北にのびる溝。SD139と切り合い関係があるが、前後関係は不明。また南半の形状はわからない。最大幅36cm、深さ15cmを測り、断面形は「U」字型となる。遺物は出土していない。

S D138 (図版10·59)

G8にある南北にのびる溝。長さは778cm、最大幅102cm、深さ12cmを測る。断面形は「U」字型となる。 覆土は寛政8年(1996)の洪水堆積層と考える灰色シルト混茶褐色シルトの単層。遺物は出土していない。

SD139 (図版10·59)

G8・9にある南北にのびる溝。SD111、SD138に近接し平行する。長さ482cm、最大幅78cm、深さ16cmを測る。底面は西から東に向かって緩やかに傾斜し、側壁はともに外傾するが西壁に比べ東壁の立ち上がりが急である。覆土は寛政8年の洪水堆積層と考える茶褐色シルトの単層。肥前系磁器蓋(図版28287)が出土している。

SD130 (図版10·11·59)

F8にある東西にのびる溝。長さ442cm、最大幅68cm、深さ14cmを測る。覆土は寛政8年の洪水堆積層と考える茶褐色シルトの単層。磁器椀(図版19 81・82)が出土している。

SD133 (図版10・11・59)

F8にありSD133とほぼ平行し東西にのびる溝。長さ452cm、最大幅56cm、深さ30cmを測る。断面形は「U」字型、覆土は水平堆積で2層に別れ、上層は寛政8年(1796)の洪水堆積層と考える茶褐色シルト層である。遺物は出土していない。

SK151 (図版10・58)

F7にある楕円形の土坑。長軸168cm、短軸80cm、深さ40cmを測る。底面はわずかに内彎し、側壁は南壁に比べ西壁の立ち上がりが急である。SD133と一部切り合うが、前後関係は不明。石製硯(図版3223)が出土した。近世の遺構と考える。

SK144 (図版10・11・58)

F7にある幅円形の土坑。遺構の一部が排水溝によって切られる。長軸292cm、短軸100m, 深さ6cmを 測る。底面はほぼ平坦であり、側壁は内彎して立ち上がる。覆土はレンズ状堆積で2層に分けられる。寛 政8 (1796) 年以前に構築・廃棄され、洪水時には完全に埋没していた遺構と考える。陶器・磁器皿(図 版20 88・89) が出土している。

SD124 (図版10·11·58)

H8にある東西方向にのびる溝。最大幅96cm、深さ18cmを測る。西側が暗渠に切られるため全長は不明。 底面は内彎し、側壁も内彎気味に立ち上がる。SK125を切る。覆土はレンズ状堆積で3層にわかれ2・ 3層には炭化物が多量に混じる。年代を特定できるような遺物は出土していない。

SK125 (図版10·11·58)

H8にある土坑。SD124に切られるため全形は不明だが、径80cm前後になるものと考える。深さ24cmを測る。底面はやや内彎し、側壁は外傾して立ち上がる。覆土はレンズ状堆積で2層に分かれ、下層には炭化物を多く含む。年代は特定できない。遺物は出土していない。

SK131 (図版10·11·59)

F8にある不整形の土坑。短軸114cm、深さ32cmを測る。東側はSD139と切りあっているが、前後関係は不明。長軸は620cm前後になるものと考える。底面はほぼ水平で、側壁は内彎気味に立ち上がる。覆土はレンズ状堆積で4層に分かれ、3層には焼土、4層には炭化物が多量に入る。寛政8(1796)年以後に構築された遺構である。磁器皿、陶器椀・擂鉢(図版24 186~188)が出土した。

SK132 (図版10·11·59)

F8にある不整形の土坑。長軸372cm、短軸312cm、深さ32cmを測る。底面はほぼ平坦で、側壁は内彎気味に立ち上がる。覆土はレンズ状堆積で2層に分かれる。寛政8年(1796)以後に構築された遺構である。遺物は陶器擂鉢(図版31 333)が出土した。

SK129 (図版10·11)

G8にある土坑。約半分を暗渠に切られる。形態は楕円形になるものと考える。長さは不明だが、最大幅176cm、深さ30cmを測る。底面は西に向かって傾斜し、東壁は外傾して立ち上がる。覆土はレンズ状堆積で4層に分かれる。年代は特定できない。遺物は出土していない。

SK196 (図版12・13)

D3区にある円形の土坑。径175~180cm、深さ64cmを測る。底面はほぼ平坦で、側壁は南北とも途中テラスを持ち、以後直立気味に立ち上がる。年代は特定できない。遺物は出土していない。

S E 198 (図版12・13・64)

 $D2 \cdot 3$ にある円形素掘りの井戸。径196~224cm、深さ130cmを測る。底面はほぼ平坦で、側壁はともに外傾して立ち上がるが、南壁に比べ北壁の立ち上がりが急である。SD166と切り合いがあり、SD166 を切る。土器・陶磁器(図版21 114~121)・石製品(図版33 36~41)・木製品(図版38・39 35~47)が多く出土した。当初プランを確認できなかったため遺構覆土の状況は不明であるが、出土遺物から考え 18世紀中葉前後に廃棄された遺構と考える。

SK199 (図版12·13·64)

D2 にある円形の土坑。径140~156cm、深さ82cmを測る。底面はわずかに彎曲し、側壁は内彎気味に立ち上がる。SD166を切る。覆土はレンズ状堆積。 $1 \sim 3$ 層は茶褐色シルト層を基調とする土層であり、これは寛政8(1796)年の洪水堆積層と考える。2 層は地山起源の土層、4 層は炭化物を多く含む。寛政8年以前に構築・廃棄された遺構である。図化できる遺物は出土していない。

S K 201 (図版12・13)

E 2 にある円形の土坑。長さ132cm、幅104cm前後の不整形の土坑である。深さは36cmを測る。底面は内 彎し、側壁は外傾して立ち上がる。覆土はレンズ状堆積であり、2 層は炭化物を多く含む。遺物は出土していない。

S E 202 (図版12 · 13 · 65)

D2にある円形素掘りの井戸。径192~204cm、深さ92cmを測る。底面は彎曲し、両側壁とも途中に段をもつ。SK201を切る。覆土はレンズ状堆積。最上層の茶褐色シルト層は寛政8 (1796) 年の洪水堆積層である。寛政8年以前に構築・廃棄された遺構と考える。陶器壺・擂鉢(図版21 124・125)が出土した。

SK203 (図版12・13・65)

 $D\ 2$ にある円形の土坑。径104cm、深さ56cmを測る。底面はほぼ平坦であり、側壁は内彎気味に立ち上がる。 $S\ E\ 202$ に切られる。後述する $S\ E\ 202$ の覆土最上層が寛政 $8\ (1796)$ 年の洪水堆積層と考える茶褐色シルト層であり、寛政8年以前に構築されたものであることは確実だが、上限は不明で、中世に遡る可能性がある。覆土は3層が水平堆積、 $1\cdot 2$ 層はレンズ状堆積である。遺物は出土していない。

SK204 (図版12 · 13 · 64)

D 2 にある円形の土坑。径76~88cm、深さ52cmを測る。底面はほぼ平坦であり、側壁はほぼ直立する。 覆土はレンズ状堆積であり、 $4 \cdot 5$ 層は炭化物を多量に含む。底面から珠洲 T 種壺の底部が出土した。中世の遺構である。

SK205 (図版12·13·65)

D2にある不整形の土坑。長軸144cm、短軸98cm、深さ36cmを測る。底面はわずかに彎曲し、側壁は内 彎気味に立ち上がる。覆土はレンズ状堆積。年代は特定できない。遺物は出土していない。

S K 197 (図版12・13・64)

D 2 にある円形の土坑。径 $160\sim170$ cm、深さ46cmを測る。底面は内彎し、側壁はわずかに外反して立ち上がる。S D 166を切る。覆土はレンズ状堆積、2 ・ 4 層は植物遺体を多く含む土層である。年代は不明。

SK210(図版12·13·65)

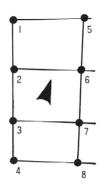
D2 にある楕円形の土坑。長軸164cm、短軸136cm、深さ40cmを測る。底面はほぼ平坦であり、側壁はともに内彎気味に立ち上がるが、北・西壁にくらべ南・東壁の立ち上がりは急である。覆土はレンズ状堆積

4. 遺構各説

であり、最上層の茶褐色シルトは寛政8 (1796) 年の洪水堆積層と考える。3層(最下層)は炭化物を多く含む。寛政8年以前に構築・廃棄された遺構である。遺物は出土していない。

SB5 (図版12・13)

D 2 区にある梁間 1 間以上、桁行 3 間の南北建物 (N-2-E)。東半を暗渠に切られるが総柱の建物になる可能性が高い。柱間寸法は桁行が北から370cm・320cm・250cm、梁間が北側が460cm、南側が440cmと不揃いである。



SK230 (図版12·13·63)

C~2 区にある円形の土坑。径 $110\sim120$ cm、深さ62cmを測る。底面は内彎し側壁は東西両壁とも中位付近にテラスを持つ。覆土は $1\sim4$ 層はレンズ状堆積。年代は特定できない。遺物は出土していない。

SK226 (図版12·13·61)

C 1 ・ 2 区にある円形の土坑。径 $160\sim180$ cm、深さ130cm を測る。底面はわずかに内彎し、側壁は外傾して立ち上がる。覆土はレンズ状堆積。年代は特定できない。遺物は木製品が出土した。

SD180 (図版14·15)

F 2・3 にある東一西方向にのびる溝。幅64cm以上、深さ20cm前後を測り、断面形は「U」字形となる。 S D165・166と切り合い関係があり、 S D165・166を切る。覆土は暗灰色シルトの単層。寛政 8 (1796) 年の洪水時には完全に埋没していた遺構と考える。遺物は出土していない。

SD165 (図版14·15·66)

F 2・3 にある東一西方向にのびる溝。幅68cm、深さ17cmを測り、断面形は「U」字形となる。S K 181・S D180・166・F 2 ーピット10と切り合い関係があり、S K181・S D180・F 2 ーピット10に切られ、S D166を切る。覆土は灰色シルトの単層。寛政 8 (1796) 年の洪水時には完全に埋没していた遺構と考える。遺物は出土していない。

SE176 (図版15)

F 3 にある円形素掘りの井戸。S D166を切る。確認面で直径90~110cmを測る。S D166と切り合いがあり、S D166を切る。当初プランを確認できなかったため遺構覆土の詳細な状況は不明。近世の陶磁器椀・皿等(図版20 97~107)が出土した。

S E 190 (図版14 · 15 · 66)

E3にある円形素掘りの井戸。径208~216cm、深さ86cmを測る。底面はわずかに彎曲し、側壁は内彎気味に立ち上がる。覆土はレンズ状堆積。最上層の茶褐色シルトは寛政8(1796)年の洪水堆積層と考える。また、5・7・8層は植物遺体を多く含む土層である。寛政8年以前に構築・廃絶した遺構と考える。土器・陶磁器(図版20 108~113)が比較的多く出土した。

SK191 (図版14・15)

E3にある隅丸長方形の土坑。長さ120cm、幅84cm、深さ20cmを測る。底面はほぼ平坦で、側壁は内彎気味に立ち上がる。SD195を切る。覆土はレンズ状堆積で3層に分けられる。1・3層は灰褐色ないしは暗灰褐色シルトだが、2層は地山起源の混入物の少ない土層である。寛政8年(1796)以後に構築された遺構の可能性が高い。遺物は出土していない。

SK192 (図版14・15)

E 2 にある円形の土坑。径132~136cm、深さ76cmを測る。底面はほぼ平坦であり、側壁はともに内彎気味に立ち上がるが、東壁に比べ、西壁の立ち上がりが急である。覆土はレンズ状堆積。寛政 8 年(1796)以後に構築された遺構の可能性が高い。遺物は出土していない。なお S K $193 \cdot 194$ も遺構覆土・堆積状況が類似しており近接した時期のものとなる可能性が高い。

SD178 (図版14·15)

 $D \cdot E 2$ にある溝。断面は「U」字形であり、覆土はレンズ状堆積。寛政 8 (1796) 年の洪水堆積層の上から掘り込まれ、S D166を切る。確認面で幅 $160\sim180$ cm、深さ20cm前後を計る。陶磁器椀・皿等(図版20 90 \sim 96)が出土した。

SD166 (図版14·15·62)

C 2 からG 3 にかけて南一北方向にのびる溝。幅420cm以上、深さ130cm前後を測る。底面は彎曲し、東西両側壁とも中位付近に段をもつ。S E 176・198・S K 197・199・S D 165・180・195と切り合い関係があり、どの遺構よりも古い。覆土はレンズ状堆積。 9 層は炭化物、13層は植物遺体を多量に含み、12層には砂粒が多く混じる。また16層(最下層)は砂層である。 $1 \sim 4$ 層を中心に中世の土器・陶磁器(図版17 $1 \sim 4 \cdot 6 \sim 20$)、石製品(図版33 $36 \sim 41$)、木製品(図版35 $1 \sim 13$)が多く出土したが、最下層付近から8世紀後半から9世紀に比定できる須恵器壺(図版17 5)が出土している。埋没時期は14世紀と考えるが、掘削の時期については8世紀後半から9世紀代に遡る可能性がある。

SD195 (図版14·15·66)

D3からE3にかけて南一北方向にのびる溝。幅60cm前後、深さ25cm前後を測る。底面はほぼ平坦で、東西両側壁とも中位付近にテラスがあるが、西壁に比べ東壁のテラスは幅広である。 $SD166 \cdot SK191 \cdot 196 \cdot SE198$ と切り合い関係があり、SD166を切り、 $SK191 \cdot 196 \cdot SE198$ には切られる。覆土はレンズ状堆積。B区北壁・直壁にはSD195と思われるセクションが確認できないことからF3付近で東側へ大きく屈曲した可能性が高い。中世の青磁小片が出土した。

第Ⅳ章 遺 物

出土した遺物には土器・陶磁器、土・陶磁製品、石製品、木製品等がある。以下では記述を行なう便宜 上、1. 土器・陶磁器、2. 土・陶磁製品・石製品、3. 木製品、4. その他の4項目に分け記述を行な う。

1 土器 • 陶磁器

A 器種分類

出土量の多い近世の土器・陶磁器については、第8図に添って分類の概要を簡単に述べる。椀は丸椀・筒椀・杉形椀・広東椀・小広東椀・端反椀に細分した。また口径10cm以下で深身のものは細部の形態に関わらず、222のような無台のものも含めて小杯として一括している。皿は口縁端部付近の内面に浅い溝が巡るものはを溝縁皿、口径が10cm以下の皿形態のものは小皿としているが、他のものは、158のような糸きり細工により平面隅丸方形となるものも含めて皿として一括してある。鉢も口縁部が直線的にのびるもの、内彎するもの、途中で屈曲するものなど多様な形態があるが、特に細分していない。ただし、内面に卸目のあるものは擂鉢としている。瓶類は徳利とそれ以外のものに分けた。

B 土器 · 陶磁気各説

土器・陶磁器には古代・中世・近世のものがある。以下では、主要な遺構出土の土器・陶磁器について 記述を行い、次いで包含層およびその他の遺構出土遺物の記述を行なう。

S D 166出土土器 (図版17・67-1~20)

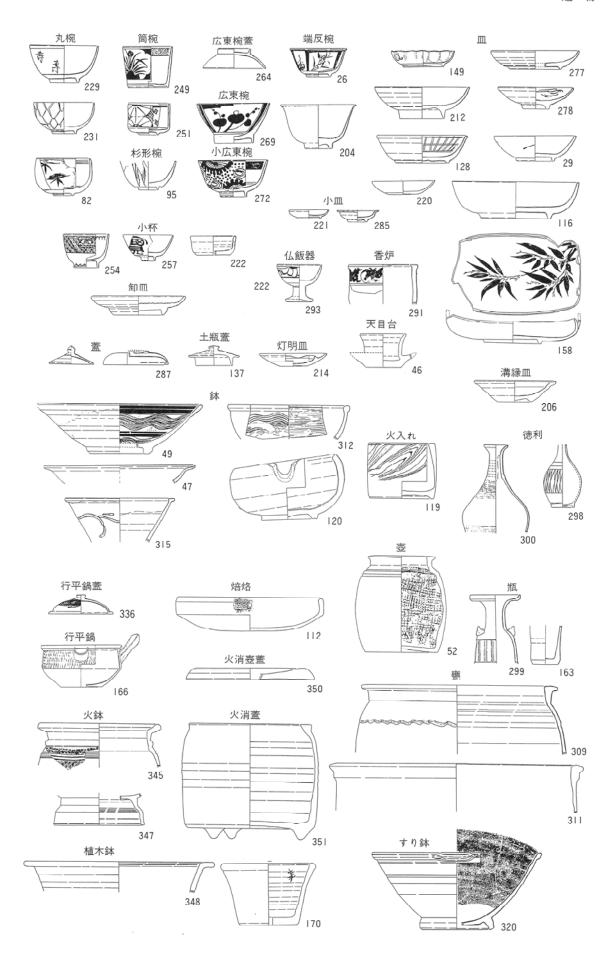
中世の土器・陶磁器がまとまって出土した。中世の土器・陶磁器には青磁・珠洲・瓷器系陶器・土師器などがある。また遺構底面近くからは須恵器壺が出土している。

青磁椀 $(1 \sim 3)$ 1・2は口縁部の破片であり、このうち1は外面に片切り彫りにより蓮弁文を表す。 蓮弁は比較的幅広で、鎬がみられる。2は内外面とも文様が確認できない。3は体部下半から底部にかけ ての破片であり、体部下半内面に片切り彫りにより劃花文を表す。高台は比較的幅広で高台内側および畳 付には施釉しない。

土師器皿(4) ロクロ成形で底部外面には回転糸切り痕が確認できる。

須恵器直口壺(5) 口縁部および肩部内外面、体部内面はロクロナデ、体部外面は平行叩きの後ロクロナデを行う。体部内面には厚く炭化物が付く。

珠洲 (6~15) 6は壺であり、口縁部はロクロナデ、体部は叩き成形である。肩部には円形の押印が確認できる。7・8は口径20cm前後の小型の鉢。口縁端部の形態は7が丸味を持ち、8は外傾する面を持つ。いずれも内外面ともロクロナデを行い、内面に卸目は確認できない。9・10は鉢の片口の部分である。口縁端部の形態は9が上方に摘み、10は外傾する面を持つ。口径は不明だが、10は器壁が薄く小型のも、9は器壁が厚くそれよりもやや大型のものとなる可能性が高い。11~15は口径30cm以上になると思われる



第8図 近世土器・陶磁器器種分類図

擂鉢。成形はいずれも内外面ともロクロナデである。 $11 \cdot 12$ は口縁端部を外側につまむ。13は体部破片であり内面には 9×1 単位の細く浅い卸目が確認できる。 $14 \cdot 15$ は底部であり、外面は静止糸切り痕が確認できる。15は見込みには 8×1 単位の卸目が「米」字状に確認できる。

瓷器系陶器 $(16\sim20)$ 器種はいずれも甕と考える。16は肩部に沈線が2条巡る。17は受け口状口縁を呈する。18は三線格子目文+ 「 \times 」の押印が肩部に巡る。 $19\cdot20$ は底部であり、このうち20は立ち上がり付近に指頭圧痕が残る。いずれも笹神丘陵産である。

SD15 (図版18·68-21~36)

近世の磁器椀・Ⅲ、陶器椀・Ⅲ・壺・徳利・擂鉢などが出土した。

肥前系磁器椀・皿 (21~28) 21~26は椀である。25は丸椀。細く高い高台を持つ。26は端反り椀。外面を6区画に区分し、笹と渦を交互に配置する。21~24は広東椀と考える。このうち21は口縁部内面に四方襷がみられる。

27は小杯。体部外面には草花を表す。

28は皿。見込み蛇ノ目釉剝ぎであり、高台は施釉しない。内面に染付による文様がみられるが意匠は不明である。

陶器椀・皿(29~31) 29は京焼風陶器皿。底部は蛇ノ目凹高台であり、高台畳付け以外は施釉する。 内外面とも染付による文様があるが意匠は不明。30はいわゆる刷毛目唐津の椀。細く低い高台がつく。31 は椀。内面には透明釉、体部外面には鉄釉がかかるが、体部下半および高台には施釉しない。

陶器擂鉢(35・36) ともに卸目が密に入る。35は口縁部が外側に屈曲し、口縁部下位に凸帯が巡る。 36は端部の丸い高台を持つ。

その他(32~34)32は京焼き風陶器鉢。口縁端部が外側にわずかに屈曲する。33は壺の肩部と考えるが、 他の器種の可能性がある。肩部には斜め方向の沈線が細かいピッチで巡る。34はいわゆる刷毛目唐津の徳 利。肩部と体部下半に白泥・刷毛目による直線が密に巡る。

SK20 (図版18・68-37~53)

覆土上層から多くの遺物が出土した。磁器椀・皿、陶器皿・鉢・擂鉢・壺・甕等が確認できる。残存度 の高いものが多く、廃棄時の一括性は高いものと考える。

肥前系磁器椀・皿(37~42) 37~39は丸椀であり、いずれも比較的高い高台をもつ。内面は無文、高台内側にはくずれた「太明年製」の銘が入る。

41は37~39に比べ幅広の高台をもつ。見込み蛇ノ目釉剝ぎで、高台無釉である。

42は肥前系磁器皿。ロクロ成形ののち、口縁部に型押し成形を行う。幅広で低い高台をもち、高台畳付には砂が付着する。

肥前系陶器皿(43・44) いわゆる溝縁皿である。外面には白色に近い灰釉がかかる。このうち43は見込みに砂目痕が残る。

陶器鉢(47~49) 47は京焼風陶器。口縁端部が上方に屈曲する。48・49は肥前系陶器の鉢。48は口縁端部が上方に屈曲する。49は口縁部が肥厚し、内面及び口縁部外面に透明釉を掛け、体部下半から高台にかけては無釉。2点とも内面は白泥・刷毛目による波状文などの装飾を施す。

陶器擂鉢(50・51) 51は幅広の端面をもち、沈線が2条巡る。産地は不明。50は肥前系のもので、口

縁端部が玉縁状となる。

その他(45・46・52・53) 45・46は無釉の陶器。45は皿。体部下半から底部にかけてロクロケズリをおこなう。46は天目台である。底部は糸切り後無調整。2点とも色調・胎土が類似する。肥前系と考えるが、別の産地の可能性もある。

52は肥前系陶器壺。ロクロ成形であるが、底部外面は不調整。肩部には沈線が2条巡り、内面には格子目文が残る。53は肥前系陶器甕。ロクロ成形である。肩部には凸帯が巡る。内面には格子目文が残る。

S D 41 (図版19·69-54~60)

肥前系磁器を中心に比較的まとまった遺物が出土した。磁器椀・皿、陶器壺等がある。

肥前系磁器椀・皿(54~58)54・55は椀。54は体部が直線的にのび、細く高い高台をもつ。55は54に比べると低い高台をもつ。内面は無文、高台内側には「太明年製」銘が入る。

56~58は皿。56は口径20cmを超える大型のものである。57は底径が小さく幅広の高台をもつ。見込み蛇ノ目釉剝ぎで高台無釉。58も低平な高台をもち、高台畳付には離れ砂がみられる。

陶器壺(60) 肥前系のものである。ロクロ成形で底部外面は不調整。内面には指頭圧痕がみられる。

SE45 (図版19·69-61~63)

61・62は肥前系磁器椀。2点とも細身の高台をもつ。61は染付により外面に一重網目文を表す。62は二次的に熱を受けている。外面に染付により文様を表すが意匠は不明。63は肥前系磁器皿。底径が大きく、高台は細く低い。外面には染付により唐草文を表す。

SE47 (図版19・69 64~68)

64は肥前系磁器椀。細身の高台をもつ。内面は無文。高台内側にはくずれた「太明年製」の銘が入る。 65は陶器鉢。削り出しによる断面方形の低い高台をもち、外面には鉄釉が掛かる。産地は不明。

66~68は陶器擂鉢。66は断面方形の高台をもち、内外面とも鉄釉が掛かる。内面には放射状の卸目が密に入る。67・68は肥前系のものと考える。底部外面は糸切り後無調整、内外面とも無釉である。内面には放射状の卸目が67は密、68は67に比べ疎らに入る。

E7・ピット10 (図版19・69-69~72)

69は肥前系磁器の広東椀である。外面にはよろけ縦縞、見込み中央には手書きによる二重井桁を表す。 70は京焼風陶器。内外面とも染付による文様を表すが意匠は不明。71は肥前系磁器の仏飯器。外面は染付 による蛸唐草文を表す。72は肥前系陶器鉢。いわゆる刷毛目唐津であり、見込蛇ノ目釉剝ぎで高台無釉で ある。

SK95 (図版19·69-73·74)

73は陶器灯明皿。内面及び体部外面には透明釉が掛かるが、底部は糸切り後無調整で無釉。74は陶器擂鉢。底部外面は糸切り後無調整。内外面とも無釉であり、内面は放射状の卸目が疎らに入る。

1. 土器 · 陶磁器

S E 100 (図版19 · 69-75 · 76)

75は肥前系磁器皿。外面は無文であり、内面には染付により文様を表すが意匠は不明。76は口径10cm前後の小杯。内面は無文、外面には染付により網干を表す。

S E 21 (図版19 · 69-77 · 78)

77は肥前系磁器の丸椀。内面に釉のムラがみられる。78は肥前系磁器皿。低平で幅広の高台をもち、畳付けには砂が残る。

SK91 (図版20·69-79·80)

79は肥前系磁器筒椀。底部は蛇ノ目凹高台であり、底部蛇ノ目釉剝ぎ。染付により外面には菖蒲、口縁部内面には四方襷文が巡る。80は肥前系磁器の小広東椀である。

SD130 (図版19·69-81·82)

81・82ともに肥前系磁器椀。81は外面に染付により一重網目文を表す。82は細く低い高台をもつ。見込み中央には手書き五弁花がある。

S D116 (図版20·69-83·84)

83は肥前系磁器椀。外面は染付により一重網目文を表す。84は肥前系磁器徳利。口縁端部は外形する面をもつ。

SK122 (図版20·69-85~87)

85~87は肥前系磁器皿。85・86はともに低平で幅広な高台をもち、高台畳付けに砂が付着するが、85は86に比べ底径が小さい。87は底径が大きく、高台は細く低い。

SK144 (図版20 • 70-88 • 89)

遺物は2点のみの出土であるが、ともに残存度は高く廃棄時の一括性は高いものと考える。88は肥前系磁器皿。底径は小さく、低平で幅広の高台をもつ。ロクロ成形ののち、口縁部は型打ち成形を行う。89は肥前系陶器皿。88同様、底径は小さく幅広の高台をもつ。見込み蛇ノ目釉剝ぎで、高台無釉。口縁部内面には鉄絵による帆掛け船?の文様がみられる。

S D178 (図版20 · 70-90~96)

磁器椀・皿、陶器椀、土師器焙烙などが出土した。

肥前系磁器椀・皿 (90~94) 90・91・93は椀。90は広東椀である。91は細く低い高台をもち、見込みには染付による手書き五弁花を表す。93は内外面とも無文である。

92・94は肥前系磁器皿。92は口縁端部がわずかに外反する。外面には唐草文を表す。94は輪花を持つもので、染付により外面に唐草文、内面に型紙刷りの牡丹唐草文を表す。

その他(95・96) 95は京焼風陶器杉形椀。高台は無釉。外面には鉄絵による若松文を表す。96は土師 器焙烙。わずかに内傾する比較的長い口縁部をもち、底部は丸底となる。

S E 176 (図版20 • 70-97~107)

肥前系磁器椀・小杯(97~102) 97~100は肥前系磁器椀。97は染付により内面に一重網目文、外面に 二重網目文を表す。98は体部外面に染付により文様を表すが意匠は不明。99は見込蛇ノ目釉剝ぎで高台無 釉である。100は細く低い高台をもつ。内外面とも素書きの染付により文様を表す。

101・102は肥前系磁器小杯。内外面とも無文である。

陶器椀・皿(103~106) 103は椀。口縁端部はわずかに外反する。内外面とも細かい貫入が入る灰釉がかかる。104は京焼風陶器杉形椀であり、高台は無釉。外面には鉄絵により若松文を表す。

105・106は肥前系陶器皿。105は底径が小さく、低平で幅広の高台をもつ。見込み蛇ノ目釉剝ぎであり、 高台無釉。高台畳付けには糸切り痕が残る。106はいわゆる刷毛目唐津。見込み蛇ノ目釉剝ぎで、高台無 釉になるものと考える。内外面とも鉄釉が掛かる。

その他(107) 肥前系陶器徳利。内外面とも鉄釉が掛かり無文である。

S E 190 (図版20 · 70-108~113)

肥前系磁器椀・肥前系陶器擂鉢・土師器焙烙などが出土した。出土した点数はそれほど多くないが、残 存度の高い個体が多い。廃棄時の一括性は高いものと考える。

肥前系磁器椀(108~110) 109は染付により外面に梅花文を表す。高台内面には染付によりくずれた「太」の銘がはいる。110は細く低い高台をもち、見込み中央にコンニャク印判による花文がある。

肥前系陶器擂鉢(111) 内外面とも鉄釉が掛かる。高台畳付けには砂が付着し、見込みには重ね焼痕が確認できる。内面には放射状の卸目が密に入る。

土師器焙烙(112・113) ともに比較的長い口縁部が内傾気味にのび、底部は丸底となる。このうち 112はほぼ完型の資料であり口縁部外面に「高井」の押印がある。

S E 198 (図版21 • 71-114~123)

肥前系磁器椀・皿、陶器椀・灯明皿・鉢・擂鉢、土師器火入れなどが出土している。多くが覆土中位からまとまって出土したものであり、廃棄時の一括性は高いものと考える。

肥前系磁器椀・皿 (114~116) 114・115は椀。114は比較的高い高台をもつ。外面には染付による 二重網目文を表すが、内面は無文。115も比較的高い高台をもち、見込み蛇ノ目釉剝ぎである。116は大形 の皿。底径は大きく、比較的高い高台がつく。染付により外面には唐草文、見込み中央にはコンニャク印 判の五弁花、高台内側の中央には渦福を表す。

陶器擂鉢(121~123) 3点とも内外面とも鉄釉が掛かる。121・122は肥前系であり、見込みには重ね焼痕、高台畳付けには砂が付着する。内面には放射状の卸目が密に入る。123も内面には放射状の卸目が密に入る。産地は不明。胎土中には長石粒を定量含む。

その他($117\sim120$) 117は京焼風陶器椀。見込み蛇ノ目釉剝ぎで、高台無釉。見込みには鉄絵により帆掛け船を表す。産地は不明。

118は陶器灯明皿。内面には透明釉が掛かるが、外面は無釉。底部から体部下半にかけてロクロ削りを行う。産地は不明。

119は土師器火入れ。ロクロ成形であり、橙色と白色の粘土により木目状の文様を表す。口縁端部には 微細な剝離痕が密に巡り、内面には煤が付着する。

120は陶器鉢。有台で口縁部には片口がつく。内面及び口縁部外面には鉄釉が掛かる産地は不明。

S E 212 (図版21 • 72-124 • 125)

124は陶器壺。低い断面方形の高台をもつ。産地は不明。125は陶器擂鉢。見込みには卸目が「米」字状に入る。産地は不明たが、越中瀬戸の可能性がある。

SB1 (図版22·72-126·127)

126は肥前系磁器皿。SB1 ピット8 からの出土であり、底径は小さく、幅広で比較的高い高台をもつ。見込み蛇ノ目釉剝ぎであり、高台は無釉。127は肥前系陶器皿。SB1 ピット5 からの出土であり、底径は小さく幅広で低い高台がつく。125と同様に見込み蛇ノ目釉剝ぎであり、高台は無釉。

SK8 (図版22 · 72-126~142)

ガラス片などとともに近世の陶磁器がまとまって出土した。陶磁器は残存度の高いものが多い。調査時にはSK8そのものは近現代に構築されたものと考えたが、ガラス片など近現代の遺物は、部分的な攪乱から出土したもので、SK8そのものは近世の遺構である可能性が高いと現在は考えている。

磁器椀・皿・灯明皿・徳利、陶器皿・蓋・壺・擂鉢がある。

肥前系磁器(128~134・139) 128~132は皿。128は口縁端部が外反する。底部は蛇ノ目凹高台で全面施釉。129は底径が大きく断面三角形の高台がつく。見込み蛇ノ目釉剝ぎ。見込み中央にはコンニャク印判による五弁花が確認できる。130は口径に比べ底径が大きく、細く低い高台を持つ。口縁部は型打ち成形。二次的に熱を受けている。131は口径約8cmの小型の皿。細く低い高台を持つ。口縁端部は口銹。132は口径約22cmを測る輪花を持つ大型の皿。高台内側にはハリ支えのあとが残る。染付により外面には唐草文、見込には松竹梅を表す。

133は椀。細く低い高台を持つ。見込み中央には染付により崩れた「寿」の銘が入る。134は灯明皿。内面および体部外面上半は施釉するが、体部外面下半および底部は無釉。内外面とも無文である。139は肥前系磁器徳利。体部外面には染付により竹・山等を表す。

肥前系陶器擂鉢(140~142) 140は全面に施釉し、141・142は高台を除き他の部分に施釉する。また 140・141は見込みに重ね焼痕が残る。いずれも内面には放射状の卸目が密に入る。

その他(134~139) 134は磁器灯明皿。底部外面は無釉、内外面とも無文である。135は陶器灯明皿。 内面には菊と3条の弧の浮文がつく。内面および口縁部外面は施釉するが、体部外面および底部外面は無 釉。136は瀬戸・美濃の小皿。口径は8cm前後を計り、口縁部が波状となる。全面に灰釉が掛かる。

137は陶器土瓶蓋。擬宝珠型の鈕を持ち、下方にのびる返りがつく。外面には濃緑色の釉が掛かり、内面は無釉。肥前系と考えるが他の産地の可能性もある。

138は陶器壺。底部外面は糸切り後無調整。外面には透明に近い釉が掛かるが、内面および底部は無釉。 肥前系と考えるが他の産地の可能性もある。

SK69 (図版22 • 23 • 73 • 74-143~167)

多くの遺物が出土した。磁器椀・皿・徳利、陶器皿・徳利・鍋・擂鉢などがある。

肥前系磁器**椀・皿**(143~157) 143~149は皿。143は見込み中央にコンニャク印判による五弁花、高

台内側中央に渦福、体部外面には唐草文を染付により表す。144は見込み蛇ノ目釉剝ぎ。見込み中央にはコンニャク印判による五弁花、体部外面には唐草文を染付により表す。144~146は底部が蛇ノ目凹高台となるもの。146は高台が低いが、145・147は低い高台を持つ。また、145・146は底部蛇ノ目釉剝ぎを行うが、147は行わない。148・149は口径約11㎝の小型の皿。ロクロ成形ののち口縁部に型打ち成形を行う。

150~153は広東椀蓋、154・155は広東椀、156・157は小広東椀である。151と155、152・153と156・157は文様が同じであり、それぞれ対となる。

徳利・瓶類(160~163) 160・161は肥前系磁器徳利もしくは瓶。160は直線的にのびた頚部が口縁端部でわずかに屈曲する。161は口縁部がラッパ状に開き、端部は上方に屈曲する。

162は肥前系陶器徳利。160と同様に直線的にのびた頚部が口縁端部でわずかに屈曲する。内外面ともに 鉄釉がかかる。

163は陶器瓶。内外面とも透明釉が掛かる。底部外面は回転糸切り後無調整。

陶器行平鍋($165\sim167$) 内面および体部外面上半に施釉し、底部外面および口縁部は無釉。 $165\cdot167$ は鉄釉、166は灰釉である。体部外面には $4\sim6$ 段の細い刻みが密に巡る。産地は不明。

その他(158・159・164) 158は京焼風陶器皿。底部はロクロ成形であるが、口縁部および体部は糸切り細工により平面形が隅丸長方形となり、長軸両端には把手がつくものと思われる。高台無釉であり、外面は無文、見込みには染付により竹を表す。

159は陶器擂鉢。ほぼ全面に鉄釉がかかる。見込みには卸目が密に入る。胎土中には長石粒が一定量みられる。産地は不明。

164は肥前系陶器壺の体部。内面には同心円文が残る。

SK96 (図版24·74-168~174)

磁器椀、土師器鉢・植木鉢、瓦器火鉢などが出土した。

168は肥前系磁器の広東椀。169・170・174は土師器植木鉢。3点ともロクロ成形である。169・170は口縁部が玉縁状になる。このうち170は外面に男性の人物をよび文字を墨書により表すが、文字は判読不可。 体部内面および底部内外面にも墨痕がみられる。174は口縁部が外側に屈曲する。

 $171\sim173$ は瓦器火鉢。 3 点ともロクロ成形である。 $171\cdot172$ は外面にスタンプにより草花文を表す。173の内面にはカキメ状の沈線が巡る。

SK112 (図版24 175~182)

磁器椀・皿、陶器灯明皿・陶器甕がある。

肥前系磁器椀・皿(175~180) 175~178は肥前系磁器椀。175・176は小広東椀であり、175は見込み蛇ノ目釉剝ぎである。177・178は端反椀である。

 $179 \cdot 180$ は皿。179は底径が小さく、低平な高台を持つ。180は179と比べると底径が大きく、細身で高い高台を持つ。

その他(181・182)181は陶器灯明皿。底部外面および体部外面下半はヘラケズリを行う。内面および口縁部外面には透明釉が掛かるが体部下半および底部外面は無釉。

182は肥前系陶器甕。口縁端部は内面に肥厚する。

SE80 (図版24 · 29 · 75 · 81-183~185 · 319)

183は陶器灯明皿。底部外面は回転糸切り後無調整。内面および口縁部外面には鉄釉が掛かるが、体部および底部外面は無釉。

184は陶器鉢。削り出しによる断面方形の低い高台がつく。内面は鉄釉が掛かるが外面は無釉。

185は陶器壺。口縁部が短く屈曲する。内外面に鉄釉が掛かるが口縁端部は無釉。

319は擂鉢。口縁部が玉縁状を呈する。内外面とも鉄釉が掛かり、見込みには重ね焼痕が残る。

SK131 (図版24 · 75-186~188)

186は陶器擂鉢。口縁部が外側に屈曲し、口縁部下端に断面三角形の凸帯がつく。187は陶器端反椀。内外面とも透明釉が掛かる。188は肥前系磁器皿。底部は蛇ノ目凹高台で底部蛇ノ目釉剝ぎ。内面には染付により家・山水を表す。

SK177 (図版24·75-189·190)

189は陶器壺。体部内外面とも灰釉が掛かるが、底部外面は回転糸切り後無調整で無釉。190は肥前系磁器小杯。外側に踏張る高い高台を持つ。

包含層出土の土器 (図版24~31・75~82・191~353)

包含層出土の土器には中世と近世の遺物がある。

中世 (191~202)

191は青磁椀。外面には片切彫りにより、幅広で鎬を持つ蓮弁文を表す。192は土師器皿。非ロクロ成形であり、口縁部はヨコナデ、端部をわずかに上方に摘む。

192は土師器皿。いわゆる京都系のものであり、非口ロクロ成形である。16世紀代のものと考えるが17世紀以降に下る可能性もある。193~199は珠洲。193は壺の底部。底部外面は不調整、体部外面は平行叩き、体部内面には無文の当て具痕が残る。S K202出土。194・195は擂鉢。194は口縁端部が丸みをおび、195は若干内傾する面を持つ。196はN種壺。底部外面は静止糸切り痕が残る。197~199は甕もしくは壺の体部。外面は平行叩き、体部内面には無文の当て具痕が残る。

200~202は瓷器系陶器。いずれも甕の体部破片と考える。200には外面にハケメが残る。

近世 (203~351)

陶器椀(203~205・223) 203は内面および体部外面に鉄釉が掛かり、高台は無釉。204は端反の椀であり、二次的に熱を受けている。205は京焼風陶器。223は口径約20cmを測る大型の椀。ロクロ成形ののち口縁部は型押し成形により六角形とする。内面および口縁部体部外面には施釉するが高台は無釉。

陶器皿 (206~218・220・221) 206・207は肥前系の溝縁皿であり、206は見込みに砂目痕が残る。高台は無釉。208も肥前系のものであり、見込に砂目痕が確認できる。

209は無台の皿であり、底部外面は回転糸切り後無調整。210は見込蛇ノ目釉剝ぎで高台内側も施釉し、 高台畳付には砂目痕が残る。内面には鉄絵により文様を表すが意匠は不明。211は蛇ノ目釉剝ぎで高台無 釉、口縁部内面には鉄絵により模様を表す。

212・213・216はいわゆる刷毛目唐津。このうち212・213は見込み蛇ノ目釉剝ぎで高台無釉である。 214・215は鉄釉がかかる。蛇ノ目釉剝ぎで高台は無釉。 217は染付により内面に花文を表す。底部は蛇ノ目凹高台であり、高台は高い。218は見込みには灰釉が掛かるが高台は無釉。内面に染付により笹を表す。産地は不明。220は内外面とも無釉である。ロクロ成形で、底部外面および体部外面下半はヘラケズリをおこなう。221は瀬戸・美濃小皿。全面に灰釉がかかる。16世紀代に遡る可能性もある。

陶器灯明皿(219) 底部外面および体部外面下半はヘラケズリを行う。内面および口縁部外面には灰釉が掛かるが体部下半および底部外面は無釉。SE1出土。

陶器小杯(222)内面および口縁部外面には灰釉が掛かるが底部は無釉。底部外面には回転糸切り痕が 残る。肥前系。

陶器蓋(224) 下方にのびる返しを持つ。外面は施釉するが内面は無釉。産地は不明。

陶器卸皿(225・226) 内面および体部外面に225は鉄釉、226は灰釉が掛かるが高台は無釉。225は瀬戸・美濃、226は産地不明。このうち225は16世紀ないしはそれ以前のものとなる可能性がある。

肥前系磁器椀(227~251・258~272) 227は口縁部型打ち成形。染付により内面には雷文、外面には人物と山水を表す。228・231は細く低い高台を持つもので、染付により228は外面に花、231は外面に二重網目文、内面に一重網目文、見込みに菊花文を表す。229は底径が大きく細身で比較的高い高台を持つ。内面は無文。外面には染付による「寿」の銘を千鳥に配する。SE74からの出土。230は断面方形の高い高台を持つ。内面は無文、外面は染付により一重網目文を表す。236~238は底部に崩れた「太明年制」の銘が入るもので、内面は無文、外面には染付による草花文を表す。243~246・248は丸椀の口縁部。243~246は外面に染付による草花を表わす。244はSK230出土。

249~251は筒椀。249・250は蛇ノ目凹高台であり、249は見込みに手書き五弁花がみられる。250は口縁部口銹である。251は底径が小さく、低く細い高台を持つ。

232・233・242・247・272は小広東椀、258~266は広東椀蓋、267~271は広東椀である。このうち232は 見込み蛇ノ目釉剝ぎである。259・260は272、262~264は267とそれぞれセットとなるものと考える。233 はE7・ピット30出土。

肥前系磁器小杯(252~257) 252は外面に一重網目を表す。内面に釉のムラがみられる。253は口縁端部がわずかに外反する。高台畳付には離れ砂がつく。254は外側に踏張る高い高台を持つ。257は底径が小さく、細く高い高台を持つ。

肥前系磁器皿(273~286) 273は底径が小さく幅広で低い高台を持つ。

274・275は底径が大きく細い高台がつく。274は内外面とも無文、275は内面に墨弾きによる文様を表すが意匠は不明。

276~279は見込み蛇ノ目釉剝ぎであり、276には見込み中央にコンニャク印判による五弁花がみられる。 278・279は高台無釉で、内面には崩れた鳳凰文を表す。280は蛇ノ目釉凹高台の皿。高台は高い。

282は口径21cmの大型の皿であり、口縁部内面には蛸唐草、見込み中央にはコンニャク印判による五弁花、高台内側には「成化年制」の銘がみられる。

283も大型の皿となる可能性が高い。見込みにはコンニャク印判による菊草花文、高台内側には二重の方形枠に渦福がみられる。

284は口径約7 cm前後の小型の皿。外面には三重井桁を表す。285も口径約6 cmの小型の皿。内面には楼閣山水文を表し、口縁端部は口銹。

286は内外面とも無文。内面および口縁部外面は施釉するが、底部は無釉。回転糸切り痕が残る。

肥前系磁器蓋(287~289) 287は体部が内彎し、口縁端部は幅広の面を持ち、煤が付着する。鈕はブリッヂ状になるものと考える。288・289擬宝珠型の鈕を持つ。289は口縁部が直線的にのびるが、289は内彎気味にのびた口縁部が、端部で外反する。このうち287はSD139出土である。

香炉 (290~292) 290・291は肥前系磁器であり、292は外面および口縁部内面に鉄釉のかかる陶器である。290は外面に七宝・内面に四方襷、291は外面にコウモリを染付により表す。

仏飯器 (293・294) 2 点とも肥前系磁器である。293は外面に染付による半菊文がある。294は無文。 徳利・瓶 (295~298・300~303) 295~298は肥前系磁器徳利。297は体部外面に染付により遠山・帆掛け船等を表す。298は焼き付けによる赤色の一重網目文がみられる。299は青磁の瓶。口縁部はラッパ状に開き、端部は上方に摘む。肩部には耳がつく。

300~304は陶器徳利。300・301はいわゆる刷毛目唐津。300の口縁部には鉄釉がかかる。302も肥前系陶器と考えられ、口縁部には鉄釉がかかる。303は外面に灰釉が掛かる。体部外面には鉄絵により文様を表す。

壺(304~307)304は口縁部が短く屈曲し、外面は透明がかかる。肥前系陶器である。305は内外面とも 鉄釉が掛かり、肩部には沈線が2条巡る。306は頚部がわずかに屈曲し、口縁端部は外側に摘み出す。内 外面とも飴色の釉がかかる陶器である。産地は不明。307は壺の底部。外面には回転糸切り痕が残る。肥 前系陶器である。308は白泥・刷毛目により波状文を表す。口縁端部は幅広の水平な面をもつ。

甕(309~311) 309は口縁端部を外側に摘む。肩部には箆書きによる波状文がめぐる。310は内面に格子目文が残る。2点とも肥前系陶器である。311は口径約75cmをはかる大型品。越前焼である。

鉢(312~318) 312・313は白泥・刷毛目により波状文を表す。314は内面および体部外面に透明釉がかかる。内面には釘彫により横線・波状文等を表す。高台は無釉。315は口縁端部が水平な面を持つ。胴部中央付近には棒状の工具により唐草文を表す。316は内外面とも灰釉がかかる。317は内面および体部外面に透明釉が掛かるが高台は無釉。317は内面および体部外面に白色に近い灰釉がかかるが高台は無釉。316は産地不明だが、その他は肥前系のものと考える。また313はSK110出土。

擂鉢(319~335) いずれも陶器である。319~322は口縁部が玉縁状を呈する。内外面とも鉄釉が掛かり、見込みには重ね焼痕が残る。底部は削り出し高台で外面は無釉。

324・325は口縁端部に内傾する面を持つ。口縁部内外面に鉄釉がかかるが体部は無釉。内面には卸目が 疎らに入る。2点とも肥前系。325はSD43出土。

 $326\sim329\cdot331$ は口縁端部が屈曲し下端に断面三角形の凸帯がつくもの。いずれも肥前系のものとなる可能性が高い。このうち327は体部外面にカキメ状の多状の沈線が巡る。327はSE93、329はSE34からの出土である。

323・332は口縁部に沈線が2条巡る。323は高台畳付以外は鉄釉が掛かり、見込には重ね焼痕が残る。 332は体部外面にカキメ状の多条の沈線が巡る。

330は口縁端部を外側に摘む。内面および口縁部・体部外面には鉄釉が掛かるが高台は無釉。

333・334は無台で内外面とも無釉。見込みには放射状の卸目が333は疎ら、334は333に比べ密に入る。 ともに肥前系である。333はSK131、334はSK77出土。

335は高台を持ち、高台畳付以外は鉄釉が掛かる。内面には重ね焼痕が残る。

行平鍋 (336~339) 336・337は蓋、338・339は身である。338は体部外面に篦状工具による刻みが細かいピッチで4段に巡る。

火入れ(340・341・343) 340は土師器。口縁部は内彎し、端部は肥厚する。341は340と同一個体となるものと思われる。内面には煤が付着する。成形はロクロ成形である。345は瓦器。ロクロ成形で外面には線状の刺突が巡る。口縁端部は微細な剝離痕が密に見られる。

土師器植木鉢(342・348) 2点とも口縁部は外側に屈曲する。ロクロ成形で胎土中に海綿骨子を含む。 瓦器火鉢(344~347)はいずれもロクロ成形。344・345は口縁部・胴部破片でありスタンプによる菊花・ 斜格子などの文様がみられる。346・347は底部であり、高い脚がつく。

土師器焙烙(349) 口縁部は長く直立気味にのびる。底部外面にはヘラケズリを行う。

土師器火消し壺 (350・351) 350は蓋・351は身。ロクロ成形で内面には煤が付着する。

2. 土 • 陶磁製品 • 石製品

土・陶磁製品 (図版32・83 1~17)

 $1\sim 9$ は陶器・磁器片円盤。陶磁器椀・皿の底部を用いて平面を略円形に仕上げたものである。 $1\sim 6$ は肥前系磁器、 $7\sim 9$ は肥前系陶器を用いる。側面は見込みから高台に向かって広がる台形状を呈するものが多い。縄文時代から中世にかけてみられる土器片円盤のような明確な使用痕は確認できない。

10・11は転用研削具。10は珠洲甕もしくはT種壺、11は笹神産の瓷器系陶器擂鉢の破片を用いる。表裏両面と各側面に部分的に研磨痕が残る。

 $12\sim14$ は泥人形。 3 点とも型押しによるものである。12は鳥類、13は扇子を持ち正座をする男性、14も正座をする男性である。

 $15\sim18$ は練炭の容器の蓋。最大径 $10\sim11$ cm前後の大型のもの($15\cdot16$)と $8\sim9$ cm前後の小型のもの($17\cdot18$)がある。4 点ともロクロ成形で頂部には回転糸切り痕が残る。いずれも橙色で硬質の焼き上がりである。

19は長さ約6 cm、最大径約4 cmの太型の土錘。重量は96.2 g である。

石製品 (図版32・33・34・83・84 18~56)

出土した石製品には砥石・叩き石・石臼・硯等がある。

S D 166 (図版33·83 29~33)

29は下半を欠損するが平面は長楕円形になると思われる軽石。正面に研磨痕が確認できる。

30は偏平な棒状を呈する叩き石である。上下両端部・両側縁の一部・正面に敲打痕がある。

31は断面が偏平な形状を呈し、一端部が欠損する砥石。2つに分離し分離した小さい方を32とする。31は正面・両側縁に作業面を持ち、正面左側には成形痕が顕著に残る。32は正面・左右両側縁・下側縁に作業面を持つ。

33は一方が厚く他方が薄い直方体を呈する砥石。正面・右側縁に作業面を持つ。正面・右側縁は被熱し、 煤が付着する。

SK20(図版33·83 34·35)

34は直方体状となる砥石。正面・裏面・左右両側面に作業面を持つ。35は三角柱状を呈する砥石。正面 と右側面に作業面を持つ。

S E 198 (図版33·83 36~41)

36・38・39は一方が厚く他方が薄い直方体を呈する砥石。36は正面・裏面・左右両側面・上側面に作業面を持ち、裏面・上側面には成形痕が残る。また正面には敲打痕が確認できる。38は正面のみに作業面を持つ。39は正面・右側縁に作業面を持つ。

37は破損した砥石の細片を再度砥石として用いている。平面形は台形を呈する。

40は偏平な直方体を呈する砥石。上下両端・左側が欠損する。正面・裏面・右側縁に作業面を持つ。また右側縁には断面「U]字型の浅い溝が2条見られる。41は三角柱状を程する砥石。正面および左右両側面に作業面を持つ。石材は39~41は目の粗い砂岩を用いたもの、他のものは凝灰岩である。

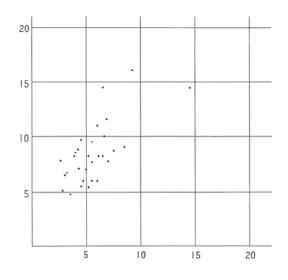
S D15 (図版34·84 42~44)

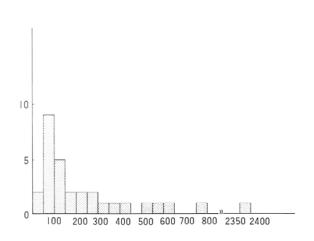
42は直方体を呈する砥石。両端部が欠損している。正面・裏面・左右両側面に作業面を有し、裏面の一部には成形痕がみられる。

43・44は一方が厚く他方が薄い直方体を呈する砥石。43は両端部を欠損する。正面・裏面・左側面に作業面を有する。44は一端部を欠損する。正面・裏面・左右両側縁に作業面を有する。

SK112 (図版34·84 45·46)

45は直方体を呈し、一部を欠損する砥石。正面・裏面・左右両側面・下側面に作業面を持つ。また正面には細かい敲打痕・断面「U」字形の浅い擦り溝が見られる。46は一方が厚く他方が薄い直方体を呈する低石。正面・裏面・左右上下の各側面に作業面を持つ。





第9図 砥石の大きさと重量

その他の遺構・包含層 (図版32・34・83・84 20~28・45~58)

硯($20\sim23$) 21は下半を欠損する。中央に仕切があり、片側には朱が残っている。23はほぼ全形がわかる資料であり、長さ13.2cm、幅6.7cmを測る。石材は凝灰岩である。山梨県雨畑産の可能性が高い。S K151出土。20も下半を欠損するが、幅は6.2cmであり、23とほぼ同様な形態になるものと考える。滋賀県高嶋で天草砥石を用いて作られたものである可能性が高い。22は小片のため詳細は不明。1

石臼(24) 粉引き臼の上臼であり、直径は30cm前後になると思われる。臼の目は摩滅のため不明。石 材は花崗岩である。

研磨具($25\sim28$) いずれも軽石を用いたもので、 $2\sim3$ 面に作業面を持つ。研磨の対象が何であるかは不明であるが、地元では高度経済成長期以前までは。鉄鍋の外面の煤をおとすために使用することが多くあったらしい。

砥石(47~57) 47は直方体を呈する砥石。一端部が欠損しいている。正面・裏面・左右両側面に作業面がある。正面には直径約3cmの窪みを持つ。上部約1/3が熱を受け煤が付着している。SD130出土。

48~50は偏平で板状の直方体を呈する砥石。48は正面・裏面・右側面に作業面を有するものでSD52出土。50は正面・左右両側面に作業面を有するもので包含層(F8-4)出土。49は正面・裏面の一部に作業面を持つ。裏面の一部には成形痕が見られる。SK190出土。

51~54・57は直方体を呈する砥石。51は正面・左右両側面に作業面を有する。欠損している面を除いて 煤が付着する。S K 69出土。52は正面・左右両側面の一部に作業面を有する。S K 8 出土。53は他のもの に比べやや薄手である。上下両端、左側縁を欠損する。正面・裏面・左側面に作業面を有する。E 7・ピット30からの出土。55は上下端を欠損する。54は一端部が欠損する。正面・裏面の一部・左右両側面に作業 面を有し、正側面に成形痕が見られる。D 6 ーピット20出土。57は正面・裏面・左右両側面・下側面に作業 業面を有する。裏面と左側面には整形痕が残る。S K 226出土。

55は平面台形の直方体を呈する砥石。正面・裏面に作業面を有し、正面には断面「U」字型の深い擦痕が見られる。一側縁が欠損し、欠損している面を除いて煤が付着する。

56は不定形な5角柱状を呈する砥石。正面・左右両側面のそれぞれ約1/2に作業面を有し、正面・左右両側面にそれぞれ成形痕が確認できる。S K 42出土。

叩き石(58) 左側面に敲打痕が残る。欠損している面を除き被熱し煤が付着する。SK75出土。

3. 木 製 品

S D166 (図版35⋅85 1~14)

1 は船形。木裏から長方形の舟底を持つ船槽を、船首・船尾部分は厚く、舷側・舟底部分は薄手にくり 抜いて作る。船首は両側面から尖頭形に、船尾は隅丸方形となる。

2 は底板。柾目材を用いる。幅9.4cmを残して右側約1/3が欠損する。円盤の中心には周辺に幅約7 mmの内側に傾斜する面を持つ径約1.5cmの孔があり、これを巡って等間隔に4 τ 所の小孔がある。小孔の平面形は円形に近い菱形を呈する。

3は角棒。柾目材を用いる。断面はやや偏平となる。上部は両側面から尖頭形に削り込み、先端は上面

¹⁾ 硯に関しては垣内光次郎氏より多くの教示をうけた。

からの削りも加え隅丸方形に調整する。下端は欠損する。側面の削りは粗く、凹凸が残る。

 $4 \sim 7$ は板材。 $4 \cdot 5$ は柾目材の平板で同一個体と考える。 4 の上端は摩耗し左端は隅丸、右端は下方から斜めに打ち欠く。下方は欠損する。左側に 5 ヶ所釘穴があり、このうち 4 ヶ所は周辺が赤褐色に変色、釘は黒色となって残る。いずれも鉄釘で裏面側から打ち込む。また下方 2 本の釘は腰折れで打ち込んである。 5 は上端が斜めに、下端は節部で不定形に欠損する。両側面は直角に成形するが、右側縁の一部は腐蝕のため欠失。 6 は柾目材を用いた細身の板材。上端は欠損、下端は摩耗のため丸みを帯びる。右側縁は欠損、左側縁はほぼ直角に仕上げる。 7 は柾目材を用いいた板材。表面上部左側・裏面下部左側と右側面を欠損する。表・裏面とも平滑で、上下両木口はやや斜めに、左側縁は直角に仕上げる。中央部には結紐を止めるための小孔が約 1 cmの間隔で 2 個並ぶ。

8・9は同一個体と思われる折敷底板である。8は左側面の上下端を斜めに落とす。正面上部には加工 痕が確認できる。中央には結紐を止めるための小孔が2個確ある。9は表面上部よりに工具痕が残る。ま た左下端には二個一対の釘孔がある。上面は腐蝕が進み器面が痩せる。10~12も折敷の一部。11は中央よ りやや上に方形の切り込みが入る。12は右側縁及び下方を欠損。上端は左上がりに成形する。

13は左側縁は鈎型に屈曲し、右側縁は径約27cmの円弧となる。右側縁の整形はラフで工具痕が明瞭に残る。

S E 25 (図版36 · 85 14~16)

14は板材。木取りは柾目である。左側縁・上下端とも欠損し原形不明。15は角材。木取りは板目である。 上端の木口と上面から鋸を入れ長さ2.5cmの一枚組手を作る。組手中央に釘孔が残る。16は板材。木取り は柾目。左側縁・上下端とも欠損し原形不明。

S E 47 (図版36・85 17~20)

17は円形組物の側板。柾目材。上幅より下幅が狭いが、ほぼ長方形を呈する。左右両側面にそれぞれ傾斜をつけて削り、全体に緩やかに湾曲する。内面の上下に2本、外面の上・中・下部に3本の帯状の圧痕が残る。

18は角材。木取りは柾目。全面に浅い凹凸がある。上木口に楔状の割れが入る。下端は両側面から尖型に切り、表裏両面とも約0.3cmの厚さで段をつけ中心部を突き出す。上部中央に4ヶ所の釘孔があり、ヒゴ状の木釘が残っている。

19・20は反りを持つ角材。19の木取りは板目。上端に向かって反り上がる。裏面には円弧状の段差がある。20は上端の両側面を削り尖型をなすが、下端は欠損し原形は不明。材質・形状から考え同一器材の可能性が高い。

SK69 (図版36・86 21~26)

21・22は円形板。21は柾目材。幅8.0cmを残し半円形に折損する。表裏とも黒漆塗り。裏面円周に若干の面取りを行う。22は板目材。一部を欠損する。原形約23cmの底板を再加工し、径約20cmの蓋として利用しているものと思われる。

23は角材。木取りは板目。角材の四隅を面取りし隅丸とする。上下端とも表裏両面を削り、やや細めに 作り頭部は角を落とし丸みを付ける。鉈づくりのためか裏面は特に凹凸が著しい。円形結物の把手になる ものと考える。24は板材。木取りは板目。上半を欠損する。左側縁の摩耗が著しい。25は下駄の歯。木取りは板目。台形を呈する。前面に圧痕が斜めに残る。26は丸太材を手斧もしくは鉈等の工具で打ち欠いた木片である。

SE80 (図版38·86 27~34)

27・28は下駄。木取りは板目材。いわゆる露卯下駄である。台は厚く、台中央部を山形に造り出す。前端は隅丸方形、後端は後目から幅を狭め隅丸方形にまとめる。台裏面の前あごに鼻緒結びを納めるしゃくり部分がある。全面黒漆塗りであるが、裏面は剝落が著しい。長さに対し幅が狭く細身造りで女性用と思われる。

29・30は円形組物の側板。29は板目材、30は柾目材。ともに上幅より下幅が狭く、上方に29は円形、30は方形の孔を持つ。上木口・左右両側面にそれぞれ傾斜をつけて削り、全体に緩やかに彎曲する。30は下端表面に圧痕と加工痕、内面には底板痕が残る。30は下部中央には径約3.5cmの円形の孔が60度の角度で上方に向かってあく。

31は柾目の板材。表裏とも調整が拙く、厚さは上下左右とも均一でない。左側縁を欠損する。

32は棒状の木器。樹皮の付いた丸棒材で、頭部に長さ9.0cmの削りがある。中央部に長さ9.0cm、幅3.0 cm、深さ1.0cmの削り込みがある。正面下半には擦痕が確認できる。下端部には5ケ所に鋸様の工具で切り込みをいれその間を打ち欠くように落としている。下端は二方向から削り尖形を作る。用途不明。

33は下駄の歯。柾目材である。

34は径約9 cmの円形板。木取りは柾目。欠損により幅約3 cmを残して半円径を呈する。上面円周に沿って幅0.8cm圧痕が巡る。

S E 198 (図版38・39・86・87 35~46)

 $35 \cdot 36$ は円形板。木取りは 2 点とも板目である。 35は断面形がほぼ直角になる。 36の側面は下方に傾斜をつけ、裏面は円周を面取りし丸みをつける。

37は半円径板。木取りは柾目である。左端は磨耗のため円弧を欠く。裏面は磨耗が著しい。

38~40・42は円形組物の側板。いずれも柾目材である。同一個体と考えられ、口径約24cm、底径約21cm、器高14cm前後になるものと考える。外面木口は面取りを行い、上・下部にタガの跡と考える圧痕が確認できる。内面下部に底板痕があり、底板痕の上3~4cm程度が黒変し痩せている。41も円形組物の側板である。木取りは柾目。左右両端の下端付近に円形の小孔がある。

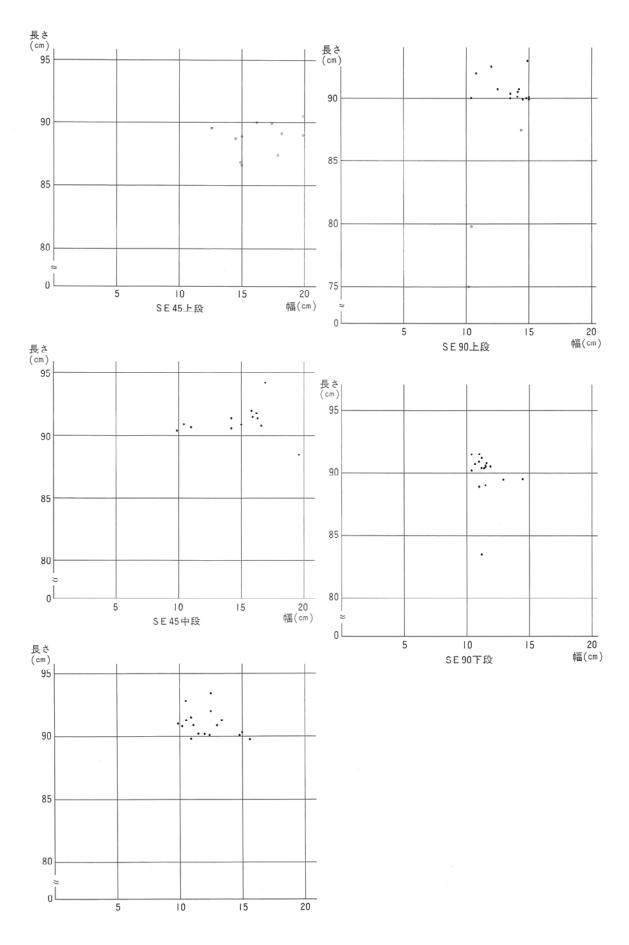
43・44は角材。木取りはともに板目。43は下部にわずかに左上がりの小孔が両側面を貫通する。左側面の孔を中心に約2cm幅で他材との結合痕を持つ。45は板材。木取りは板目。

46・47は漆器椀。ともに横木取りである。46は高台がつき、口縁部がわずかに内湾する皿。前面に朱漆を塗るが、剝落が多い。47は胴部のみで法量は不明。内面朱漆、外面は黒漆地に黄漆で羊歯植物文様を表わす。

SE90井戸側部材(図版39·89 58~65)

板組の桶側板が2段に重ねられていた。

上段の板組桶側板(58~61) 板材17枚で構成される。大半のものが腐蝕により上端を欠損する。現存



第10図 部材の大きさ

長87~93cm、厚さ 2 cm前後のものが大半を占める。幅は10~15cm前後と細身のものが多い。最も幅が広いものは15.0cm、狭いものは10.2cmである。また木取りはいずれも板目である。4 点図示した。

58・61は正面・裏面ともほとんど加工痕が確認できず、縦断面が長方形となる。このうち58は下辺が右下がりとなる。また61は中位やや下よりに一辺1.5cm前後の孔が確認できる。

59は裏面下端に加工痕が確認できるが、縦断面形は長方形となる。

60は正面左右両側縁、裏面下端に加工痕が確認できる。縦断面は下端が先細りとなる。いずれも左右両側面の上端付近に釘穴が確認できるが、釘は遺存していない。

下段の板組桶側板($62\sim65$) 板材18枚で構成される。長さは $88\sim92$ cm、厚さ $2\sim3$ cmのものが大半を占め、幅は $10\sim15$ cmと細身のものが多い。幅が最も広いものは14.5cm、狭いものは10.4cmである。木取りはいずれも板目である。4点図示した。

62~65は裏面下端に加工痕が残り、縦断面は下端部が先細りとなり、上端付近には木釘が残る。このう 563~65は正面左右両側縁に加工痕が残る。また64は正面、65は裏面に鋸引きの痕が多く残る。63は下辺 が若干右上りとなり、64は大きく右上がりとなる。

S E 45井戸側部材(図版40~42・90~92 67~79)

外側に方形の井戸側があり、その内側に板組の桶側板が3段に重ねられている。

上段の板組桶桶側板($66\sim68$) 板材11枚で構成される。上端を欠損するものが多いが、現存長 $86\sim90$ cm、厚さ 2 cm前後のものが大半を占める。幅はばらつきがあり、 $13\sim20$ cm前後で、最も幅が広いものは 19.9cm、狭いものは13.6cmである。木取りはいずれも板目である。 3 点図示した。

66~68はいずれも上端部を腐蝕により欠損する。また、外面にはタガを巻いた痕が1箇所残る。正面左右両側縁および裏面下端には加工痕が残り、縦断面は下端部が先細りとなる。木取りはいずれも板目である。65・66は下辺が右上がりとなる。

中段の板組桶側板($69\sim71$) 13枚で構成される。長さ $90\sim93$ cm、厚さ2cm前後のものが大半を占めるが、幅にはばらつきがあり、 $10\sim20$ cm前後で、もっとも幅が広いものは19.6cm、狭いものは9.9cmである。 3 点図示した。木取りはいずれも板目である。

69~71は正面にタガを巻いた痕が2箇所に見られる。上段の桶側板と同様、正面左右両側縁および裏面下端には加工痕が残り、縦断面は下端部が先細りとなる。左右両側面の上端近くに釘穴が確認でき。70は右側面、69は左側面に木釘が依存している。

下段の板組桶側板($72\sim75$) 板材板材17枚で構成される。長さ $90\sim93$ cm、厚さ2cm前後のものが大半を占める。幅は $10\sim16$ cm前後と細身のものが多く、最も幅が広いものは15.6cm、狭いものは9.9cmである。4点図示した。木取りはいずれも板目である。

72~75は正面にタガを巻いた痕が3箇所確認できる。いずれも正面左右両側縁に加工痕が確認できるが、上・中段の側板とは異なり、裏面下端に明確な加工痕が見られず断面形も下端が先細りとならない。左右両側面の上端付近に釘穴が確認でき、71は右側面、73・74は左右両側面に木釘が残る。また72・73・75は両面に斜め方向の鋸引きの痕が多く残る。また72は下辺が左上り、73は下辺が右上がりとなる。

方形井戸側側板(76~79) 76は外面に手斧による加工痕が顕著に残る。77は加工痕がほとんど確認できない。78・79は斜め方向の鋸引きの痕が数箇所確認できる。木取りは76・77は板目、78・79は柾目である。

その他の遺構 (図版39・40・87・88 48~57)

48は楕円形板。木取りは柾目。両端は径約5.5cmの円弧を持つ。周縁に低い段が巡る。出土地不明。

49は半円形板。木取りは柾目。右側縁を一部欠損する。上下両端に円弧を持ち、円弧の縁は若干傾斜し、上下両側面は直角に整える。下側縁には別材を継ぎ合わせるための釘孔が2ヶ所あり、細い木釘が残存する。また表面中央下端付近に径約0.9cmの小孔がある。S K144出土。

50は露地下駄。下半を欠損する。台の形状は、平面形は隅丸方形、断面形は山形となる。

51は半円形板。木取りは柾目。断面形は円弧は傾斜し直線部分は直角に整える。上面の左端中央部に樺皮綴じの紐を持つ。

52は上下端を欠損する。断面がわずかに彎曲しており、円形組物の側板となる可能性が高い。

53は板目の板材。平面形はほぼ長方形を呈する。上端は両側面から斜めに切り込みへこませ中央部で折り放す。下端は径約30cmの緩やかな円弧を持つ。断面形は、上面が若干甲高、下面は平坦である。右上端に鋸目と割れ目が、左上端には工具による切り刻みがある。また上面全面に横方向の工具痕が多数入る。

54は柾目の板材。上端を欠損する。下端は丸く仕上げ、外面には横方向の工具痕が多数入る。

55は杭。中央よりやや上位に抉りが入る。

 $56 \cdot 57$ は柱痕。ともにSB2のピットからの出土で、56はピット $5 \cdot 57$ はピット4である。57は目途穴が確認できる。

4. その他

鉄滓・フイゴ羽口 (図版84)

いずれもSD116およびその周辺からの出土がほとんどである。フイゴ羽口はいずれも小片のため図化できなかった。出土した鉄滓の重量は581.9gである。SD166からは砥石および被熱礫が出土しており周辺で小鍛冶が行なわれた可能性が高い。

軽石

出土した軽石の総数は約500点である。包含層からの出土は少なく多くは遺構内からの出土である。出土した主な遺構としてはSE2・SE14・SE20・SE41・SE45・SE76・SE198・SK110・SD15・SD43・SD117・SD130がある。図示したもの(図版32 25~28)のような明確な使用痕があるものは希で、出土し多くは直径3~4cm前後の略球形をした自然のものである。一遺構から数十個以上まとまって出土する場合があり、整理途中まで人為的な要素を考えていたが、出土する遺構のほとんどが寛政8(1796)年の洪水堆積層と思われる茶褐色シルトを基調とする土層が覆土上層に存在すること、遺構内の出土層位が茶褐色シルトを基調とする土層中もしくは茶褐色シルトを基調とする土層の下底部付近であること、の2点から洪水時に遺構内あるいは遺構の廃絶後にできた窪地に流れ込んだものと現在は考えており、図示および写真撮影は行わなかった。

第Ⅴ章 ま と め

1. 土器 • 陶磁器

A S D166出土土器・陶磁器

S D166からは中世の土器・陶磁器がまとまって出土した。出土状況はほとんどのものが覆土の上層からの出土である。出土した土器・陶磁器には青磁椀(内面劃花文・鎬蓮弁文・無文)、珠洲壺・擂鉢、瓷器系陶器甕、土師器皿がある。

珠洲擂鉢は口縁部を外側に摘み出すものであり、珠洲Ⅳ期(14世紀)のもの〔吉岡1993〕と考える。壺ついては口縁部を欠き年代の比定は難しいが、Ⅳ期としても大きく矛盾するものではない。

瓷器系陶器は胎土から、笹神丘陵産のものと考えてよい。17は口縁部が受け口状を呈するもので、18は肩部に二重格子目文+「×」の押印が見られる。笹神丘陵の窯跡の資料では、受け口状口縁を持つものは権兵衛沢1号窯・赤坂山窯に、二重格子目文+「×」の押印が見られるものは赤坂山窯で確認できる。甕については長期間の使用が考えられ、擂鉢とは同等に扱えないが、このような特徴を持つ笹神丘陵産の瓷器系陶器甕の下限を示す資料にはなりうるものと考える。

土師器皿はロクロ成形で底部切り離しが回転糸切りによるものである。珠洲擂鉢とほぼ同時期と考えるならば、14世紀の年代が与えられる。越後の13・14世紀の土師器皿については回転糸切りのものは消滅し、非ロクロ成形のもののみが存在すると考えられてきたが〔坂井1987・品田1991〕、鶴巻康志氏は北蒲原郡安田町六野瀬遺跡1号井戸から底部回転糸切りの土師器皿が出土したことを受け、13・14世紀にも回転糸切りの土師器が存在することを指摘した〔鶴巻1992〕。今回の江内遺跡からの出土により、13・14世紀の回転糸切りの土師器皿の存在が、六野瀬遺跡周辺の局地的な現象ではなく、阿賀野川中・下流域に広く認められものである可能性が高くなった。

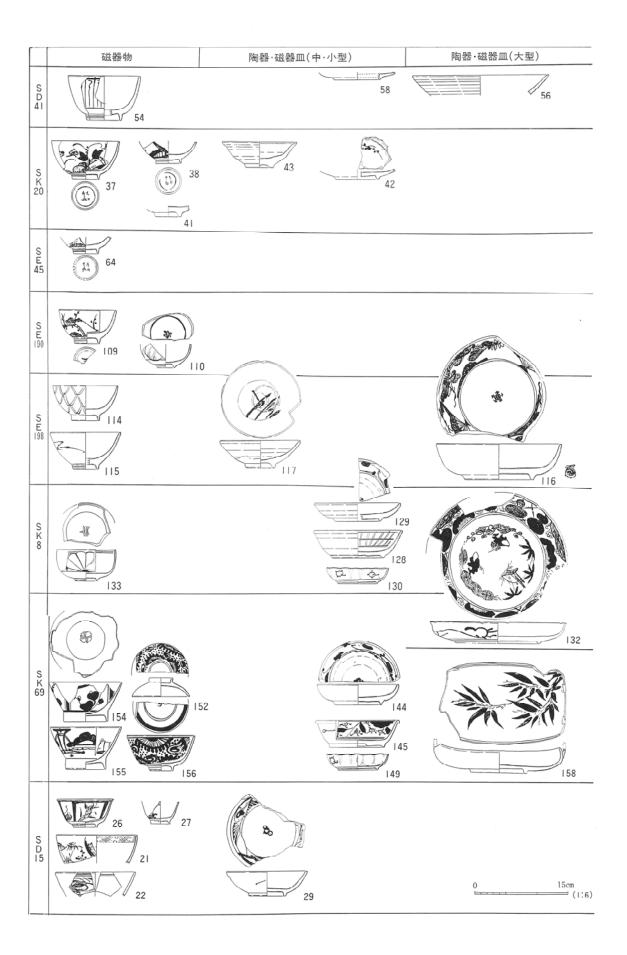
B 近世の土器・陶磁器

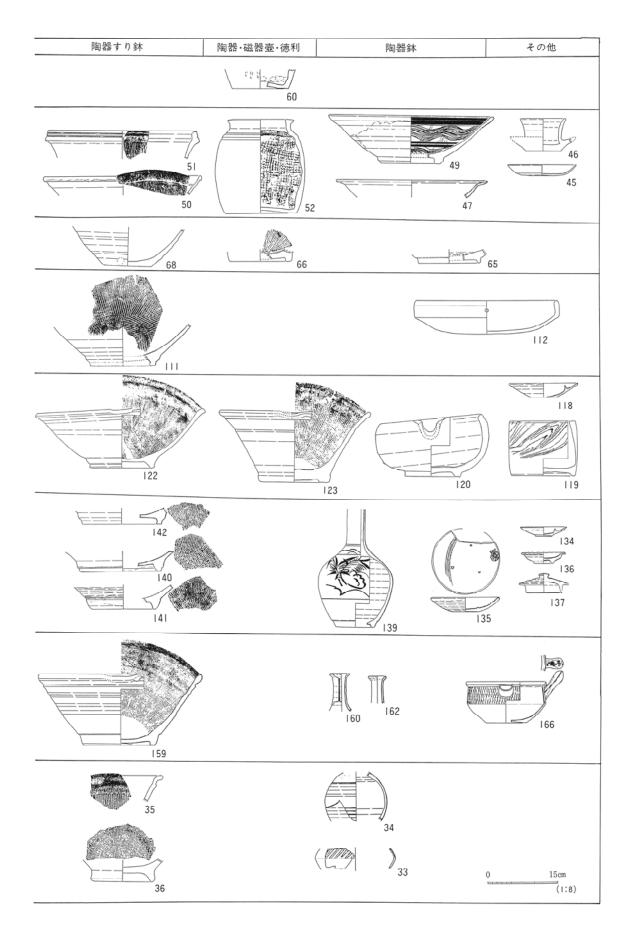
(1) 主な遺構出土の土器・陶磁器

江内遺跡からはまとまった土器・陶磁器が出土した井戸・土坑がいくつか見られる。ここでは主要なものを取り上げ年代的な位置づけを明らかにしたい。出土遺物の主体を占める肥前陶磁器の年代については大橋康二氏の編年〔大橋1989〕に拠っている。以下第11図に添って記述する。

S D41出土の陶磁器椀には細身で高い高台を持つもの (54)、54に比べると高台が低く内側に「太明年製」の銘を持つ椀 (55) がある。肥前系磁器皿には底径が小さく幅広の高台を持ち、見込み蛇ノ目釉剝ぎで高台無釉のもの (57) と低平な高台を持つもの (58)、口径20cm前後の大型のもの (56) がある。このほか京焼風陶器椀の底部と肥前系陶器壺の底部がある。これらのうち56・59・60は細かな年代比定ができない。54・57・58は大橋編年Ⅲ期 (17世紀後半) を中心とするものと考えるが、55はⅣ期 (17世

¹⁾ 瓷器系陶器については鶴巻康志氏より多くの御教示をいただいた。





第11図 主要遺構出土の土器・陶磁器

紀末~18世紀後半)に下る可能性が高く、遺物が廃棄された年代を示すものと考える。

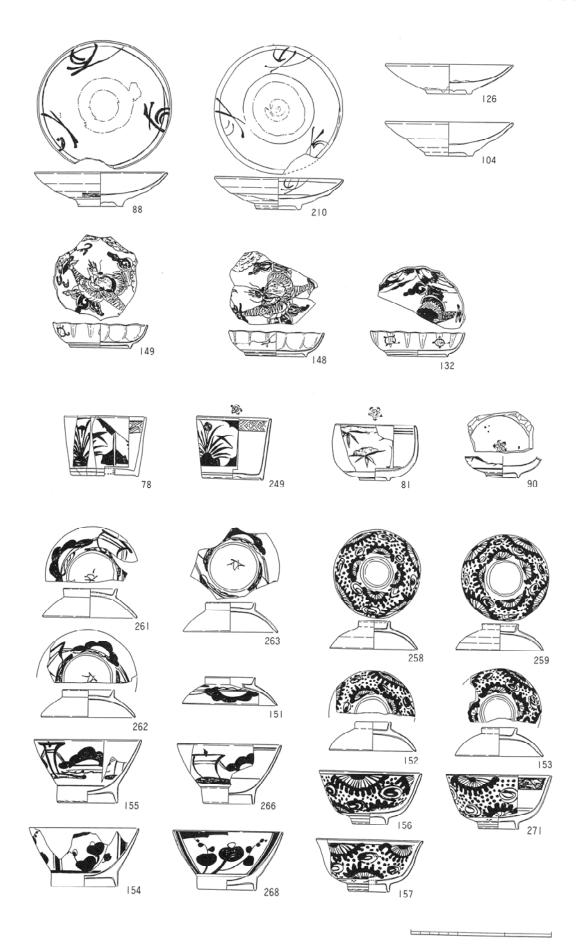
S K20出土の肥前系陶器椀は高台内側に「太明年製」の銘があるもの(37・38)と見込み蛇ノ目釉剝ぎで高台無釉のもの(41)がある。肥前系陶器皿には見込みに砂目痕のある溝縁皿(43)が、肥前系磁器皿には幅広で低平な高台を持つものが確認できる(42)。鉢には京焼き風陶器(47)といわゆる刷毛目唐津が確認できる(49)。擂鉢は口縁部に幅広の面を持ち、沈線が2条巡るもの(51)、口縁部が玉縁状となる肥前系のもの(50)がある。肥前系陶器壺は口縁部を外側につまみ出し、体部内面には格子目文が残るものである(52)。このほかに凸帯を持ち、内面に格子目文が残る甕、無釉陶器の天目台・皿(46・45)が存在する。これらのうち42・43は17世紀に遡るもので、45~47は年代の比定が難しいが、37・38・49・50など多くのものは大橋編年Ⅳ期(17世紀末~18世紀後半)の中でも古い時期のものと考える。遺物の廃棄された年代は18世紀の中でもそれほど新しい時期にはならないであろう。

SE45からは高台内側に「太明年製」銘のある肥前系磁器椀(64)のほか、擂鉢には無台で底部が回転糸切り後無調整の肥前系のもの(68)、断面方形の高台を持つもの(66)がある。18世紀前半を中心とする時期のものであろう。

S E 190出土の肥前系磁器椀には外面に梅樹文を表わすもの(109)、見込みにコンニャク印判による花文があり、細く低い高台を持つ丸椀(110)がある。肥前系陶器擂鉢は高台を持ち見込みには放射状の卸目が密に入り、内外面とも鉄釉がかかるものである(111)。土師器焙烙は比較的長い口縁部を持ち丸底となるものである(112)。109・110は大橋編年のⅣ期(17世紀末~18世紀後半)に、111はⅣ期の後半からⅤ期(18世紀中葉~19世紀)にそれぞれ比定できるものであり、112は江戸の編年に当てはめるならば18世紀中葉を前後する時期のものと考える。遺物の廃棄年代は18世紀中葉から後半を中心とする時期であろう。

SE198出土の肥前系磁器椀は外面に二重網目文を表わすもの(114)、見込み蛇ノ目釉剝ぎで外面に枝折梅を表わすもの(115)がある。このほか椀形態では、見込み蛇ノ目釉剝ぎで高台無釉の京焼き風陶器椀(117)も確認できる。肥前系磁器皿は見込みにコンニャク印判による五弁花、高台内側に渦福が存在するものが確認できる(116)。陶器擂鉢には肥前系のもの(122)と、そうでないもの(123)があり、ともに、高台を持ち内外面とも鉄釉が掛かり、見込みには放射状の卸目が密に入るものである。このほかに陶器灯明皿(118)・土師器火入れ(119)・産地不明の鉄釉がかかった片口を持つ鉢(120)がある。118~120・123は年代の比定が難しいが、114・115・116はいずれも大橋編年Ⅳ期(17世紀末~18世紀後半)のものであり、117も18世紀台のものであろう。122は大橋編年Ⅳ期後半からⅤ期(18世紀中葉から19世紀)のものと考えられる。遺物の廃棄年代はSE190に後続し、18世紀末前後のものであろう。

SK8の肥前系磁器椀は内彎する体部に細く低い高台を持つ(133)。肥前系磁器皿は見込み蛇ノ目釉 剝ぎで、見込み中央にコンニャク印判による五弁花があるもの(129)、蛇ノ目凹高台で見込み中央にコンニャク印判による竹を表わすもの(128)、底径が大きく細く低い高台を持つもの(130)、外面に唐草文、見込みに松竹梅を表わす大型のもの(132)がある。擂鉢はいずれも肥前系のもので、見込みには放射状の卸目が密に入るものである(140~142)。このほかに瀬戸・美濃の灰釉小皿(136)、内面に菊花の浮文がある陶器灯明皿(135)・土瓶蓋(137)がある。136は16世紀代まで遡る可能性があり、129・130・132はいずれも大橋編年Ⅳ期(17世紀末から18世紀後半)のものであるが、128は大橋編年Ⅴ期(18世紀末~19世紀)まで下るものである。140~142は大橋編年Ⅳ期後半からV期(18世紀中葉~19世紀)のものであり、遺物の廃棄年代はSE198に後続し18世紀末以降であるが19世紀に入ったとしても



第12図 揃いの食器

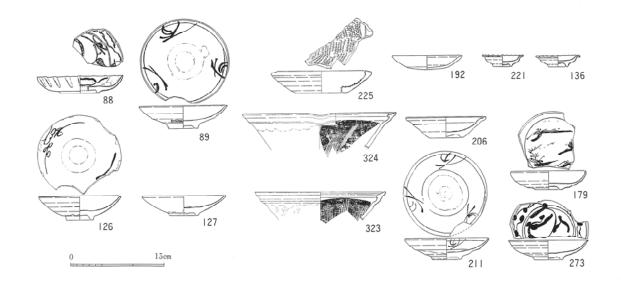
それほど新しい時期にはならないものと考える。

S K 69出土の肥前系磁器椀は広東椀・小広東椀(152・154~156)によって占められる。肥前系磁器皿は見込み蛇ノ目釉剝ぎで見込み中央にコンニャク印判五弁花があるもの(144)、蛇ノ目凹高台で高い高台を持つもの(145)、底径が大きく細く低い高台を持つもの(149)があり、他に糸切り細工を行ない平面形を隅丸方形にした京焼き風陶器(158)が確認できる。擂鉢は肥前系のものは出土しておらず、高台を持ち、口縁部が玉縁状で見込みに放射状卸目が密に入るものが確認できる。これらのほかに肥前系磁器徳利(160)、内外面に鉄釉のかかる肥前系陶器徳利(162)、行平鍋(166)がある。このうち159・160・162については明確な時期比定ができないが、144・149は大橋編年Ⅳ期(17世紀末~18世紀後半)、145・152・154~156は大橋編年Ⅴ期(18世紀末~19世紀)、166は18世紀末以降一般化するものであり、遺物の廃棄年代についてはSK8にやや後続するものと考える。

SD15出土の磁器椀には広東椀(21・22)のほかに端反椀(26)が確認できる。皿は見込み蛇ノ目釉 剝ぎで高台無釉の肥前系磁器のものと、蛇ノ目凹高台で内外面に染付により文様を表わす京焼き風陶器 のもの(29)がある。すり鉢は口緑端部が外側に屈曲し口縁下端に凸帯が巡るもの(35)、端部の丸い高い高台を持ち、見込みに放射状の卸目が密に入るもの(36)がある。このほかにいわゆる刷毛目唐津の徳利(34)が確認できる。遺物の廃棄年代はSK69に後続するものであろう。

以上、主要な遺構出土の土器・陶磁器について述べてきた。遺構内からまとまって土器・陶磁器が出土するようになるのは大橋編年のIV期以降であるが、17世紀末以前の遺物が出土していないわけではない。大橋編年I期に平行する遺物は少ないが、II〜III期にかけては一定量の遺物が出土している(第13図)。おそらく17世紀前半頃には当地に集落が成立したものと考えられ、これは文献で知られる川口集落の動向とほぼ一致する。

なお17世紀末以降の肥前陶磁器の増加については、清朝磁器の輸入復活により海外需要が減少し、国内向けの日常雑記を生産しはじめるという肥前陶磁器の生産地の変化(大橋1989)のほかに、西廻り航路の確立、在地における商品経済の発達といった要素が上げられる。ただしこれら三点は個々に独立して進展したわけではなく、相互に関連を持ちながら展開していったものであることは言うまでもない。



第13図 16~17世紀の土器・陶磁器

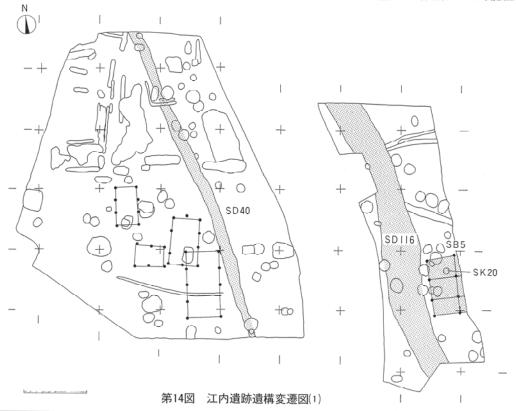
なお、出土する陶磁器の大半を肥前系のものが占め、堺・東海諸窯のものがほとんど入らない様相は、 江戸とは大きく異なり、金沢城下の様相に近い。近世のこのような土器・陶磁器の組成は、在地窯が存在 し活発に生産を行なっている越中を除けば、おそらくは日本海側に広く見られるものであろう。ただし、 金沢城下との差異をあげるとすれば、江内遺跡出土の陶磁器には見込み蛇ノ目釉剝ぎの椀・皿類がより多 く見られる点が上げられよう。

(2) 近世の瓦器・土師器

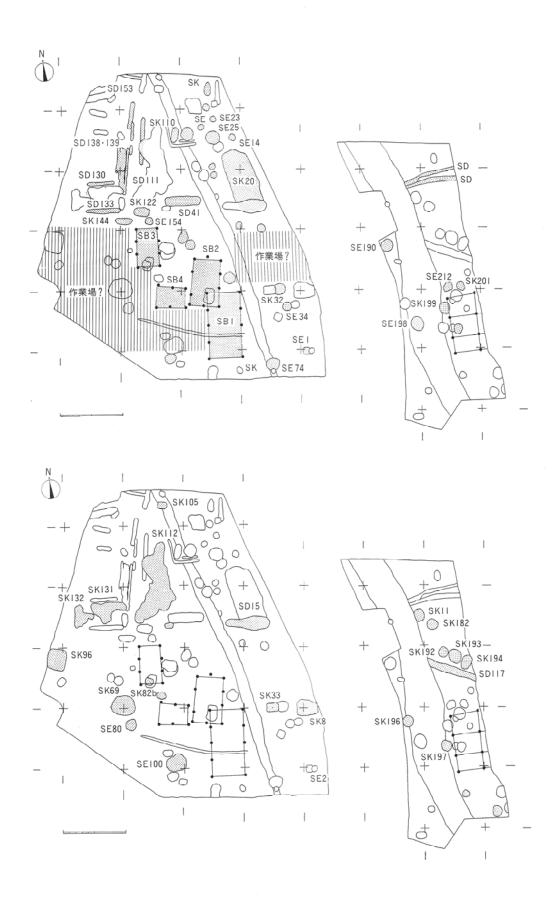
江内遺跡から出土した土師器・瓦器には焙烙・火鉢・植木鉢・火入れ・火消し壺等がある。土師器・瓦器の中には胎土中に海綿骨針を多く含むものが一定量存在する。海綿骨針は阿賀野川以南の蒲原平野から出土する土器に各時代を通じてみられるものである。軟質で壊れやすく運搬に困難を伴う土師器・瓦器の特徴を考えても、土師器・瓦器の多くは近接した地域で生産された可能性が高い。SE190からは「高井」という押印を持つ土師器焙烙が出土しているが、「高井」が仮に生産地を示すものとすれば、周辺の地域では現在の白根市の高井興野があげられる。

江内遺跡に先行する15・16世紀の越後における土器・陶磁器の組成をみると、在地での土師器・瓦器 生産は低調で、瓦器すり鉢が現在の岩船郡から北蒲原郡北部にかけて、内耳鍋が頚城地方の内陸部で少 量見られるほかは、有力者の居宅と考えられるような遺跡から定量の土師器皿が出土する程度である。

これに対し、関東地方や中部高地では15・16世紀に在地産の鍋やすり鉢が一定量存在する。蒲原平野における新田開発には北陸地方とともに信州地方からも多くの移住があった。現在の白根市の高井興野も天正から文禄年間の間に信濃の高井蔵人が移住して開発したという[小村他編1988]。在地における土師器生産が活発でなかった越後においては、信濃における移民が土師器生産の一端を担った可能性は



1)89・105・126・127・210・211のような底径が小さい蛇ノ目釉剝ぎの陶磁器は金沢城下ではほとんど出土していないことを木立雅朗・増山仁・滝川重徳氏より御教示をいただいた。



第15図 江内遺跡遺構変遷図(2)

あろう。ただし、越後で出土する焙烙は内耳を基本的に持たず、18世紀以降は丸底化するなど信州とは 異なる点も存在することは留意しておかなければならない。

2. 遺 構

今回の調査では年代を知りうるような土器・陶磁器が出土した遺構がいくつか検出された。また遺構覆土に寛政8年(1798)年の洪水堆積層と考えられる茶褐色シルトが存在する遺構も見られる。以下ではこれらのことを基に今回の調査で検出された遺構の年代的な変遷を明らかにしたい。

今回の調査で検出された遺構の中で最も古いものはB区を南北に流れるSD166である。SD166の覆土上層からは14世紀の遺物が出土しており、これは溝の埋没年代と大きくは違わないものと考える。SK204も遺構底面から珠州T種壺の底部が出土しており、近接した時期のものである可能性が高い。また寛政8年の洪水堆積層が遺構覆土上面に堆積する遺構に切られるSK203も中世に遡る可能性がある。SB5は大半が調査区外にのびることから詳細は不明だが、柱穴掘方が小型であり、大型の掘方を持つものが多い近世の掘立柱建物とは異なることから、中世に遡る可能性が高い。SD40もSD166とほぼ方向が一致し、近世の遺構に切られること、近世の掘立柱建物とは主軸が一致しないことなどから考え、中世に遡る可能性が高い(第15図)。

遺跡は15世紀には一旦廃絶し、明確な遺構が再度確認できるようになるのは17世紀後半以降である。 SB2は柱穴内から出土した遺物から考え17世紀後半から18世紀前半にかけて建てられたものであろう。 他の掘立柱建物3棟も17~18世紀代のものである可能性が高い。SE45やSK144も覆土中の遺物から考え、これに近い時期のものであろう。また寛政8(1798)年の洪水堆積層と考える茶褐色シルトが覆土上層に堆積するSE34・47・79・90・14・21・23・25・25・28・190・202・211、SK20・27・199・201、SD41、調査区北西存在する小型の溝(SD111・115・116・130・133・138・139など)も近い時期のものと考える。

重複する SB1・2の前後関係は明らかにできないが、大型の建物 SB1・2は主屋と考えられ、小型の SB3・4 はそれぞれに対応する副屋であろう。当期の遺構の分布を見ると、主屋に近接して井戸があり、やや離れて土坑がある。また主屋の東西には遺構の希薄なところがそれぞれあり、これらは作業場となる可能性があろう。また北西側の小型の溝は根菜類などの耕作痕の可能性がある。(第16図上)

これに後続する18世紀末から19世紀の遺構としては $SE80 \cdot 100$ や $SK8 \cdot 69 \cdot 96$ 等の大型で大量の遺物を出土した土坑、 $SK112 \cdot 130 \cdot 131$ 等の大型の不整形の土坑、 $SK33 \cdot 63 \cdot 70 \cdot 82a \cdot 105 \cdot 120$ など暗茶褐色シルト質粘土を覆土に持ち、平面形が方形もしくは隅丸方形となる土坑をあげうる。

なお19世紀以降も川口集落は存続し現在に至るが、川口集落の成立を17世紀初頭であり、約400年弱集落が存続している。16~17世紀に成立した集落が現在まで存続することは、一般的に見られることであるが、これに対し弥生時代から中世では400年以上存続する遺跡は、地域の拠点となるような大規模な遺跡を除けば極めて希である。長期間存続する集落の普遍化には複数の要因が相互に関連した結果と考えられ、政治的な理由のほかに、家督の相続方法の確立や家族および「家」、あるいは土地の所有に対する認識や価値観の変化があった可能性もあろう。

¹⁾ 坂井秀弥氏より御教示をいただいた。

要 約

- 1 江内遺跡は新潟県北部の新津市大字川口字江内に所在する。遺跡は能代川右岸の自然堤防上に位置する。
- 2 調査は磐越自動車道の建設にともない、平成4年度に実施した。実質的な調査面積は3,400㎡である。
- 3 調査の結果、奈良・平安時代と中世・近世の遺物、中世・近世の遺構が検出された。
- 4 中世の遺構には用水路と考えられる大規模な溝のほか、掘立柱建物1棟・土坑2基などがある。
- 5 中世の遺物は14世紀を中心とするものである。土器・陶磁器には土師器皿、青磁椀、珠洲甕・壺・ 擂鉢・小鉢、瓷器系陶器甕がある。瓷器系陶器は笹神丘陵産であり、珠洲擂鉢との共伴は笹神丘陵 の瓷器系陶器の編年を行なう上で貴重な資料となる。木製品には船形・曲物・折敷等がある。
- 6 近世の遺構には掘立柱建物4棟の他、多数の土坑・井戸・ピットなどがある。これらの遺構は、 寛政8 (1796) 年の洪水堆積層と考える土層の有無により、その変遷がある程度明かとなった。これは遺構内から出土する遺物の既存の年代観とも大きく矛盾しない
- 7 近世の遺物には土器・陶磁器、土・陶磁製品、石製品、木製品がある。
- 8 陶磁器は肥前系のものが大半を占め、瀬戸・美濃産のものは少ない。このような様相は江戸とは 異なり、金沢城下の様相に類似する。陶磁器の大半を肥前系が占める状況は日本海沿岸に広く見ら れるものであろう。
- 9 近世の土師器・瓦器には在地産と推測されるものが定量存在する。
- 10 遺跡は14世紀に成立し、15世紀には一旦廃絶し、再び集落が営まれるのは17世紀前半代からである。集落はこれ以後現在まで存続し、集落の存続期間は現在まで約400年である。17世紀に成立した新田村が現在まで集落として存続する状況は、江内遺跡のみに見られるものではなく、一般的にみられるものである。これは短期間で廃絶することの多い弥生時代から中世の遺跡とは大きく異なる。

別表1 土器・陶磁器観察表

SD166 (図版17 1~20)

番号	種	類	器 種	法 量	手 法	文様	出土地点・その他
. 1	青	磁	椀	□17.0		外面片切彫り鎬蓮弁文	E
2	青	磁	椀	□16.0		内外面無文	
3	青	磁	椀	底 6.6	高台削り出し	内面片切彫り劃花文	
4	土部	市器		底 8.3	底部回転糸切り		
5	須恵	思想	直口壷	□12.0	体部外面平行タタキのちロクロナ デ		
6	珠	洲	T種壷		外面平行タタキ, 内面無文当て具	外面肩部に「○」の押印	
7	珠	洲	小 鉢	□19.0	外面平行タタキ, 内面無		
8	珠	洲	小 鉢	□18.0	文当て具		
9	珠	洲	小 鉢		-		
10	珠	洲	小 鉢				
11	珠	洲	摺 鉢	□30.0			
12	珠	洲	摺 鉢	□40.0			
13	珠	洲	摺 鉢	-			
14	珠	洲	摺 鉢	底12.0	底部静止糸切り		
15	珠	洲	摺 鉢	底12.9	底部静止糸切り		
16	白	瓮	甕		非ロクロ成形	肩部に2条の沈線	笹神産
17	白	瓷	壅	□38.0	非ロクロ成形	-	笹神産
18	白	瓷	甕	底22.6	非ロクロ成形	肩部に二重の方形+「×」の押印	笹神産
19	白	瓷	甕	底22.0	非ロクロ整形		笹神産
20	白	瓷	甕	底17.0	非ロクロ整形		笹神産

SD15 (図版18 21~36)

番号	種	類	器種	法 量	手 法	施釉	文様	出土地点・その他
21	磁	器	広東椀	□12.8		透明釉	呉須染付、外面竹・草、内面四方襷	肥前系
22	磁	器	広東椀?	□11.8		透明釉	呉須染付, 外面草花? · 界線, 内面界線	肥前系
23	磁	器	広東椀?	□10.0		透明釉	呉須染付,外面草花?,内面無文	肥前系
24	磁	器	広東椀?	□11.2		透明釉	呉須染付,外面草花?,内面無文	肥前系
25	磁	器	丸 椀	底 3.8		透明釉	呉須染付,外面樹木・岩,内面無文	肥前系
26	磁	器	端反椀	口 9.0 底 4.5 高 4.0		透明釉	呉須染付,外面帯線・竹・渦巻き,内面 界線,見込み宝	肥前系?
27	磁	器	小 杯	底 3.1	高台畳付砂	透明釉	呉須染付, 外面草花, 内面無文	肥前系
28	磁	器	Ш	口13.0 底 4.4 高 4.4		透明釉, 見込み 蛇ノ目釉剝ぎ, 高台無釉	吳須染付,外面無文,内面唐草	肥前系
29	陶	器	Ш	口12.8 底 6.0 高 3.9	蛇ノ目凹高台	透明釉	呉須染付,外面唐草,内面不明,身込み 宝	京焼系
30	陶	器	椀?	底 4.4		灰釉	白泥刷毛目	肥前系
31	陶	器	椀	底 2.8		内面透明釉, 外 面鉄釉	無文	
32	陶	器	鉢	□19.0		灰釉	無文	
33	陶	器	壷?			無釉	外面斜行する並行沈線	
34	陶	器	徳 利			外面透明釉, 内 面無釉	外面白泥刷毛目	肥前系
35	陶	器	摺 鉢			鉄釉	無文	肥前系?
36	陶	器	摺 鉢	底12.2		鉄釉	無文	肥前系?・見込み放射状 卸目

SK20 (図版 37~53)

				-				
37	磁	器	丸 椀	口11.0 底 4.4 高 5.9		透明釉	呉須染付,外面草花・岩,内面無文	肥前系,「太明年製」銘
38	磁	器	丸 椀	底 4.2	高台畳付砂	透明釉	呉須染付, 外面草花, 内面無文	肥前系,「太明年製」銘
39	磁	器	丸 椀	底 4.2		透明釉	呉須染付、外面岩・草、内面無文	肥前系,「太明年製」銘
40	磁	器	Ш	□12.0		透明釉	呉須染付,外面無文,内面界線	肥前系
41	磁	器	Ш	底 4.2		透明釉, 見込み 蛇ノ目釉剝ぎ, 高台無釉	無文	肥前系
42	磁	器	Ш	底 7.0	ロクロ打ち型成 形,高台畳付砂	透明釉	吳須染付,外面無文,見込み草花	肥前系

番号	種	類	器 種	法 量	手 法	施 釉	文 様	出土地点・その他
43	陶	器	溝縁皿	口12.0 底 4.4 高 4.0	身込み砂目	灰釉,高台無釉	無文	肥前系
44	陶	器	溝縁皿	□12.0		灰釉	無文	肥前系
45	陶	器		口11.0 底 3.2 高 1.8	底部回転糸切り, 体部下半ロクロ ケズリ	無釉	無文	肥前系?
46	陶	묾	天目台	口 6.6 底 5.3 高 5.6	底部回転糸切り	無釉	無釉	肥前系?
47	陶	器	鉢	□24.0		灰釉	無文	
48	陶	器	鉢	□33.0		透明釉,体部外 面無釉	白泥刷毛目	肥前系
49	陶	器	鉢	口34.6 底12.6 高20.3		透明釉, 体部・ 底部外面無釉	白泥刷毛目	肥前系
50	陶	器	摺 鉢	□33.0		口縁部透明釉	無文	肥前系
51	陶	器	摺 鉢	□31.4		口縁部鉄釉	口縁部外面沈線2条	瀬戸?
52	陶	nn fiù	壷	口10.4 底11.4 高15.2	体部内面格子目 文当て具,底部 不調整	無釉	肩部外面沈線 2 条	肥前系
53	陶	器	甕		体部内面格子目 文当て具	無釉	肩部外面凸带 2条	肥前系

S D 41 (図版19 54~60)

54	磁岩	丸 椀	口11.6 底 5.6 高 7.4	透明釉	呉須染付,外面よろけ縦縞,内面無文	肥前系
55	磁 暑	丸 椀	底 4.4	透明釉	呉須染付, 外面界線, 内面無文	肥前系,「太明年製」銘
56	磁岩	ş <u>ш</u>	□22.0	透明釉	呉須染付,外面無文,内面草花?	肥前系
57	磁岩	=	底 4.0	透明釉, 身込み 蛇ノ目釉剝ぎ, 高台無釉	吳須染付,外面無文,内面界線	肥前系
58	磁岩	} <u> </u>	底 7.4	透明釉	呉須染付,外面無文,内面界線	肥前系
59	陶器	財 丸椀?	底 5.2	透明釉	無文	京焼系
60	陶器	臺	底 9.0 底部不調	整 透明釉	無文	肥前系

S.K45 (図版19 61~63)

· 61	磁	器	丸 椀	底 4.0	透明釉	呉須染付,外面一重網目,内面無文	肥前系
62	磁	器	丸 椀	底 3.6	透明釉	呉須染付, 外面不明, 内面無文	肥前系,被熱
63	磁	器	Ш	口13.0 底 2.8 高 7.4	透明釉	呉須染付, 外面唐草·界線, 内面不明	肥前系

SK47 (図版19 64~68)

64	磁	器	丸 椀	底 4.0		透明釉	呉須染付,外面岩·草花,内面無文	肥前系
65	陶	器	鉢	底13.2		鉄釉, 内面・高 台無釉	無文	
66	陶	器	摺 鉢	底13.0	非ロクロ成形?	鉄釉		胎土中に長石多く含む, 見込み放射状卸目
67	陶	器	摺 鉢	底14.0	底部回転糸切り	無釉	無文	肥前系,見込み放射状卸 目
68	陶	器	摺 鉢	底10.0		無釉	無文	肥前系, 見込み放射状卸 目

E 7 ・ピット10 (図版19 69~72)

69	磁	器 広東椀	口11.8 底 6.4 高 6.8	透明釉	具須染付,外面よろけ縦縞,内面界線, 見込み二重井桁・界線	肥前系
70	陶	器皿	□16.0	透明釉	呉須染付, 外面唐草, 内面不明	京焼系
71	磁	器 仏飯器	口 6.0 底 5.6 高 5.7	透明釉	吳須染付 外面蛸唐草,内面無文	肥前系
72	陶	器鉢	底 8.0	透明釉	白泥刷毛目	肥前系

SK95 (図版19 73・74)

番号	種	類	器和	重 法量	手 法	施和	1 3	女 様	出土地点・その他
73	陶	韶	灯明』	底 4.8	底部回転糸切り	透明釉,底部 面無釉	外 無文		肥前系
74	陶	器	摺金	底11.0	底部回転糸切り	無釉	無文		肥前系, 見込み放射状質 目
S K	100	(図)	版19	75 • 75)					
75	磁	器	Ш	□13.2		透明釉	呉須染付,	外面無文, 内面唐草?	肥前系
76	磁	器	小杉	下 □10.0		透明釉	呉須染付, 無文	外面網干?・岩・界線,内面	肥前系
S K	21	(図版	ī19 7	7 • 78)					
77	磁	器	丸杉	ゼ □11.0		透明釉	呉須染付,	外面界線,内面無文	肥前系
78	磁	器	Ш	底 5.0	高台畳付砂	透明釉	呉須染付,	外面無文, 内面不明	肥前系
S K	91	(図版	ī19 7	9 • 80)					
79	磁	品	简材	豆 日 8.6 底 6.2 高 6.2	蛇ノ目凹高台	透明釉,底部 ノ目釉剝ぎ	蛇 吳須染付,	外面菖蒲・岩、内面四方襷	肥前系
80	磁	器	広東を	D11.0 底 3.8 高 3.8		透明釉		外面半菊花?・渦福・水玉, 界線, 見込み「寿」	肥前系
s D	130	(図)	版19	81 • 82)	-	•			
J	244	器	丸杉	ē □11.0		透明釉	呉須染付,	外面一重網目,内面無文	肥前系
81	磁	****				透明釉	IT 25 86 11	外面笹・岩, 内面界線, 身込	

- 83	磁器	丸 椀	□12.0	透明釉	呉須染付,外面一重網目文,内面無文	肥前系
84	磁 器	徳 利	□ 4.0	透明釉,体部内 面無釉	呉須染付, 外面唐草, 内面無文	肥前系

SK122 (図版20 85~87)

S D 116 (図版20 83 · 84)

85	磁岩	<u> </u>	底 5.0	高台畳付砂	透明釉	吳須染付, 外面無文, 内面草花 肥前系
86	磁岩	В Ш	底 8.0	高台畳付砂	透明釉	呉須染付, 外面無文, 内面草花 肥前系
87	磁岩	F III	底 6.0		透明釉	吳須染付, 外面無文, 内面界線·草花, 肥前系
						見込み蝶

SK144 (図版20 88・89)

88	磁	BE AF	Ш	口13.8 底 2.7 高 6.0	ロクロ型押し成 形	透明釉、斑あり	呉須染付,	外面無文,	内面不明	肥前系
89	陶	器	M	口14.0 底 4.8 高 3.6		灰釉,見込み蛇 ノ目釉剝ぎ,高 台無釉	鉄絵染付,	外面無文,	内面帆掛舟?	肥前系

S D 178 (図版20 90~96)

90	磁	器	広東椀	底 4.1		透明釉	呉須染付,外面横線・笹・界線,内面界線	肥前系
91	磁	器	丸 椀	底 3.4		透明釉	呉須染付,外面横線・笹・界線,内面界 線,身込み手書き五弁花	肥前系
92	磁	器	Ш	□14.0		透明釉	呉須染付, 外面唐草, 内面界線・流水	肥前系
93	磁	器	椀?	□11.0		透明釉	無文	肥前系
94	磁	器	Ш	□20.0		透明釉	呉須染付,外面唐草,内面型紙刷り牡丹 唐草	肥前系
95	陶	器	杉形椀	底 3.0		透明釉•高台無釉	鉄絵染付, 外面若松, 内面無文	京焼系
96	土師	器	焙 烙	□31.0	非ロクロ成形, 口縁部ヨコナデ		無文	

SE176 (図版20 97~107)

97	磁	器	椀	□10.0		透明釉	呉須染付, 外面二重網目, 内面一重網目	肥前系
98	磁	쁆	椀	底 4.0		透明釉	呉須染付, 外面不明, 内面無文	肥前系,「太」銘
99	磁	뀲	椀?	底 4.4	高台畳付砂	透明釉	無文	肥前系?
100	磁	쁆	椀	底 3.4		透明釉	呉須染付,外面界線・素書鋸歯,内面素 書菊花?	肥前系
101	磁	器	小 杯	底 2.8		透明釉	無文	肥前系
102	磁	쁆	小 杯	□ 7.4		透明釉	無文	肥前系

番号	種	類	器 種	法 量	手 法	施釉	文 様	出土地点・その他
103	陶	器	椀?	□ 9.1		灰釉	無文	京焼系
104	陶	뿚	天目椀	底 2.8		透明釉,高台無釉	鉄絵染付, 外面不明, 内面無文	京焼系
105	陶	部	Ш	口13.4 高 3.5 底 5.0	回転糸切り, 見 込み砂目	透明釉, 見込み 蛇ノ目釉剝ぎ, 高台無釉	無文	肥前系
106	陶	器		□19.5		鉄釉, 高台無釉	白泥刷毛目	肥前系
107	磁	器	徳 利	口 4.0		透明釉	無文	肥前系

S E 190 (図版20 108~113)

			_				
108	磁器	丸 椀	□ 9.0		透明釉	呉須染付,外面界線•樹木,內面橫線•界線	肥前系
109	磁 器	椀	口 9.0 底 4.0 高 5.3		透明釉	呉須染付、外面梅・岩、内面無文	肥前系
110	磁 器	椀	底 2.8		透明釉	呉須染付, 外面水·斜格子, 内面界線	肥前系
111	陶 器	摺 鉢	底14.0	高台畳付砂, 見 込み重ね焼き痕	鉄釉	無文	肥前系, 見込み放射状卸 目
112	土師器	焙 烙	口30.2 高 7.0	非ロクロ成形, 口縁部ヨコナデ	無釉	口縁部に「高井」の押印	在地?,胎土中に海綿骨 針
113	土師器	焙 烙	□31.0	非ロクロ成形, 口縁部ヨコナデ	無釉	無文	在地?, 胎土中に海綿骨 針

SE198 (図版21 114~123)

114	磁	器 椀	口10.4 底 4.4 高 5.6		透明釉	吳須染付,外面二重網目,内面無文	肥前系,覆土上層
115	磁	器 椀	口11.2 底 4.0 高 6.0		透明釉, 見込み 蛇ノ目釉剝ぎ	呉須染付,外面界線・帯線・折枝梅,内 面無文	肥前系
116	磁	## <u> </u>	口20.0 底11.0 高 5.8		透明釉	具須染付,外唐草,内扇面・花器,見込 みコンニャク印判五弁花・底部外面「渦 福」	肥前系
117	陶	器 椀	口12.6 底 4.0 高 4.5	削り出し高台	灰釉・見込み蛇 ノ目剝ぎ・高台 無釉	鉄絵染付, 内·外無文, 見込み船?	京焼系
118	陶	器 灯明皿	口11.0 底 4.0 高 2.3	体部外面下半・ 底部外面へラケ ズリ	灰釉, 体部外面 下半•底部外面 無釉	無文	信楽系?
119	土師	器 火入れ	口10.4 底10.0 高 8.8		無釉	橙色土と白色土の混合による木目状の文様	在地?
120	陶	番 鉢	口14.2 底 8.8 高10.1	削り出し高台	鉄釉,高台無釉	無文	
121	陶	器 摺 鉢	底11.0	高台畳付砂, 見 込み重ね焼き痕	鉄釉	無文	肥前系, 見込み放射状卸 目
122	陶	器 摺 鉢	口35.5 底13.2 高13.1	高台畳付砂, 見 込み重ね焼き痕	鉄釉	無文	肥前系, 見込み放射状卸 目
123	陶	器 摺 鉢	口32.0 底15.0 高15.4	高台畳付に砂目 5 ケ所	鉄釉	無文	長石粒含む, 見込み放射 状卸目

S E 202 (図版21 124・125)

124	陶	器	壷	底 6.0	鉄釉, 高台無釉	無文	肥前系?
125		器	摺 鉢	底16.0	鉄釉	無文	越中瀬戸?, 見込み放射

SB1 (図版22 126・127)

126	磁 器	Ш	口13.2 底 4.4 高 3.8	削り出し高台	透明釉,見込み 蛇ノ目釉剝ぎ, 高台無釉	呉須染付,外面無文,内面枝折梅	肥前系
127	陶 器	Ш	口13.6 底 4.8 高 3.1	回転糸切り,削 り出し高台,見 込み砂目	透明釉, 見込み 蛇ノ目釉剝ぎ, 高台無釉	無文	肥前系

SK8(図版22 128~148)

128	磁	뀲	Ш	口14.4 高 4.4	蛇ノ目凹高台	透明釉	吳須染付,外面無文,内面界線・二重格 子目、見込みコンニャク印判竹
				底 8.4			

番号	種	類	器 種	法 量	手 法	施釉	文様	出土地点・その他
129	磁	11.0 11.0 11.0 11.0 11.0 11.0 11.0 11.0	Ш	口14.0 底 7.2 高 3.0		透明釉, 見込み 蛇ノ目釉剝ぎ	呉須染付,外面無文,内面唐草, 見込み コンニャク印判五弁花	肥前系
130	磁	器	Ш	口10.0 底 4.0 高 2.6	ロクロ型打ち成 形	透明釉	呉須染付,外面宝,内面獅子・雲	肥前系
131	磁	器	Ш	口 8.0 底 4.4 高 2.0		透明釉,口銹	呉須染付,外面無文,内面家屋・山水	肥前系
132	磁	nn nn	Ш	口21.8 底13.4 高 3.4	ハリ支え	透明釉	呉須染付,外面唐草,内面界線・ひょう たん・宝,見込み松葉・梅花・竹	肥前系,「成化年製」銘
133	磁	器	丸 椀	口 9.4 底 3.6 高 5.0		透明釉	吳須染付,外面界線・半菊・格子,内面 界線,見込み「寿」	肥前系
134	磁	器	灯明皿	口 7.4 底 2.7 高 1.5		透明釉, 底部無 釉	無文	肥前系?
135	陶	槑	灯明皿	口11.0 底 4.2 高 2.3	底部外面・体部 外面ヘラケズリ 見込みハリ支え	透明釉, 底部外面無釉	外面無文,内面箆描き沈線・菊花浮文	
136	陶	뀲	小 皿	口 7.0 底 3.2 高 1.8		灰釉	無文	瀬戸・美濃
137	陶	器	土瓶蓋	口 5.8 高 3.1		濃緑釉	無文	肥前系?
138	陶	11.0 11.0	壷	底 5.2	回転糸切り	無釉	無文	肥前系
139	磁	器	徳 利	底 8.0		透明釉,体部内 面無釉	呉須染付,外面横線・山・竹,内面無文	肥前系
140	陶	쁎	摺 鉢	底16.0		鉄釉,高台畳付 無釉	無文	肥前系,見込み放射状卸 目
141	陶	뀲	摺 鉢	底13.8		鉄釉,高台畳付 無釉	無文	肥前系, 見込み放射状卸 目
142	陶	111	摺 鉢	底17.0		鉄釉	無文	肥前系, 見込み放射状卸 目

SK69 (図版22・23 143~167)

143	磁	器	Ш	口13.8 底 8.4 高 3.5		透明釉	呉須染付,外面唐草,内面花器,見込み コンニャク印判五弁花,高台内側渦福	肥前系
144	酸	器	Ш	口13.2 底 7.4 高 3.3		透明釉, 見込み 蛇ノ目釉剝ぎ	呉須染付,内・外面唐草,見込みコンニャ ク印判五弁花	肥前系
145	磁	帥	Ш	口13.5 底 8.8 高 4.2	蛇ノ目凹高台	透明釉, 底部蛇 ノ目釉剝ぎ	呉須染付,外面宝,内面界線・雲・草?・ 宝,見込み界線・宝	肥前系
146	磁	뮲	m	口14.0 底 8.0 高 4.7	蛇ノ目凹高台, ロクロ型打ち成 形	透明釉, 底部蛇 ノ目釉剝ぎ	吳須染付,外面唐草,内面扇	肥前系
147	磁	器	Ш	口14.2 底 8.4 高 3.5	蛇ノ目凹高台	透明釉,底部蛇 ノ目釉剝ぎ	吳須染付,外面唐草,内面界線・雲・篭 目・草	肥前系
148	磁	器	m	口10.0 底 6.4 高 2.6	ロクロ型打ち成 形	透明釉	呉須染付,外面界線・宝,内面獅子・雲	肥前系
149	磁	器	Ш	口10.0 底 6.4 高 2.6	ロクロ型打ち成 形	透明釉	呉須染付,外面界線・宝,内面獅子・雲	肥前系
150	磁	器	広東椀蓋	口 9.6 鈕 5.3 高 2.8		透明釉	吳須染付,外面葡萄・茄子,内面界線, 見込み不明	肥前系
151	破	器	広東椀蓋	口10.0 鈕 5.4 高 2.8		透明釉	呉須染付,外面松,内面界線	肥前系
152	磁	器	広東椀蓋	口10.0 鈕 5.4 高 2.8		透明釉	呉須染付,外面半菊・渦・宝,内面界線・ 帯線・鋸歯,見込み「寿」	肥前系

番号	種	類	器 種	法 量	手 法	施 釉	文 様	出土地点・その他
153	磁	器	広東椀蓋	口10.0 鈕 5.4 高 2.8		透明釉	呉須染付,外面界線・半菊・渦・宝,内 面界線・帯線・鋸歯,見込み「寿」	肥前系
154	磁	110 1107	広東椀	口11.2 底 7.0 高 6.4		透明釉	呉須染付,外面界線・帯線・草花,内面 界線,見込み素書き花,底部二重方形枠 「福」?	
155	磁	器	広東椀	口11.2 底 6.4 高6.06		透明釉	呉須染付,外面帆掛舟・松,内面界線, 見込み帆掛舟	肥前系
156	磁	器	小広東椀	口10.8 底 5.5 高 3.8		透明釉	呉須染付,外面界線・半菊・渦・宝内面 界線・帯線・鋸歯,見込み「寿」	肥前系
157	磁	器	小広東椀	口11.0 底 4.4 高 5.5		透明釉	呉須染付,外面界線・半菊・渦・宝内面 界線・帯線・鋸歯,見込み「寿」	肥前系
158	陶	器	Ш	口21.0 12.5 底 9•0 高 4.3	体部・口縁部糸 切り細工	透明釉	呉須染付,内・外面無文,見込み笹	京焼系
159	陶	뀲	摺 鉢	口33.6 底16.0 高16.4	見込み重ね焼き 痕	鉄釉,高台無釉	無文	見込み放射状卸目
160	磁	器	徳 利	□ 4.0		透明釉	呉須染付, 外面不明, 内面無文	肥前系
161	稅依	器	瓶	□ 7.6		透明釉	具須染付,外面帯線·界線,内面無文	肥前系
162	陶	80 80 80	徳 利	□ 3.8		鉄釉	無文	肥前系
163	陶	器	壷	底 5.2	回転糸切り	鉄釉・底部外面 無釉	無文	
164	陶	器	甕		内面同心円当て 具	無釉	無文	肥前系
165	陶	30 207	行平鍋	□16.4	底部外面・体部 外面下半ヘラケ ズリ	鉄釉,口縁部・ 底部無釉	外面箆状工具による刺突4段, 把手草花 のスタンブ	
166	陶	器	行平鍋	口16.6 底 8.4 高 8.7	底部外面・体部 外面下半ヘラケ ズリ	灰釉,口縁部・ 底部無釉	外面篦状工具による刺突6段,把手草花 のスタンプ	
167	陶	뀲	行平鍋	口15.0 底 7.0 高 9.8	底部外面・体部 外面下半ヘラケ ズリ		外篦状工具による刺突5段	

SK96 (図版24 168~174)

168	磁 器	広東椀	底 6.0	透明釉	呉須染付,外面葡萄,内面界線,見込み 不明	肥前系
169	土師器	植木鉢	□18.0	無釉	無文	在地?
170	土師器	植木鉢	口20.0 底12.0 高13.0	無釉	無文 (墨書による人物画あり)	在地?
171	瓦 器	火 鉢		無釉	型押し陽刻,外面草花,内面無文	在地?
172	瓦 器	火 鉢		無釉	型押し陽刻,外面草花,内面無文	在地?
173	瓦 器	火 鉢		無釉	無文	在地?
174	土師器	植木鉢	□42.4	無釉	無文	在地?胎土中に海綿骨針

SK112 (図版24 168~174)

175	磁	器	小広東椀	口11.0 底 4.0 高 5.6		透明釉,見込み 蛇ノ目釉剝ぎ	呉須染付,外面界線・格子目,内面界線, 肥前系 見込み宝
176	磁	묾	小広東椀	底 4.0		透明釉	呉須染付,外面界線·格子目,内面界線 肥前系
177	磁	器	端反椀	口11.0 高 5.6 底 4.2		透明釉	呉須染付,外面界線・宝,内面界線,見 肥前系 込み宝
178	磁	器	端反椀	口 8.0 底 3.2 高 4.0		透明釉	呉須染付,外面界線・不明,内面界線, 見込み宝
179	磀	器	,	口12.0 底 3.0 高 4.4	高台畳付砂	透明釉	呉須染付,外面無文,内面界線,見込み 肥前系 遠山・樹木
180	磁	船	Ш	口 9.4 底 2.4 高 5.0		透明釉	呉須染付,外面唐草,内面無文線,見込 肥前系 み山水・東屋

番号	種	類	器種	法 量	手 法	施釉	文様	出土地点・その他
181	陶	쁎	灯明皿	口 8.4 底 4.0 高 1.8	底部外面・体部 外面下半ヘラケ ズリ	透明釉,底部無釉	無文	信楽系
182	陶	뀲	甕	□39.0		透明釉	無文	肥前系

SE80 (図版24 183~185)

183	陶器	灯明器	口11.0 底 4.6 高 2.9	回転糸切り	鉄釉, 体部外面 下半無釉	無文	
184	陶器	鉢	底 9.6	削出し高台	鉄釉, 高台無釉	無文	
185	陶器	童	□15.4		鉄釉, 口縁部無 釉	無文	

SK131 (図版24 186~186)

186	陶	器	摺 鉢	□36.8		鉄釉	無文	見込み放射状卸目
187	陶	쁆	椀	白10.0 底 3.7 高 5.0		透明釉	呉須染付,外面不明,内面無文	
188	磁	쁆	· <u> </u>	口14.4 底 7.4 高 5.1	蛇ノ目凹高台	透明釉, 底部外 面蛇ノ目釉剝ぎ	呉須染付, 外面無文, 内面家屋·山水	肥前系

SK177 (図版24 189・190)

189	磁	祖	小 杯	口 7.0 底 4.0 高 5.4		透明釉	呉須染付,外面牡丹・四方襷・連弁,内 面瓔珞	肥前系
190	陶	110 110	壷	底13.6	回転糸切り無釉	灰釉, 底部外面 無釉	無文	

包含層・その他の遺構 (図版24 191・202)

_							
191	青	磁	椀	□17.0		片切彫り, 鎬蓮弁	
192	土師	器	Ш	口11.0 高 2.3	非ロクロ成形		
193	珠	洲	T種壷	底	外面平行タタキ, 内面無文当て具		S K204
194	珠	洲	摺 鉢	□34.0			
195	珠	洲	摺 鉢	□34.0			
196	珠	洲	N種壷	底	静止糸切り		
197	珠	洲	T 種壷or 甕	,	外面平行タタキ, 内面無文当て具		
198	珠	洲	T 種壶or 甕		外面平行タタキ, 内面無文当て具		
199	珠	洲	T 種壷or 甕		外面平行タタキ, 内面無文当て具		
200	白	瓷	甕		非ロクロ,外面 ハケメ		笹神
201	白	瓷	甕		非ロクロ		笹神
202	白	瓷	甕		非ロクロ		笹神

包含層・その他の遺構 (近世) (図版 203~351)

203	陶	铅	丸 椀	底 4.6 底 4.4 高 6.9		鉄釉,高台無釉	無文	F 6
204	陶	뫒	端反椀	口11.8 高 6.9		透明釉	無文	S K101, 被熱
205	陶	器	丸 椀	□10.8		透明釉	無文	一次調査18T, 京焼系
206	陶	器	溝縁皿	口10.0 底 2.1 高 4.0	見込み砂目痕	灰釉	無文	G 7
207	陶	品品	溝縁皿	□13.0		灰釉	無文	
208	陶	먎	Ш	底 4.0	回転糸切り	灰釉	無文	C 6, 被熱
209	陶	뀲	Ш	底 5.7	回転糸切り	鉄釉, 体部外面 下半•底部無釉	無文	肥前系
210	陶	器	Ш	口14.0 底 5.0 高 3.7	見込み, 見込み 砂, 高台畳付砂	灰釉,見込み蛇 の目釉剝ぎ,高 台無釉	鉄絵染付,外面無文,内面帆掛け船	E8, 肥前系

番号	種	類	器 種	法 量	手 法	施 釉	文様	出土地点・その他
211	陶	器	III.	□13.6	見込み・高台畳	灰釉、見込み蛇	鉄絵染付、外面無文、内面帆掛け船	F7, 肥前系
211	huù	Si di	ш	底 4.8 高 3.4	付け砂、削り出し高台	人福, 見込み妃 ノ目釉剝ぎ, 高 台無釉	灰板(木门), 7F曲無之, F1曲型(封V)加	r 1, ACHUM
212	陶	器	M	口15.0 底 7.0 高 5.0	削り出し高台	鉄釉,見込み蛇 ノ目釉剝ぎ,高 台無釉	外面無文,内面白泥刷毛目	E 7,肥前系
213	陶	뀲		口15.8 底 7.2 高 5.3	削り出し高台	鉄釉,見込み蛇 ノ目釉剝ぎ,高 台無釉	外面無文,内面白泥刷毛目	E 5,肥前系
214	陶	器	· III.	底 4.8	削り出し高台	透明釉, 見込み 蛇ノ目釉剝ぎ, 高台無釉	無文	F 7,肥前糸
215	陶	쁆	Ш	底 5.4	削り出し高台, 見込み砂	鉄釉, 見込み蛇 ノ目釉剝ぎ, 高 台無釉	無文	F8, 肥前系
216	陶	器	Ш	□22.0	体部外面下半へ ラケズリ	鉄釉, 体部外面 下半無釉	白泥,内面白泥刷毛目	E8, 肥前系
217	陶	器	Ш	口14.2 底 6.2 高 4.7	蛇ノ目凹高台	透明釉, 見込み 蛇ノ目釉剝ぎ	呉須染付,外面無文,内面花,見込み竹	D7, 瀬戸?
218	陶	器	Ш	底 8.0	削り出し高台	灰釉,高台無釉	鉄絵染付、外面無文、見込み草	E 8, 肥前系
219	陶	器	灯明器	口10.6 底 4.3 高 2.0	底部外面・体部 外面下半ヘラケ ズリ	透明釉, 体部• 底部外面無釉	無文	SE1, 信楽系
220	陶	器	Ш	口10.0 底 4.0 高 2.1	底部外面・体部 外面下半ヘラケ ズリ	無釉	無文	E8, 肥前系
221	陶	器	小 皿	口 6.5 底 3.0 高 1.8		灰釉	無文	E8,瀬戸・美濃
222	陶	器	小 杯	口 7.4 底 3.1 高 5.2	回転糸切り	灰釉,底部外面 無釉	無文	F 6, 肥前系
223	陶	器	椀	口17.2 底 8.4 高 7.8	ロクロ型押し成 形	灰釉?,高台無釉	無文	E 7
224	陶	器	蓋	口 4.8 最大 6.4 高 1.4		灰釉,内面無釉	無文	F 6
225	陶	器	おろし皿	口13.8 底 8.0 高 3.4	削り出し高台	鉄釉,高台無釉	無文	D7,瀬戸・美濃
226	陶	器	おろし皿	口15.0 底 7.8 高 3.1	削り出し高台	灰釉,高台無釉	無文	E 7
227	磁	器	丸 椀	口 9.0 底 5.0 高 6.6	ロクロ型押し成 形	透明釉	呉須染付,外面人・樹木・建物,内面雷 文	D5, 肥前系
228	磁	部	丸 椀	口 9.0 底 3.6 高 5.5		透明釉	呉須染付,外面花・草,内面無文,見込み「福」	F8, 肥前系
229	磁	韶	丸 椀	口10.8 底 4.4 高 5.8	高台畳付砂	透明釉	呉須染付,外面界線・「寿」,内面無文	S E 74, 肥前系
230	磁	器	丸 椀	底 4.6	高台畳付砂	透明釉	呉須染付, 外面一重網目文, 内面無文	F 2, 肥前系
231	磁	品	丸 椀	口 9.6 底 3.8 高 4.9		透明釉	呉須染付,外面界線・二重網目文,内面 一重網目文,見込み菊花	H6,肥前系
232	磁	器	小広東椀	口11.2 底 3.8 高 5.3	. 1	透明釉, 見込み 蛇ノ目釉剝ぎ	呉須染付,外面界線・二重格子目,内面 界線,見込み二重井桁	E7カクラン, 肥前系
233	磁	쁆	小広東椀	口11.0 底 4.4 高 6.0	2	透明釉	呉須染付,外面界線・不明,内面界線・ 宝,見込み界線・宝	E7-ピット30, 肥前系
234	磁	器	丸椀	底 5.4	高台畳付砂	透明釉	吳須染付, 外面界線, 内面無文	F8, 肥前系
235	秘	器	丸椀	底 3.8		透明釉	呉須染付, 外面界線·草花, 内面無文	F 8 , 肥前系
236	酸	器	丸 椀	底 4.2	,	透明釉	呉須染付,外面界線・草花,内面無文	F7, 肥前系, 高台内侧 「太明年制」銘

番号	種	類	器 種	法 量	手 法	施釉	-tr ###	出土地占、その他
237	磁	器	丸椀	底 4.2	丁 広	透明釉	文 様 呉須染付,外面界線・草花,内面無文	出土地点・その他
								D5カクラン, 肥前系, 高台内側「太明年製」銘
238	磁	器	丸 椀	底 4.4		透明釉	呉須染付,外面界線・草花,内面無文	F7, 肥前系, 高台内側 「太明年製」銘
239	磁	器	丸 椀	底 4.0		透明釉	呉須染付,外面界線・半菊花・斜格子・ 鋸子,内面無文	E7, 肥前系
240	磁	器	丸 椀	底 3.8		透明釉	呉須染付,外面界線·菊花·草,内面無文	E7, 肥前系
241	磁	器	丸 椀	底 3.4		透明釉	呉須染付,内・外面二重網目,見込み菊 花	E 5, 肥前系
242	磁	器	小広東椀 ?	底 4.4		透明釉	呉須染付,外面界線・二重網目,見込み 雲	G7, 肥前系
243	磁	器	丸 椀	□11.0		透明釉	呉須染付, 外面草花?, 内面無文	S D18, 肥前系
244	磁	器	丸 椀	□10.4		透明釉	呉須染付, 外面草花?, 内面無文	D5カクラン, 肥前系
245	磁	器	丸 椀	□11.0		透明釉	具須染付, 外面草花, 内面無文	G8, 肥前系
246	磁	器	丸 椀	□11.0		透明釉	呉須染付, 外面草花, 内面無文	D7, 肥前系
247	磁	器	丸椀?	□11.0		透明釉	呉須染付、外面界線・花・水、内面斜格 子・界線	E7, 肥前系
248	磁	器	丸 椀	Π14 O		`%: DF Seh		Bm → ₹
				□14.0	II	透明釉	呉須染付, 外面水, 内面無文	肥前系
249	磁	器	筒 椀	口 8.0 底 6.4 高 6.5	蛇ノ目凹高台	透明釉,底部蛇 ノ目釉剝ぎ	呉須染付,外面岩・菖蒲,内面四方襷, 見込み手書き五弁花	E 5, 肥前系
250	磁	器	筒 椀	口 8.0 底 6.2	蛇ノ目凹高台, 口銹び	透明釉,底部蛇 ノ目釉剝ぎ	呉須染付, 外面葡萄・丸に網目, 内面無 文	E8カクラン、肥前系
251	磁	器	筒 椀	口 6.4 高 4.9 底 3.2		透明釉	呉須染付,外面半菊・斜格子,内面界線	F8, 肥前系
252	磁	器	小 杯	□ 7.0		透明釉、斑あり	呉須染付,外面界線·一重網目,內面界 線	G8, 肥前系
253	磁	器	小 杯	口 7.0 底 3.2 高 5.0	高台畳付砂	透明釉	呉須染付,外面草花,宝,内面無文	肥前系
254	磁	器	小 杯	口 7.2 高 5.4 底 3.8		透明釉	具須染付,外面牡丹・蓮弁・四方襻,内 面瓔珞	E7, 肥前系
255	Tiệc	器	小 杯	□ 7.0		透明釉	呉須染付, 外面草花, 内面無文	E9カクラン, 肥前系
256	磁	器	小 杯	底 3.2		透明釉	呉須染付, 外面草化, 内面無文	D5カクラン, 肥前系
257	磁	器	小 杯	口 7.8 底 4.1 高 2.0		透明釉	呉須染付,外面界線・「寛」,内面無文	E7カクラン, 肥前系?
258	磁	器	広東椀蓋	鈕 5.2		透明釉	呉須染付,外面葡萄・茄子,内面界線・ 不明	D5, 肥前系
259	磁	器	広東椀蓋	口 9.0 高 2.9 鈕 3.1		透明釉	呉須染付,外面界線・半菊?・渦・宝, 内面鋸子・帯線・界線,見込み「寿」	E 6, 肥前系
260	磁	器	広東椀蓋	口 9.0 高 2.9 鈕 3.1		透明釉	呉須染付,外面界線・半菊?・渦・宝, 内面鋸子・帯線・界線,見込み「寿」	E8, 肥前系
261	磁	器	広東椀蓋	鈕 3.6		透明釉	呉須染付, 外面界線・樹木, 内面界線, 見込み「寿」	G8, 肥前系
262	磁	쁆	広東椀蓋	口 9.8 高 3.0 鈕 5.4		透明釉	吳須染付,外面松・帆掛舟,内面界線, 見込み帆掛舟	G8, 肥前系
263	磁	器	広東椀蓋	口 9.8 高 2.9 鈕 5.2		透明釉	呉須染付, 外面松・帆掛舟, 内面界線, 見込み帆掛け舟	A 2, 肥前系
264	酸	器	広東椀蓋	口 9.8 高 3.1 鈕 5.2		透明釉	呉須染付, 外面松・帆掛舟, 内面界線, 見込み帆掛け舟	E 7,肥前系
265	磁	器	広東椀蓋	口 9.4 高 3.3 鈕 3.8		透明釉	呉須染付・素描、外面双喜・菊・宝・方 形枠に「禄」、内面雷文、見込み旗	F 3, 肥前系
266	磁	器	広東椀蓋	口 9.4 高 3.3 鈕 3.8		透明釉	呉須染付・素描、外面双喜・菊・宝・方 形枠に「禄」, 内面雷文, 見込み旗	F 3,肥前系
267	磁	器	広東椀	口11.0 高 6.2 底 5.0		透明釉	呉須染付, 外面松・帆掛舟・界線, 内面 界線	E8, 肥前系

番号	種	類	器 種	法 量	手 法	施釉	文様	出土地点・その他
268	磁	器	広東椀			透明釉	呉須染付,外面草花・界線,内面界線, 見込み不明	E8, 肥前系
269	磁	器	広東椀	口11.4 底 6.0 高 6.2		透明釉	呉須染付,外面草花・界線,内面界線見 込み十字花,高台内側方形枠に「禄」	E8, 肥前系
270	磁	110 110	広東椀	底 5.2		透明釉	具須染付,外面不明・界線,内面界線, 見込み「寿」	D7, 肥前系
271	磁	몺	広東椀	底 5.6		透明釉	呉須染付,外面不明・界線,内面界線, 見込み不明	D8 • E8, 肥前系
272	磁	器	小広東椀	口11.0 底 4.2 高 5.7		透明釉	呉須染付,外面半菊?・渦・宝・界線, 内帯線・鋸子・界線,見込み「寿」	E7 • 8, 肥前形
273	磁	器	Ш	口12.6 底 4.4 高 3.1	高台畳付砂	透明釉	具須染付,外面無文,内面界線·不明	G8, 肥前系
274	磁	器	Ш	口12.4 底 6.6 高 2.8	高台畳付砂	透明釉	無文	E8, 肥前系
275	磁	몺		底 7.8		透明釉	呉須染付, 外面界線, 内面墨弾き不明	肥前系
276	磁	器	Ш	口13.6 底 4.6 高 3.4		透明釉, 見込み 蛇ノ目釉剝ぎ	呉須染付,外面無文,内面唐草,見込み コンニャク印判五弁花	D8・9, 肥前系
277	磁	器	Ш	口13.6 底 8.0 高 3.0		透明釉, 見込み 蛇ノ目釉剝ぎ	吳須染付,外面無文,內面唐草	E4, 肥前系
278	磁	器	Ш	口11.8 底 4.0 高 3.4	削り出し高台	透明釉, 見込み 蛇ノ日釉剝ぎ, 高台無釉	吳須染付,外面無文,内面唐草	肥前系
279	磁		Ш	□11.8		透明釉・見込み 蛇ノ目釉剝ぎ	呉須染付, 外面無文, 内面鳳凰	F7, 肥前系
280	磁	器	Ш	底 7.8		透明釉, 体部下 半無釉	呉須染付,外面波•鋸子,内面無文,見 込み波	G7, 肥前系
281	磁	器		□16.0		透明釉	呉須染付, 外面唐草, 内面不明	F3, 肥前系, 漆継ぎ
282	磁	뀲	.III.	口21.0 高 4.4 底12.2		透明釉・口銹	呉須染付,外面唐草・界線,内面蛸唐草・ 界線,見込みコンニャク印判五弁花	D6, 肥前系, 高台内俱 「成化年製」
283	磁	器	Ш			透明釉・ハリ支 え	呉須染付・コンニャク印判, 外面渦福, 内面菊	E8, 肥前系
284	磁	쁎	小 皿	口 7.4 底 2.6 高 2.9		透明釉	吳須染付,外面三重井桁,内面無文	D5, 肥前系
285	磁	部	小皿	口 6.2 底 3.4 高 2.1		透明釉・口銹	呉須染付,外面無文,内面東屋・山水	D8, 肥前系
286	磁	뀲	Ш	口 8.8 底 5.0 高 2.1		透明釉・底部外 面無釉	無文	F8, 肥前系
287	磁	器	蓋	口 9.2 高 2.2		透明釉・口縁端 部無釉	具須染付,外面草花? · 界線,内面無文	S D139, 肥前系
288	磁	器	蓋	口 6.8 高 2.9		透明釉・口縁部 内面無釉	呉須染付, 外面界線, 内面無文	D7, 肥前系
289	磁	器	蓋	口 4.6 高 2.7		透明釉,口縁部内面無釉	具須染付,外面渦・草?・界線,内面無 文	肥前系
290	磁	몺	香 炉	□10.		透明釉	具須染付,外面七宝•界線,内面四方 襻• 界線	D2, 肥前系
291	磁	器	香 炉	□ 8.4		透明釉, 休部内 面無釉	呉須染付, 外面コウモリ・界線, 内面無 文	E7, 肥前系
292	陶	器	香 炉	□ 9.8		鉄釉, 体部内面 無釉	外面沈線	
293	磁	盟	仏飯器	口 7.2 底 4.2 高 5.8		透明釉・底部外 面無釉	呉須染付,外面半菊・界線,内面無文	D8カクラン, 肥前系
294	磁	뫎	仏飯器	底 5.0		透明釉・底部外 面無釉	無文	D8, 肥前系
295	磁	器	徳利	底 9.0		透明釉内面無釉	無文	E7, 肥前系
296 297	磁磁	器器	徳利	口 3.4 口 3.8 底 4.0 高10.2		透明釉	無文 呉須染付,外面遠山・帆掛け舟・界線, 内面無文	肥前系

番号	種	類	器 種	法量	手 法	the St.	100	
298	磁	器	徳利	底 4.6	手 法	施 釉 透明釉	文 様 焼付け、外面網目・界線、内面無文	出土地点・その他
299	碳	器	瓶	□10.8		淡緑色釉,体部 内面無釉	体部外面陽刻の鎬	確認5T, 肥前系 E8, 肥前系
300	陶	器	徳 利	□ 4.8		鉄釉,体部内面 無釉	白泥,刷毛目	H 6, 肥前系
301	陶	쁆	徳 利	底 7.0		透明釉, 体部内 面無釉	白泥,刷毛目	F7, 肥前系
302	陶	器	徳 利	□ 6.0		鉄釉	無文	S K126, 肥前系
303	陶	器	徳 利			透明釉,内面無釉	鉄絵, 不明	E8,瀬戸?
304	陶	器	壷	□ 7.2		鉄釉, 内面無釉	無文	確認5T, 肥前系?
305	陶	器	壷	□13.2		鉄釉	胴部に沈線2条	肥前系?
306	陶	뀲	壷	口12.2 底 9.6 高17.0	底部外面不調整	外面アメ色釉, 内面鉄釉	無文	D7, 在地産?
307	陶	器	壷	底 7.7	回転糸切り	無釉	無文	F7, 肥前系
308	陶	器	甕	□19.8		透明釉	白泥・刷毛目	D6 • E7, 備前系
309	陶	器	甕	□36.2		透明釉	肩部波条沈線	E8, 肥前系
310	陶	器	兠		格子当て具	無釉		肥前系
311	陶	器	甕	□82.0	非ロクロ成形	無釉	無文	D 6,越前
312	陶	器	鉢	□25.0		透明釉,体部外 面下半無釉	白泥・刷毛目	E7カクラン、肥前系
313	陶	器	鉢	底15.4	削り出し高台	灰釉, 見込み・ 高台無釉	白泥・刷毛目	SK110, 肥前系
314	陶	器	鉢	底12.0	削り出し高台	外面鉄釉,内面 灰釉,高台無釉	外面無文,内面釘彫り幾何学文	F8, 肥前系
315	陶	器	鉢	□23.4		灰釉	外沈線による唐草文	E 7
316	陶	마마	鉢	□16.0		無釉	無文	E7カクラン、肥前系
317	陶	器	鉢	底 5.8	削り出し高台	体部外面鉄釉, 内面高台無釉	無文	G 7
318	陶	器	鉢	底11.0	削り出し高台	灰釉,高台無釉	無文	E 5
319	陶	器	摺 鉢	口23.4 底10.0 高10.4		鉄釉	無文	S E 80, 見込み放射状卸 目
320	陶	器	摺 鉢	口35.4 底14.0 高16.1	削り出し高台	鉄釉	無文	肥前系, 見込み放射状卸 目
321	陶	品	摺 鉢	口33.2 底16.0 高15.7	削り出し高台	鉄釉	無文	見込み放射状卸目
322	陶	100 100 100 100 100 100 100 100 100 100	摺 鉢	口33.8 底16.0 高16.5	削り出し高台	鉄釉	無文	見込み放射状卸目
323	陶	묾	摺 鉢	口33.9 底15.2 高12.8	削り出し高台	鉄釉	無文	見込み放射状卸目
324	陶	器	摺 鉢	□23.2		口縁部鉄釉	無文	S K136, 肥前系
325	陶	먎	摺 鉢	□28.6		口縁部鉄釉	無文	S D43, 肥前系
326	陶	器	摺 鉢	□35.2		鉄釉	無文	E8, 肥前系
327	陶	뀲	摺 鉢	□34.0		鉄釉	無文	S E 93, 肥前系?
328	陶	뫘	摺 鉢	□36.2		鉄釉	無文	F5, 肥前系?
329	陶	먎	摺 鉢	□27.2				S E 34, 肥前系?
330	陶	器	摺 鉢	口19.7 底 7.6 高 9.0	削り出し高台	鉄釉,体部内面• 高台無釉	無文	確認5T, 見込み放射状 卸目
331	陶	器	摺 鉢	□38.8				
332	陶	器	摺 鉢	□36.6				E 9
333	陶	器	摺 鉢	底10.0	回転糸切り	無釉		S K132, 肥前系, 見込み放射状卸目
334	陶	器	摺 鉢	底10.0	回転糸切り	無釉	無文	E5, 肥前系, 見込み放射状卸日
335	陶	器	摺 鉢	底11.4	削り出し高台	鉄釉,高台畳付 無釉	無文	見込み放射状卸目
336	陶	器	行平鍋蓋	口13.6 鈕 1.8 高 4.0		鉄釉	縦方向の沈線	
337	陶	器	行平鍋蓋	口12.0 鈕 6.0 高 4.5		白色釉	無文	D8カクラン

番号	種 類	器 種	法 量	手 法	施 釉	文様	出土地点・その他
338	陶 器	行平鍋	□12.0		鉄釉,口縁部底 部無釉	体部列点	E8カクラン
339	陶器	行平鍋	□18.0		白色釉	無文	D8カクラン
340	土師器	火入れ	□15.2			無文	D 5
341	土 師 器	火入れ?	底10.2	底部ヘラケズリ		無文	D 5
342	土師器	鉢	□13.0			無文	D8カクラン
343	瓦 器	火入れ	□17.6			列点	E8カクラン
344	土師器	火 鉢	□24.6	-		押印 体部外面花・斜格子	E 7
345	土師器	火 鉢	□24.6			押印 体部外面花・斜格子	E 7
346	土師器	火 鉢	底17.8			無文	E 7
347	土師器	火 鉢	底18.6			無文	E 7
348	土師器	植木鉢	□39.6			無文	D 5
349	土師器	焙 烙	□33.8	非ロクロ成形, 底外ヘラケズリ		無文	
350	土師器	火消し 壷 蓋	口26.2 高 1.4			無文	D8カクラン
351	土 師 器	火消し壷	口26.0 底26.0 高22.0			無文	D8カクラン

別表2 土・陶磁製品・石製品観察表

土・陶磁製品 (図版32 1~19) 石製品 (図版32 20~28)

番号		F 1	重	現存長	現存幅	現存厚	重量(g)	素材	備考
1	磁器	₽片F	円盤	5.1	4.8	1.1	44.0	肥前系磁器 椀	呉須染付 S E 198
2	磁器	₽片F	円盤	4.5	2.2	0.7	14.3	肥前系磁器 椀	呉須染付 S K208
3	磁器	B片F	円盤	5.4	5.1	1.1	46.6	肥前系磁器 椀	見込み蛇ノ 目釉剝ぎ S K20
4	磁器	B片F	円盤	4.8	4.4	0.6	22.7	肥前系磁器 椀	呉須染付 「太明年製」 銘,SK20
5	磁器	B片F	円盤	6.0	3.1	1.3	31.5	肥前系磁器 椀	呉須染付 S E 198
6	磁器	B片F	円盤	5.0	4.8	1.0	37.4	肥前系磁器 椀	呉須染付 E 5 -11
7	陶器	B片F	円盤	6.5	6.0	1.3	91.0	肥前系陶器	E 8 -13
8	陶器	B片F	円盤	5.2	4.9	1.0	31.9	肥前系陶器 椀	見込み蛇の 目釉剝ぎ 銅緑釉 S K118
9	陶器	B片F	円盤	5.5	5.3	0.6	27.2	肥前系陶器	刷毛目白泥 透明釉 E8-16
10	研	磨	具	9.3	6.2	1.4	96.5	珠洲甕or壷	
11	研	磨	具	10.2	8.9	1.2	122.2	瓷器系陶器 す	笹神産り鉢 S K455
12	泥	人	形	8.2	6.7	4.2	_	土師器	S K112
13	泥	人	形	5.5	6.6	0.8	_	土師器	S K112
14	泥	人	形	5.2	5.4	5.3	_	土師器	

番号	묾	種	最大径	頂部径	高さ	重量(g)	素	材	備	考
15	練炭貂	差器 容	10.4	_	3.5	_	土師器			
16	練炭貂	蓋器	11.0	5.0	2.6	_	土師器			
17	練炭智	蓋器容	7.6	3.8	2.5	_	土師器			
18	練炭貂	蓋器 容	4.6	5.2	2.1	_	土師器			
19	土	錘	4.2	2.5	6.3	_	土師器			

番号	7		腫	現存長	現存幅	現存厚	重量(g)	素	材	備	考
20		硯		7.0	6.5	2.3	153.0	凝灰岩			
21		硯		5.8	4.6	0.9	56.5	凝灰岩			
22		硯		5.1	2.6	1.1	10.6	凝灰岩			
23		硯		13.2	6.7	2.3	302.8	凝灰岩			
24	石		臼	26.0	14.8	9.2	2563.5	花崗岩		SB3	ーピッ
				(径29.0)						h	
25	研	磨	具	8.6	7.2	3.0	112.7	軽石			
26	研	磨	具	8.0	5.0	1.9	31.8	軽石			
27	研	磨	具	10.7	5.5	4.9	161.3	軽石			
28	研	磨	具	5.0	3.9	1.8	25.0	軽石			

S D 166 (図版33 29~33)

29	研	磨	具	8.7	7.5	4.4	127.3	軽石	
30	пП	き	石	14.5	6.5	4.0	526.5		
31	砥		石	14.5	14.5	7.2	2398.5	凝灰岩	
32	砥		石	16.1	9.2	4.7	600.2	凝灰岩	被熱
33	砥		石	7.8	7.0	4.8	178.3	凝灰岩	被熱

SK20 (図版33 34・35)

34	砥	石	11.6	6.9	5.4	767.5		
35	研	石	9.7	4.5	1.7	88.3	凝灰岩	

S E 198 (図版33 36~41)

36	砥	石	6.0	4.7	2.6	120.5	凝灰岩	
37	砥	石	7.1	4.3	2.2	74.3	凝灰岩	
38	砥	石	4.8	3.5	4.2	64.2	凝灰岩	
39	砥	石	8.2	6.5	2.7	204.3	砂岩	
40	砥	石	5.5	4.5	1.5	65.6	砂岩	
41	砥	石	9.0	8.5	3.5	281.5	砂岩	

SD15 (図版34 42~44)

42	砥	石	8.2	6.1	4.0	323.6	凝灰岩	
43	砥	石	7.2	5.1	3.6	219.3		
44	祝先	石	6.5	3.0	2.3	54.5	凝灰岩	

SK112 (図版35 45・46)

	45	砥	石	5.7	3.2	3.1	98.0	凝灰岩	
1	46	砥	石	5.1	2.8	2.3	52.0	凝灰岩	

包含層その他の遺構 (図版35 47~58)

番号	器	種	現存長	現存幅	現存厚	重量(g)	石 材	備考
47	砥	石	8.5	4.0	2.2	122.0	凝灰岩	SD130出土
48	砥	石	7.8	2.6	1.0	28.0	凝灰岩	SD52出土
49	砥	石	8.2	5.2	1.0	37.0	凝灰岩	SE190出土
50	砥	石	9.5	5.5	1.0	76.0	凝灰岩	F8-4出土
51	砥	石	8.2	3.9	4.0	372.0	*	SK69出土, 被熱
52	砥	石	10.0	6.7	3.8	418.0	凝灰岩	SK8出土
53	砥	石	6.0	6.0	1.7	87.0		E 7 -20,
								ピット30

番号	80 60	種	現存長	現存幅	現存厚	重量(g)	石 材	備考
54	砥	石	6.0	5.5	3.0	161.0	凝灰岩	D6-25,ピッ ト30出土
55	砥	石	7.7	5.5	6.0	275.0		SK203出土, 被熱
56	砥	石	11.0	6.0	7.0	556.0	凝灰岩	SK42出土
57	砥	石	8.8	4.2	3.3	142.0	凝灰岩	SK226出土
58	пП	き石	5.4	5.2	2.9	147.0	花崗岩	SK75出土, 被熱

木製品観察表

S D 116 (図版35 1~13)

番号		器	種		現存長	現存幅	現存厚	木取り	備考
1	舟			形	16.5	7.1	1.0	木裏	略完形
							(高さ4.4)		
2	円	形	底	板	14.6	9.8	1.4	柾目	右端欠損, 5 個の孔あり
3	角	木	オ	?	26.3	3.6	1.8	柾目	下端欠損
4	板			材	23.5	10.1	1.5	柾目	下端欠損
5	板			材	34.8	11.8	1.1	柾目	上下端欠損, 6と同一個体
6	板			材	14.3	4.5	1.4	柾目	上下・左端欠損、5と同一個体
7	板			材	28.0	3.6	1.0	柾目	右端欠損
8	折	敷	底	板	29.3	5.0	0.3	柾目	左右端欠損, 8と同一個体
9	折	敷	底	板	29.3	3.1	0.3	柾目	右端欠損, 9と同一個体か
10	板			材	17.1	3.3	0.4	柾目	上下端欠損, 折敷部材の再加工?
11	板			材	28.0	3.6	0.4	柾目	上下・右端欠損
12	板			材	16.5	2.4	0.4	柾目	下・左端欠損, 折敷部材の再加工?
13	円	形	板	材	16.0	4.5	0.5	柾目	
					(径27.0)				

S E 25 (図版36 14~16)

14	板			材	15.2	3.3	0.5	柾目	上下•左端欠損
15	角	材	組	子	16.2	2.1	1.5	柾目	略完形,一枚組手
16	板			材	14.5	1.7	0.3	柾目	上下・左端欠損

SE47 (図版36 17~20)

17	円形組物側板	28.2	6.4	0.5	柾目	下端欠損
18	角材	21.3	1.9	1.2	柾目	下端欠損
19	板材	9.4	2.6	0.9	板目	裏面に円弧状の段差あり、20と同一機材の部材か、下端欠損
20	角材	12.3	1.0	0.9	板目	裏面に円弧状の段差あり、19と同一機材の部材か、下端欠損

SK69 (図版36 21~26)

21	円	形	板	21.7 (径23.0)	8.0	0.7	柾目	表裏黒漆塗り、左端を欠損
22	円	形	板	19.5	19.5	1.2	板目?	径約23cmの円形板を再加工、円形容器の蓋?
23	角		材	32.9	3.6	3.0	板目	円形組物の柄、略完形
24	板		材	8.0	13.4	1.4	板目	上端欠損
25	下	駄	(歯)	4.8	9.0	0.8	板目	略完形
26	木		屑	12.1	7.2	1.1		

SE80 (図版37 27~34)

27	 		駄	台21.5	7.2	3.4	板目・木	黒漆塗り、左端を欠損
				歯 4.6	6.7	1.0	裏	
28	下		駄	台15.9	7.7	3.0	板目・木	黒漆塗り、右・下端を欠損
				歯 3.4	5.0	2.4	裏	
29	円形	纟組 物	別側 板	48.2	9.2	1.0	板目	上部に柄を通すための円形の孔あり、下端一部欠損
30	円形	纟組 物	別側 板	26.2	8.0	1.2	板目	上部に柄を通すための方形の孔あり、下端欠損
31	板		材	33.8	5.8	0.3	柾目	右端欠損
32	不		明	52.2	3.8	3.8		上下端欠損
33	下	駄	(歯)	8.8	10.0	1.3	柾目	黒漆塗り、左右端欠損
34	円	形	板	8.0	3.0	0.6	柾目	右端欠損
				(径9.0)				

S E 198 (図版38・3935~47)

番号		H		現存長	現存幅	現存厚	木取り	備考
	-					7 4 7 7 7 7	7,7,7,7	,
35	円	形	板	21.2	21.0	1.2	板目	36に対応する蓋か?, 略完形
				(径21.2)				
36	円	形	板	21.2	21.2	1.2	板目・木	略完形
				(径21.2)			表	
37	円	形	板	17.7	7.0	1.4	柾目	右端欠損・劣化著しい
				(径18.0)				
38	円形	組物	側板	14.3	3.5	0.5	柾目	39・40・42と同一個体か?, 略完形
39	円形	組物	側板	14.4	4.0	0.5	柾目	38・40・41と同一個体か?, 略完形
40	円形	組物	側板	14.2	3.5	0.5	柾目	38・39・42と同一個体か?, 略完形
41	円形	組物	側 板	34.0	15.1	1.0	柾目	上端を欠損
42	円形	組物	側板	14.4	7.0	0.6	柾目	38~40と同一個体か?, 略完形
43	角		材	12.8	2.5	1.3	板目	下部側縁に孔あり、上端欠損
44	角		材	13.0	2.5	1.3	板目	上下端欠損
45	角		材	11.7	3.2	2.7	板目	下端一部欠損
46	漆	器	椀				横木取り	内面朱漆、外面黒漆に草花の文様
47	漆	뭂	Ш	□10.6	底 5.2	高 2.7	横木取り	内外面朱漆,略完形

その他の遺構(図版39・40 48~57)

48	楕	円	形	底	板	19.7	11.2	1.2	柾目	両端径約5.5cmの円弧,略完形
49	円		形		板	22.0 (径22.0)	7.0	1.0	柾目	下端に結合のための小孔あり、上端を一部欠損、SD41
						(11.0)				
50	下				駄					S D15
51	円		形		板	18.5	11.9	0.7	柾目	下端一部欠損, S K144
52	板				材	37.1	5.6	1.1	板目	下端欠損
53	板				材	20.4	7.1	1.5	板目	略完形, S E 176
54	板				材	43.5	8.4	1.8	板目	上端欠損
55			杭			39.3	6.5	5.8	丸太材	上部に快りあり,上端欠損,出土地点不明
56	柱				根	41.5	13.5	12.5		SB1-ピット4
57	柱				根	54.7	26.2	21.8		SB1-ピット5

S E 90井戸側材 (図版41 58~65)

58	桶	側	板	90.7	14.4	2.7	板目	上段,上端欠損
59	桶	側	板	92.8	11.5	2.7	板目	上段、上端欠損
60	桶	側	板	92.0	16.0	2.1	板目	上段,上端欠損
61	桶	側	板	91.7	12.0	2.7	板目	上段,上端欠損
62	桶	側	板	91.7	13.9	2.1	板目	下段,略完形
63	桶	側	板	91.2	13.6	1.8	板目	下段,略完形
64	桶	側	板	93.3	10.9	2.1	板目	下段,略完形
65	桶	側	板	92.0	10.7	2.7	板目	下段,略完形

S E 45井戸側側板(図版42~44 66~79)

66	桶	側	板	90.1	13.9	2.4	板目	上段、上端欠損
67	桶	側	板	90.9	16.8	2.4	板目	上段,上端欠損
68	桶	側	板	89.3	19.7	2.1	板目	上段,上端欠損
69	桶	側	板	91.5	14.4	2.3	板目	中段,略完形
70	桶	側	板	91.7	16.2	2.9	板目	中段,略完形
71	桶	側	板	89.0	19.7	2.7	板目	中段,略完形
72	桶	側	板	93.6	13.2	2.5	板目	下段,略完形
73	桶	側	板	94.4	12.8	2.6	板目	下段,略完形
74	桶	側	板	91.2	15.8	2.4	板目	下段, 略完形
75	桶	側	板	91.4	10.2	2.5	板目	下段,略完形
76	井戸	ヺ 側	側板	242.4	98.2	3.6	板目	上端欠損
77	井戸	ヺ 側	側 板	240.5	98.0	1.4	板目	上端欠損
78	井戸	ヺ 側	側板	258.2	33.6	1.8	正目	略完形
79	井戸	□ 側	側 板	256.8	49.2	1.4	正目	略完形

引用•参考文献

ア世和 健 1993 「みちのくを目指して 日本海ルートにおける東日本の古墳出現期にいたる政治 過程の予察」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会 実行委員会

イ石川智紀他 1994 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第58集 沖ノ羽遺跡 I (A地区)』新潟県教育 委員会

飯村 均他 1993 「第3編 鍛冶久保遺跡」『福島県文化財調査報告書第294集 東北自動車道遺跡発掘調査報告23 谷津作館 鍛冶久保遺跡』(財福島県文化センター・福島県教育委員会

井汲隆夫他 1992 『内藤町遺跡』新宿区内藤町遺跡調査会

井野 進 1994 第二編-第三章「第一節 水利と新田開発」『新津市史』通史編上巻 新津市

ウ上田秀夫 1982 「14~16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 貿易陶磁研究会

字野隆夫 1982 「井戸考」『史林』第65巻5号 史学研究会

エ江戸遺跡研究会 1990 『江戸の陶磁器』

江戸遺跡研究会編 1991 『江戸の食文化』吉川弘文館

オ大橋康二 1989 『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニューサイエンス社

大橋康二 1994 『古伊万里の文様』理工学社

大八木謙司他 1991 『四谷三丁目遺跡』新宿区四谷三丁目遺跡調査会

小村 弌 『幕藩体制成立史の研究』吉川弘文館

小村 弌他編 1989 『角川日本地名大辞典 15 新潟県』角川書店

カ河西健二 1993 「越中における様相」『中世北陸の家・屋敷・暮らしぶり』北陸中世土器研究会

河西健二 1994 「中世末から近世の建物」『富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第5集 梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告(遺構編)』富山県文化振財団埋蔵文化財調査事 務所

川上貞雄 1989 「第2編 考古」『新津市史』資料編第1巻 原始・古代・中世 新津市

川上貞雄 1993 『川口甲遺跡発掘調査報告書』新津市教育委員会

川村浩司 1993 「北陸北東部の古墳出現前後の様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』 日本考古学協会新潟大会実行委員会

キ九州陶磁文化館 1984 『国内出土の肥前陶磁』

コ小池義人他 1994 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第59集 細池・寺道上遺跡』新潟県教育委員会 小泉 弘 1983 『江戸を掘る』柏書房

小泉 弘 1996 「江戸の町屋」『考古学による日本歴史15 家族と住まい』雄山閣

小林 克 1995 「近世照明具研究へのアプローチ」『季刊考古学53-特集江戸時代の発掘と文化』 雄山閣

サ坂井秀弥 1988 「新潟県における中世考古学の現状と課題」『新潟考古学談話会会報』1号 新 潟考古学談話会

坂井秀弥他 1986 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第44集 坪ノ内館跡』新潟県教育委員会

坂井秀弥他 1987 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第48集 番場遺跡』新潟県教育委員会

シ品田高志 1991 「越後の中世土師器-編年的研究の現状と課題」『新潟考古学談話会会報』 8 号 新潟考古学談話会

ス鈴木郁夫 1975 「地形分類図」『下越開発地域土地分類基本調査』新潟県農地建設課

ツ鶴巻康志 1991 「瓷器系笹神窯製品について」『新潟考古学談話会会報』 7号 新潟考古学談話 会

鶴巻康志 1992 「越後の様相」『中世前期の土器・陶磁器・漆器』北陸中世土器研究会

卜東京大学遺跡調査室 1990 『法学部 4 号館・文学部 3 号館建設地遺跡』

戸根与八郎他 19 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第41集 高田城下鍋屋町遺跡』新潟県教育委 員会

富山大学考古学研究室 1993 『珠洲大畑窯跡』

ナ長佐古真也 1993 「『受け付き灯明皿』に見る生産と流通」『東京都埋蔵文化財センター研究論集 XI』(株)東京都埋蔵文化財センター

長佐古真也 1995 「農村-多摩ニュータウン遺跡」『季刊考古学53-特集江戸時代の発掘と文化』 雄山閣

中条町教育委員会 1993 『中条町埋蔵文化財調査報告第2集 江上館跡 I』

奈良国立文化財研究所 1985 『木器集成図録 近畿古代編』

フ藤本 強 1990 『埋もれた江戸 東大の地下の大名屋敷』平凡社

マ前山精明他 1985 『城願寺跡・坊ケ入墳墓-東北電力巻原子力発電所建設計画用地内埋蔵文化財 発掘調査報告書』巻町教育委員会

增山 仁他 1995 『本町一丁目遺跡』金沢市・金沢市教育委員会

水沢幸一 1993 「越後における中世村落の様相」『中世北陸の家・屋敷・暮らしぶり』北陸中世 土器研究会

ヤ矢田俊文 1991 「中世越後における集落の移動に関する一考察」『新潟史学』第26号 新潟史学 会

ヨ吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館

四柳嘉章 1991 「古代〜近世漆器の変遷と塗飾技術」『石川考古学研究会会誌』石川考古学研究 会

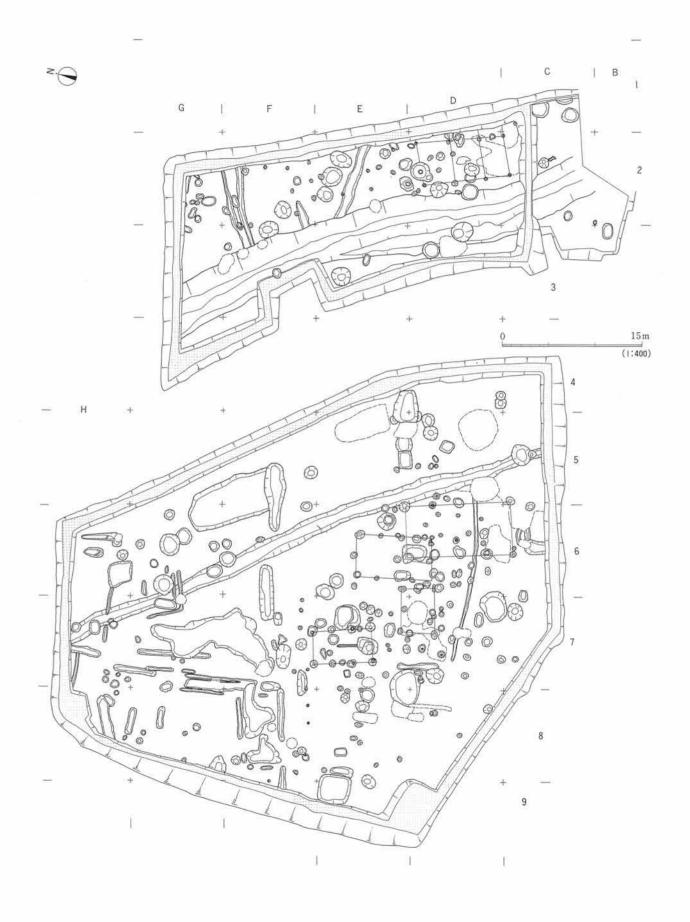
ワ渡邊朋和 1991 『長沼遺跡発掘調査報告書』新津市教育委員会

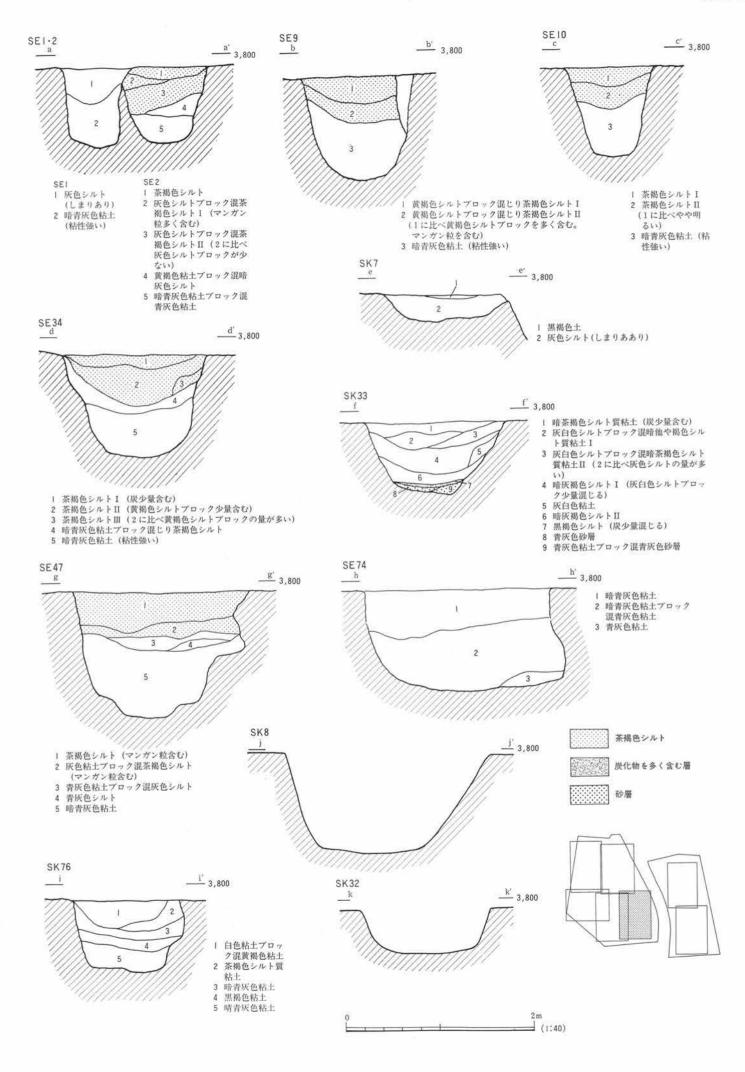
渡邊朋和 1992 『上浦遺跡発掘調査報告書』新津市教育委員会

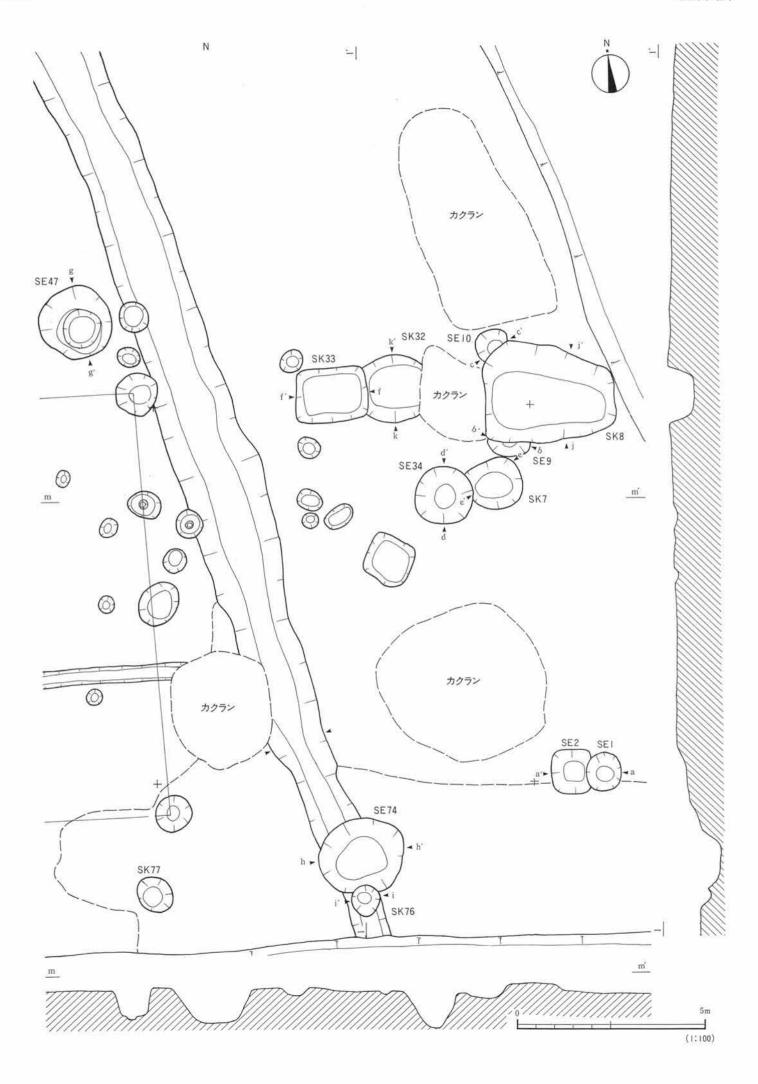
渡邊ますみ 1991 『荒木前遺跡』亀田町教育委員会

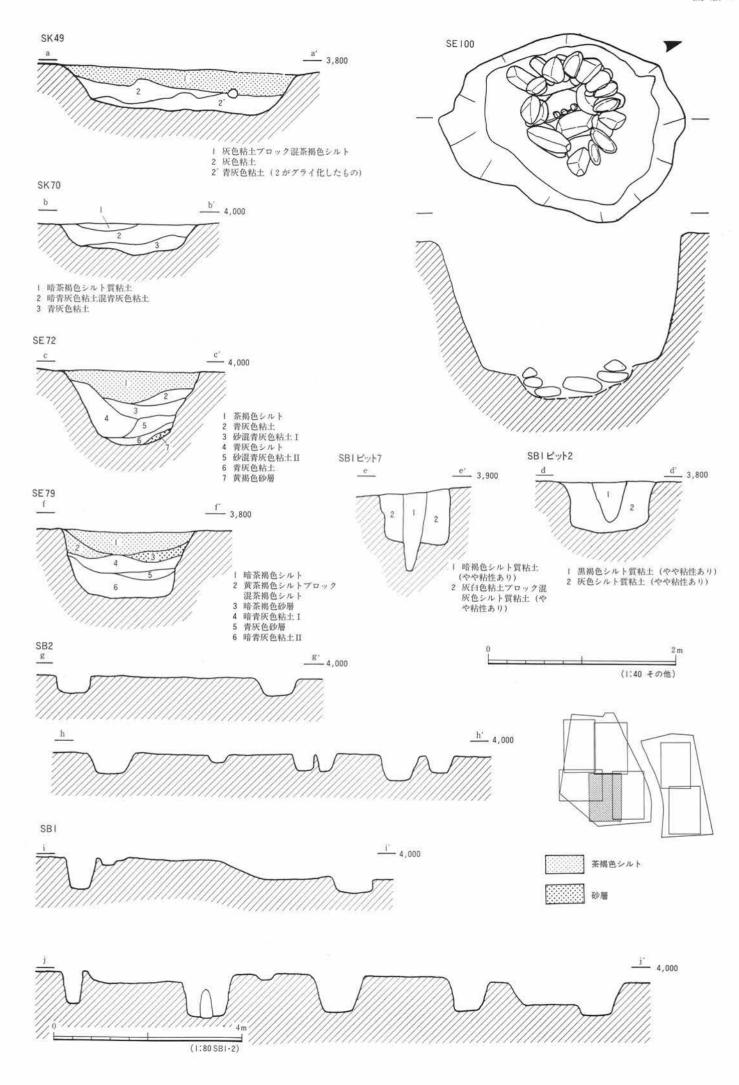
凡 例

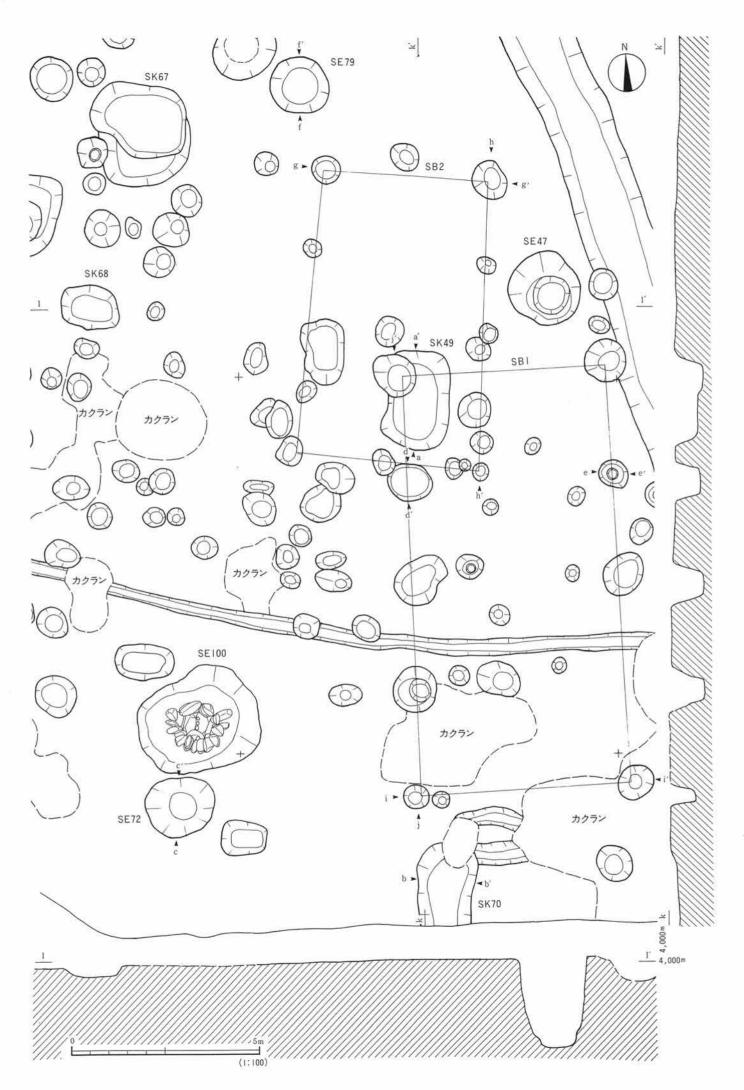
- 1 ここにはおもな遺構・遺物の実測図と写真をおさめる。
- 2 遺構は掘立柱建物 (SB) を除き、種別 毎に一連番号を付し、土坑 (SK)、井戸 (SE)、溝 (SD) などで分類した。
- 3 遺物は、種類毎(土器・陶磁器、土・陶 磁製品・石製品、木製品)に一連番号を付 し、写真もこれにしたがった。
- 4 遺物実測図において、口径復元が困難な ものは、中心線と外形線を離すか、断面と 外形線のみ表示した。
- 5 実測図・写真の縮尺は各図版に示した。

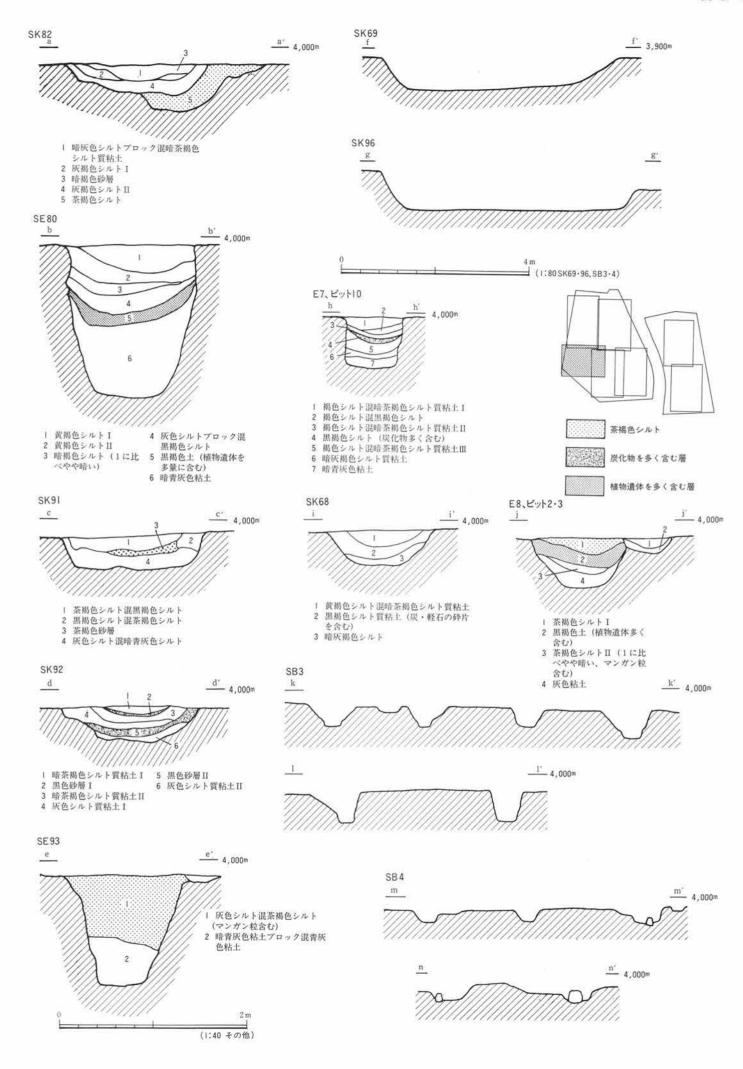


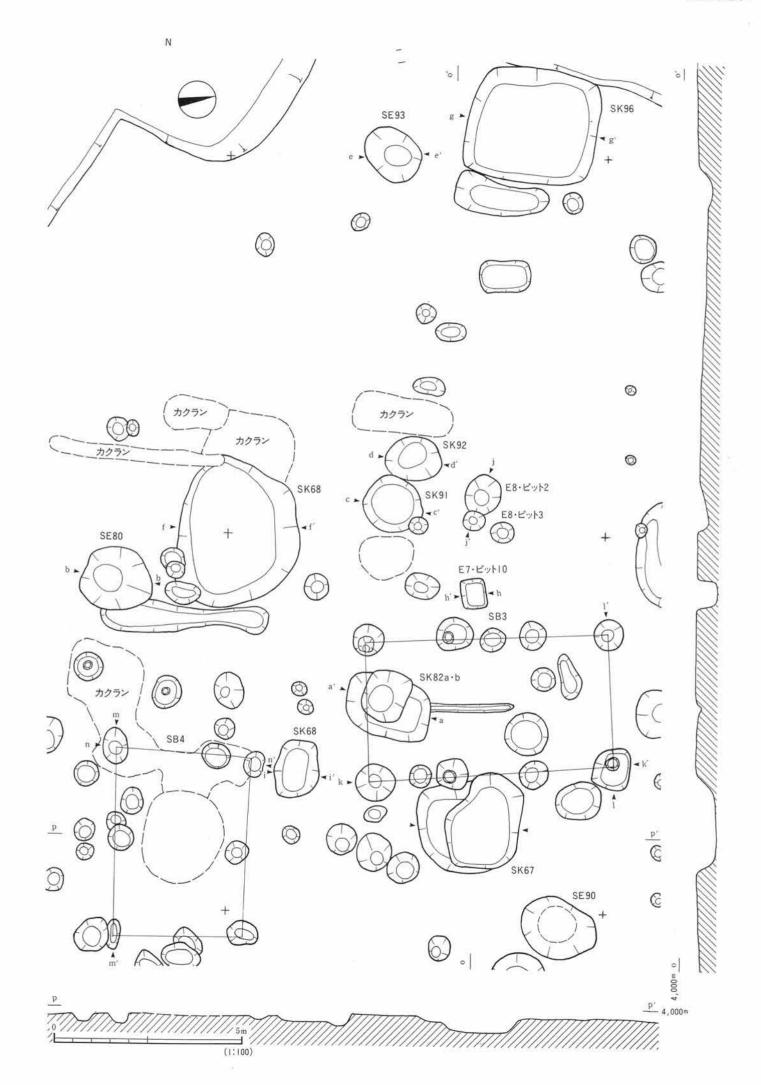


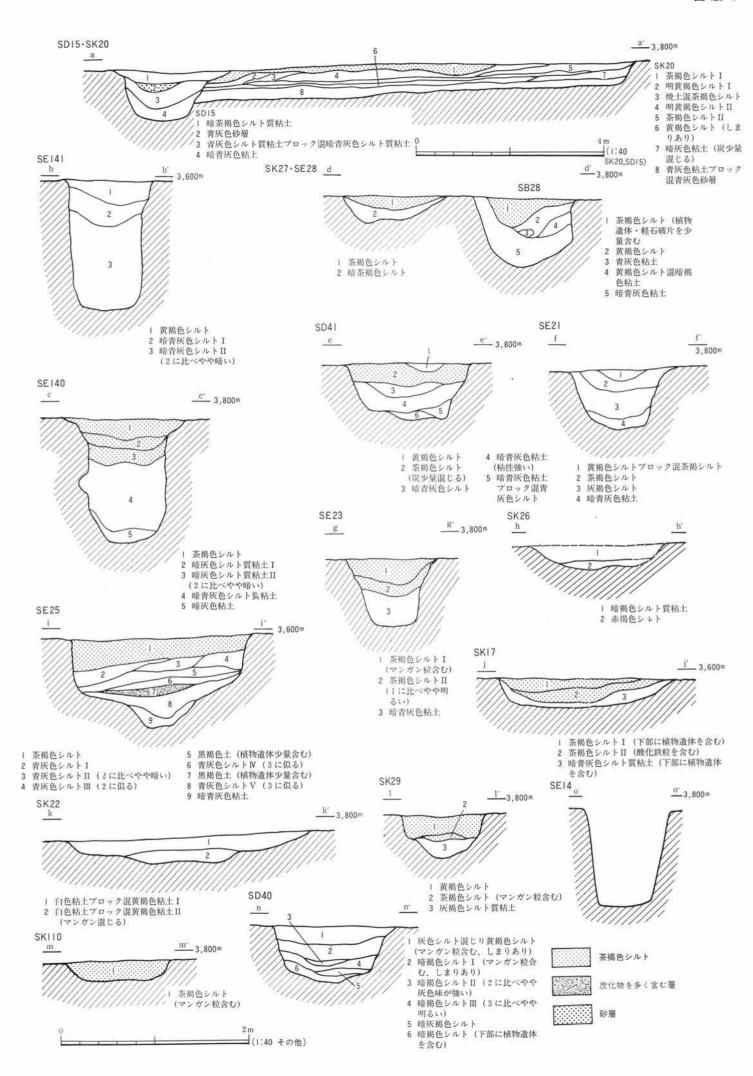


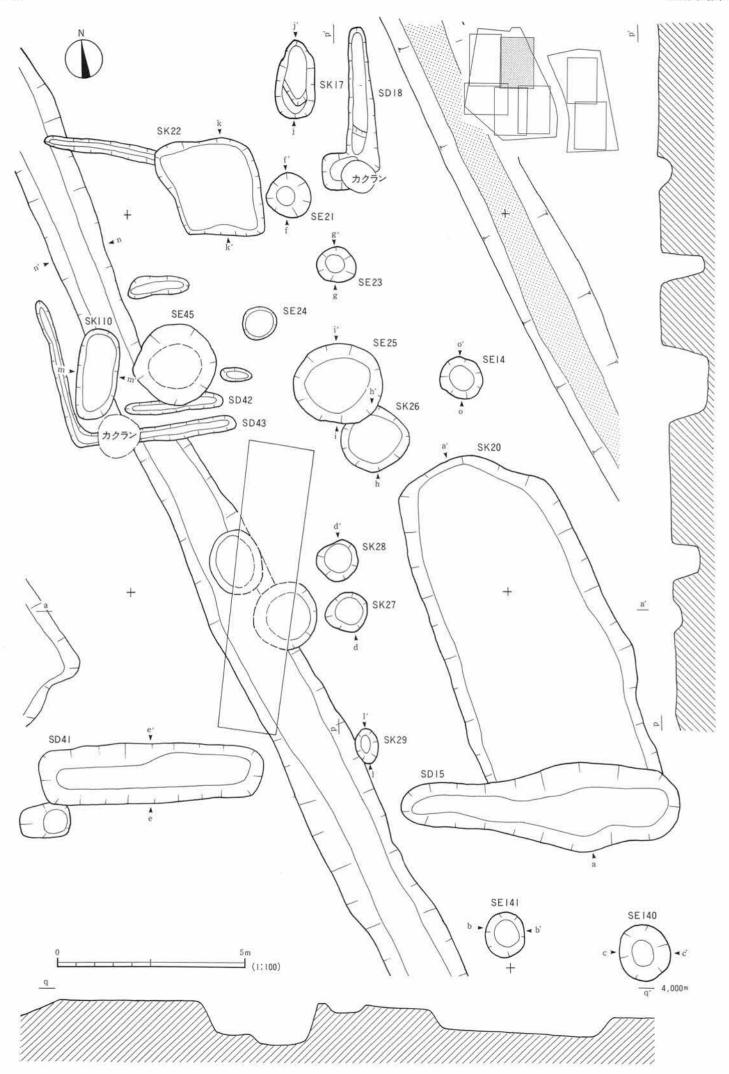


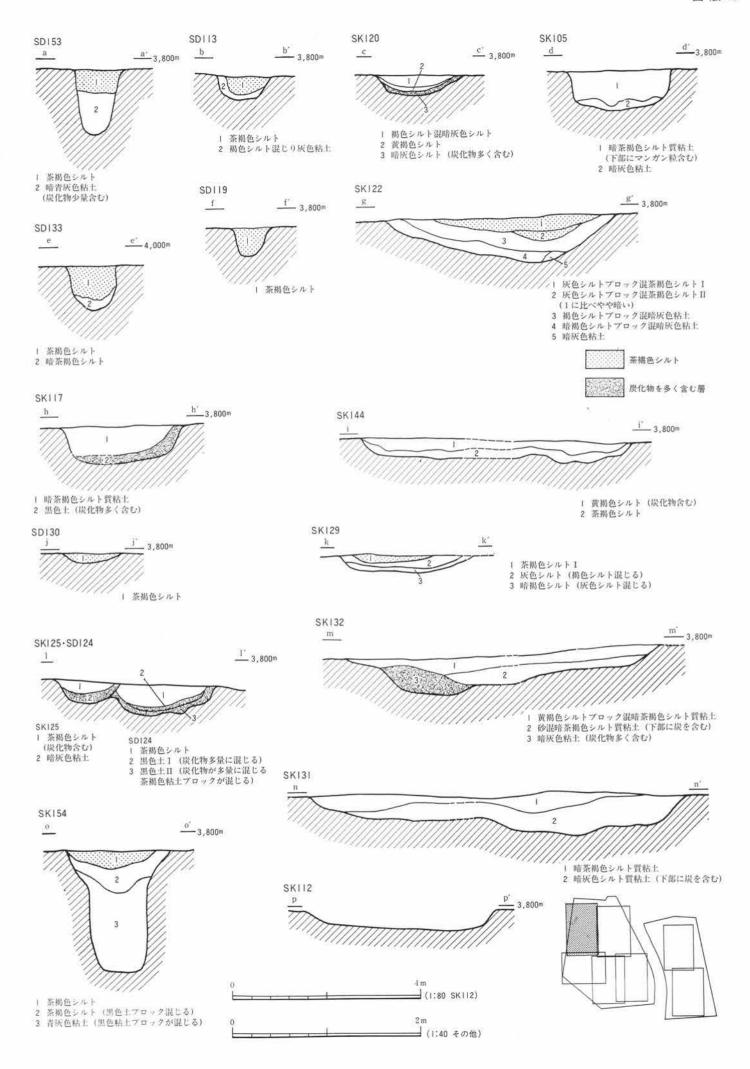


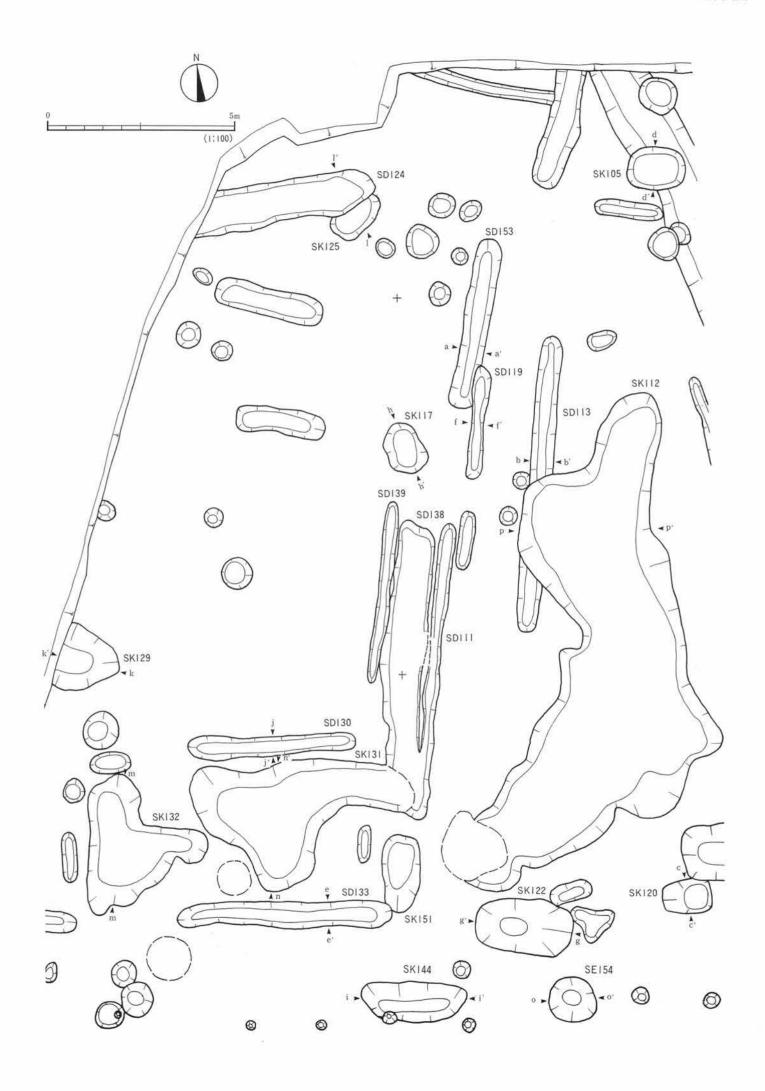


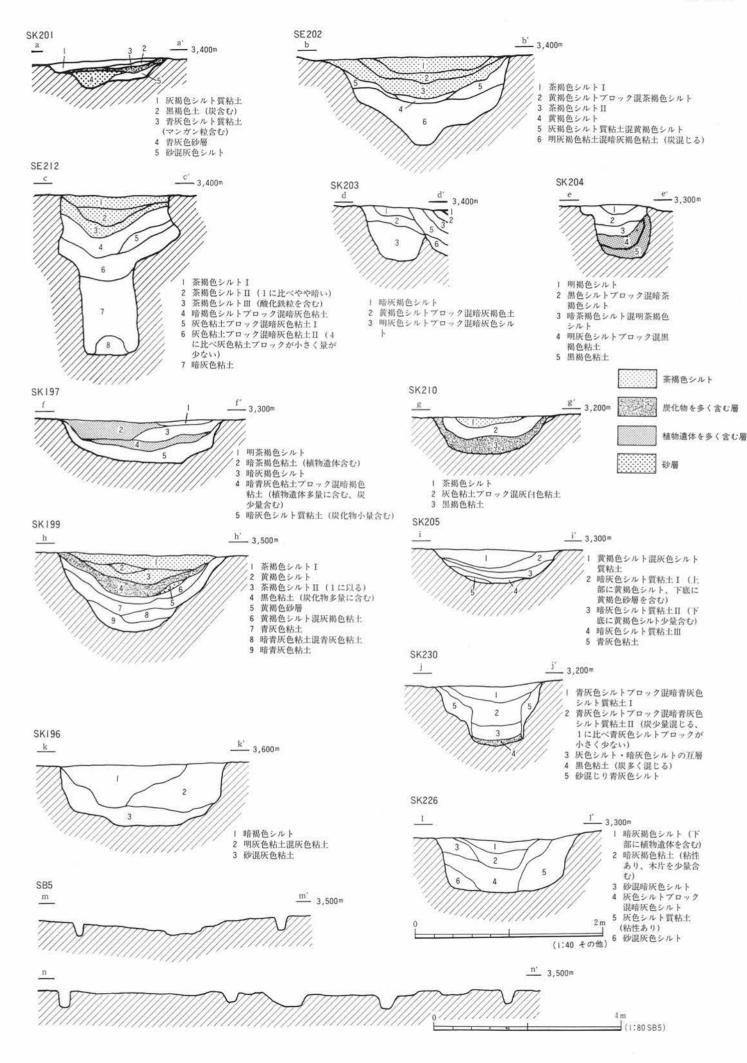


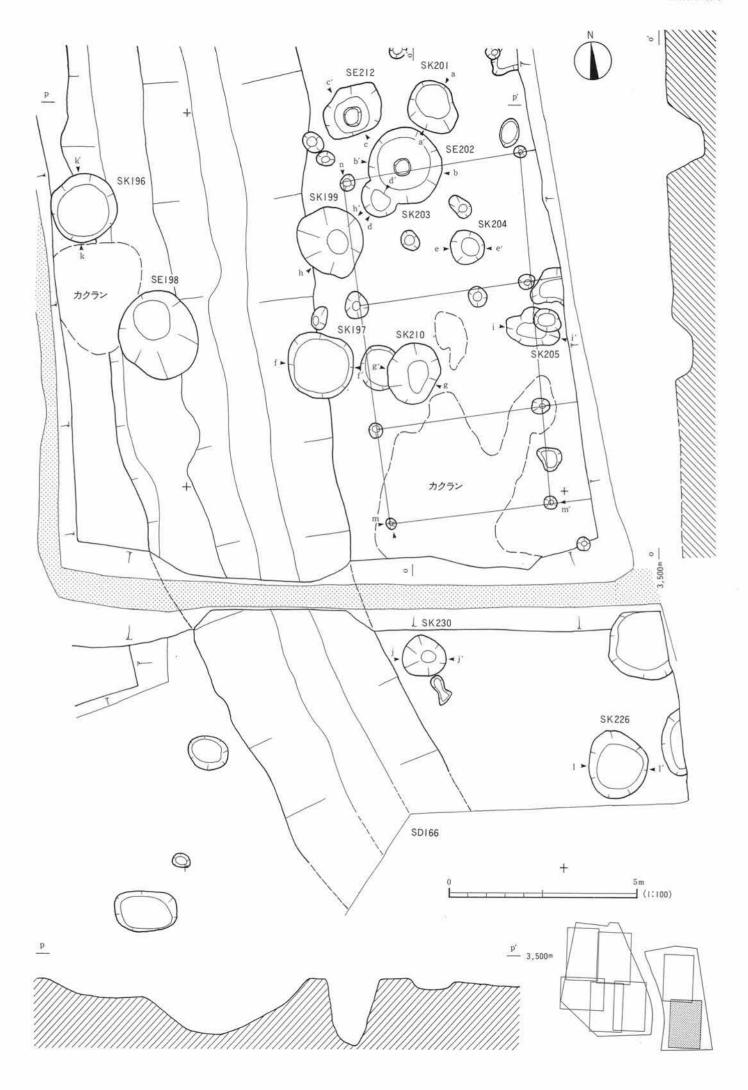


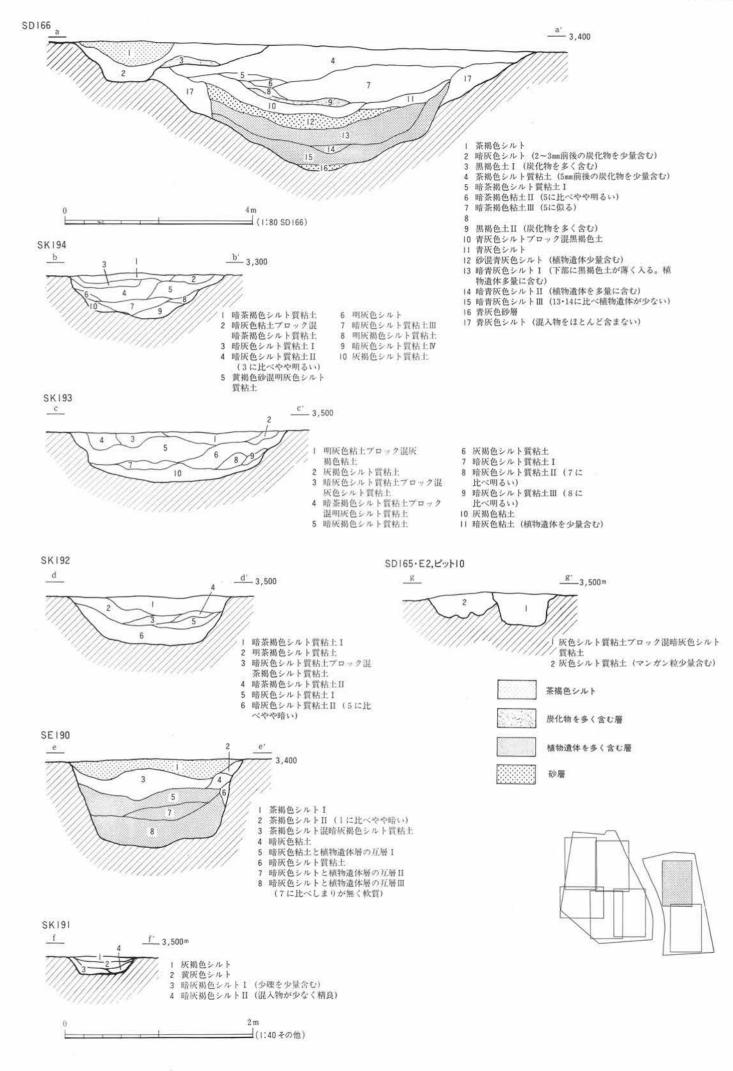


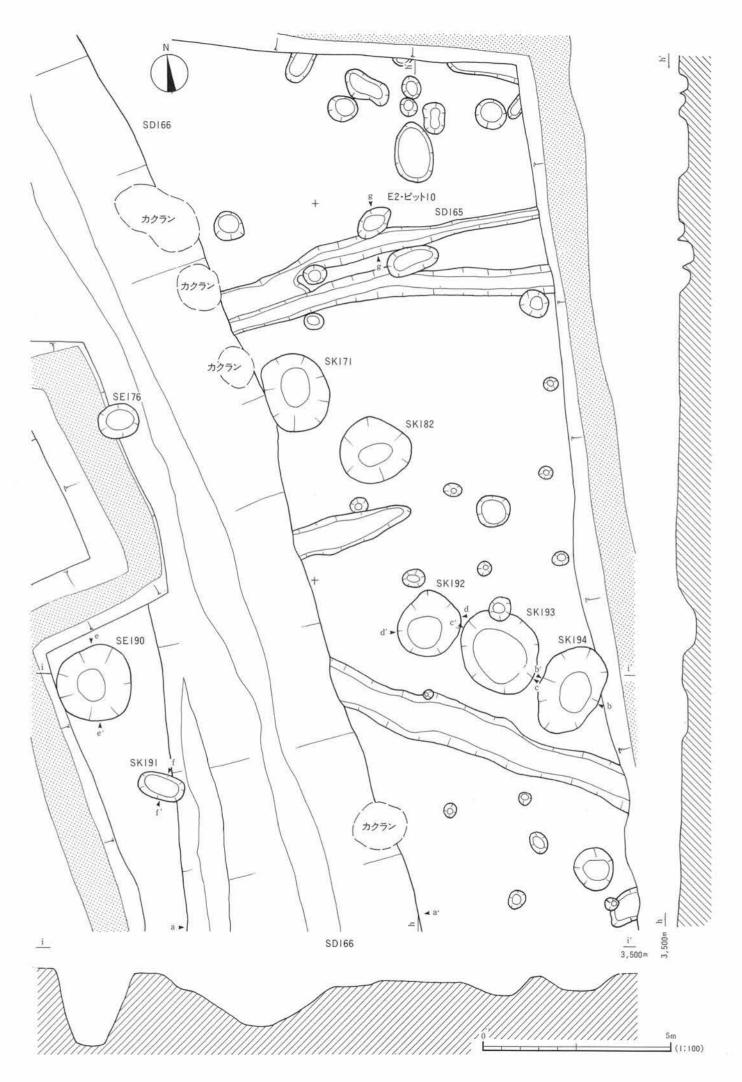


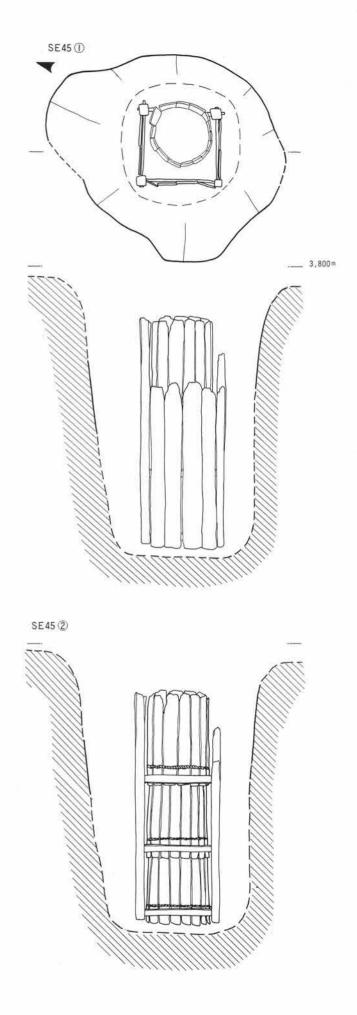


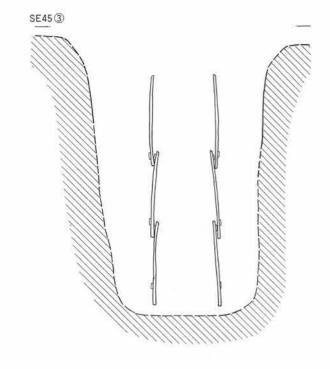


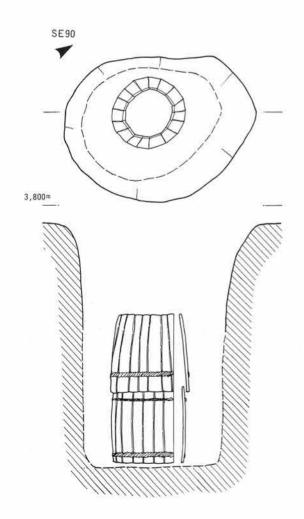


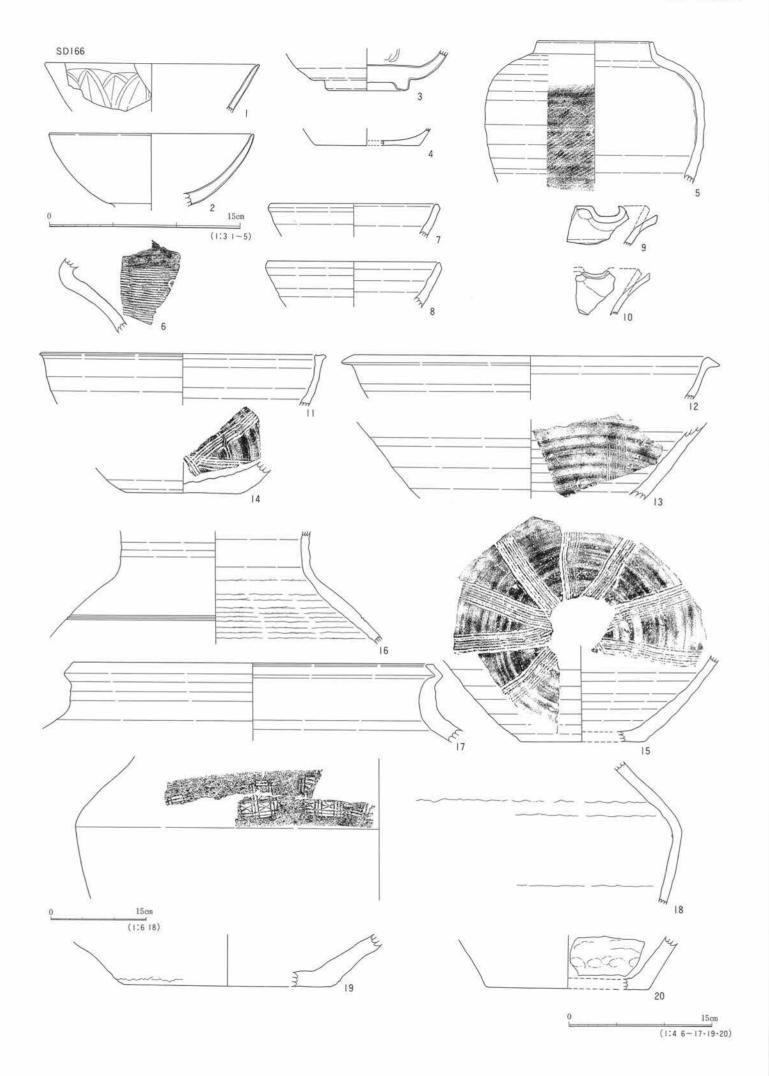


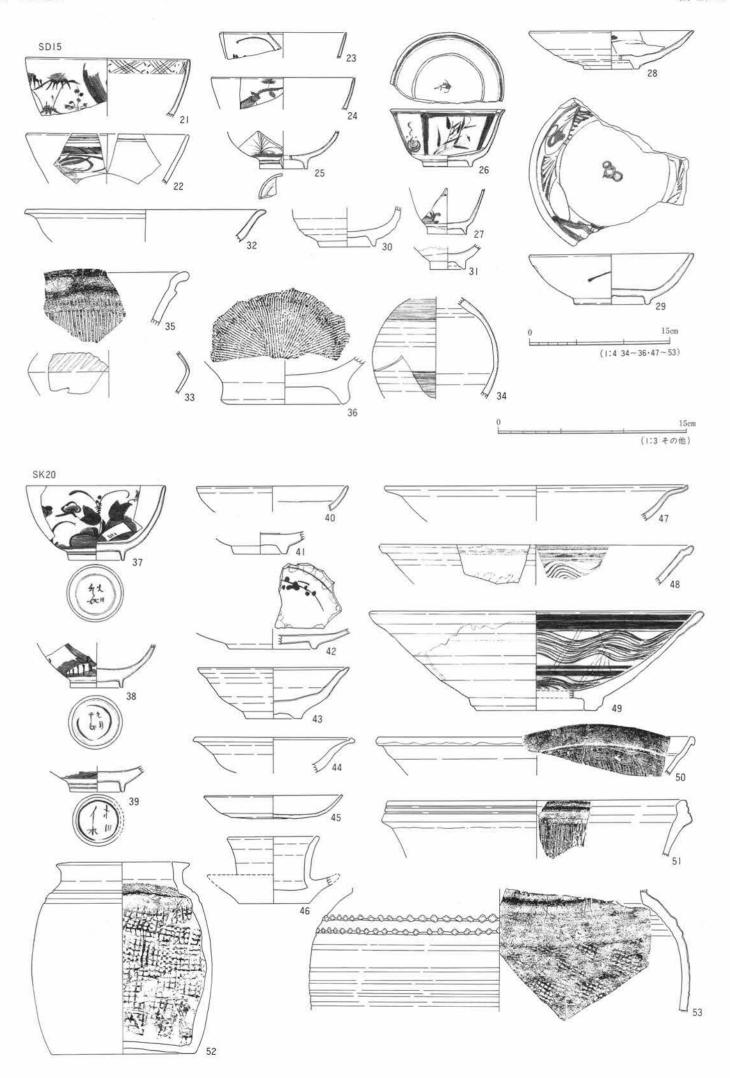


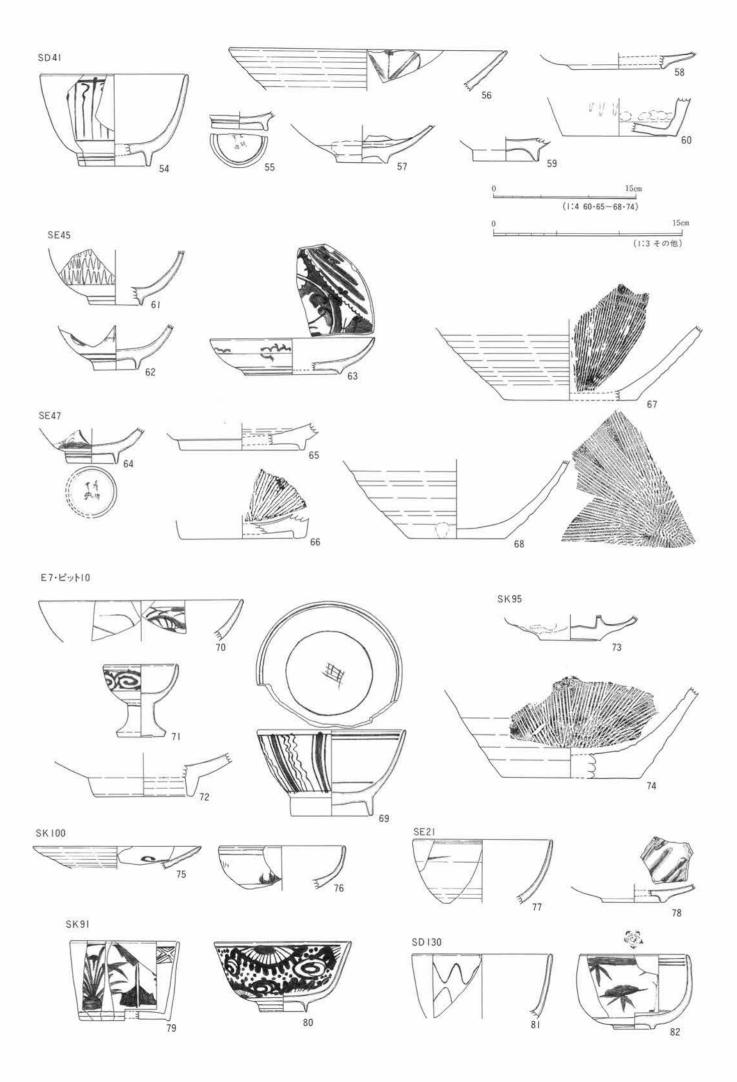


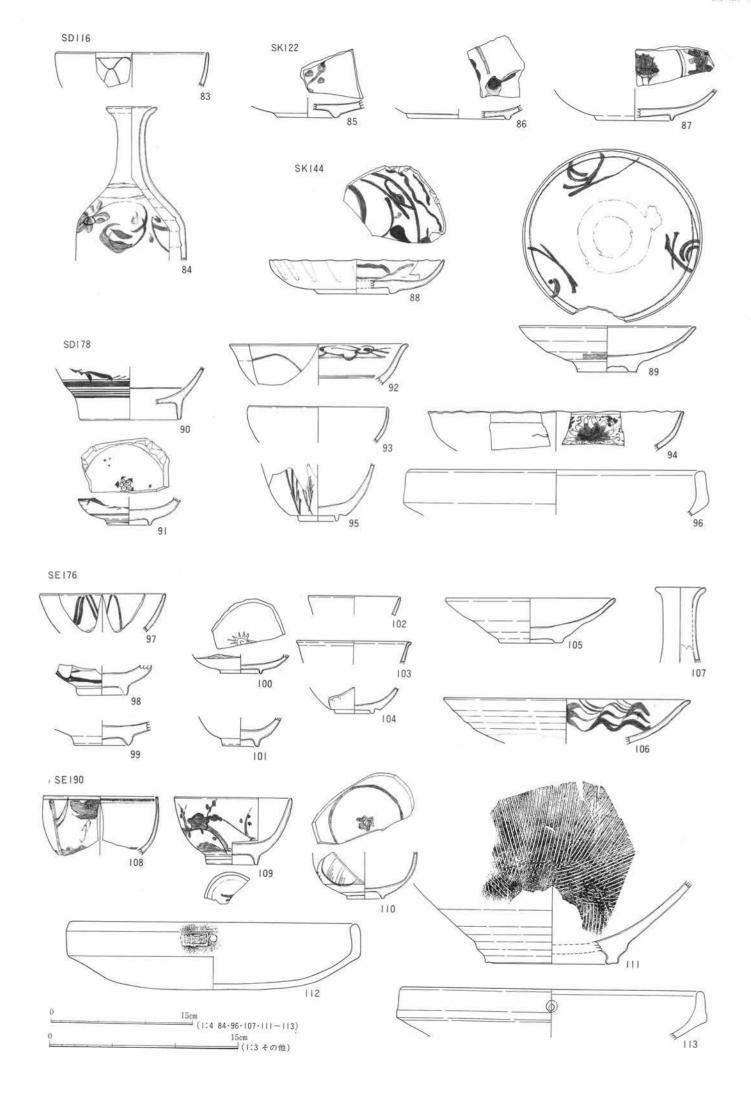


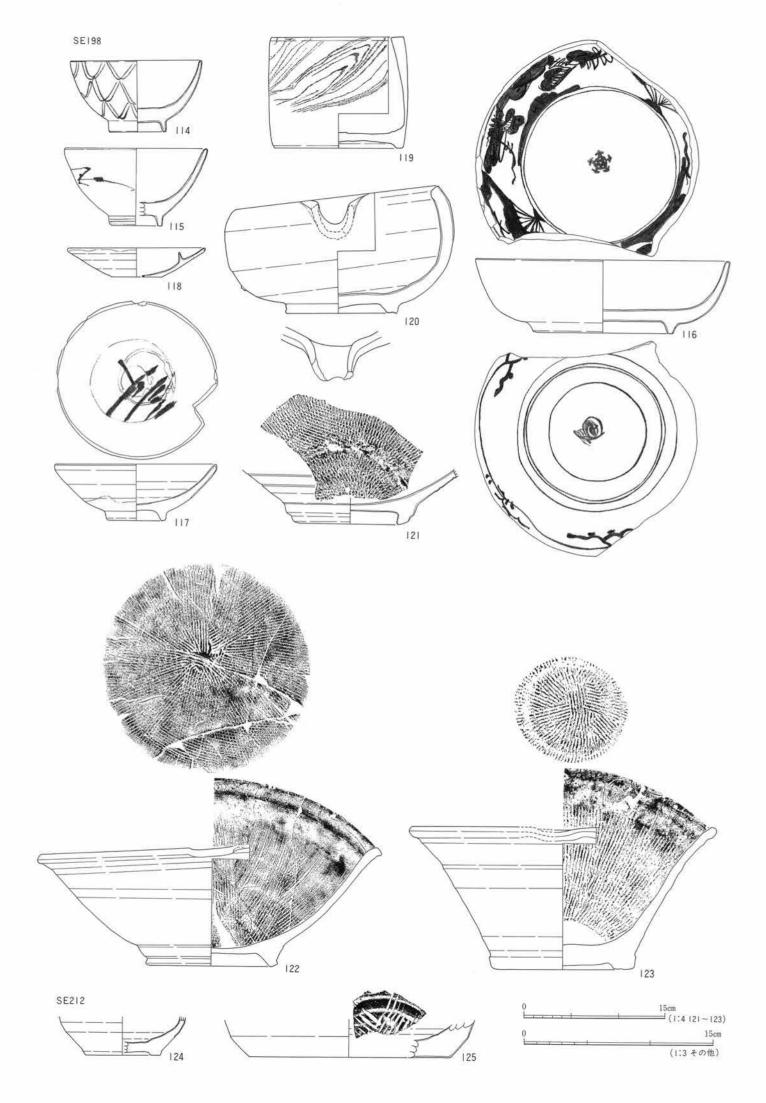


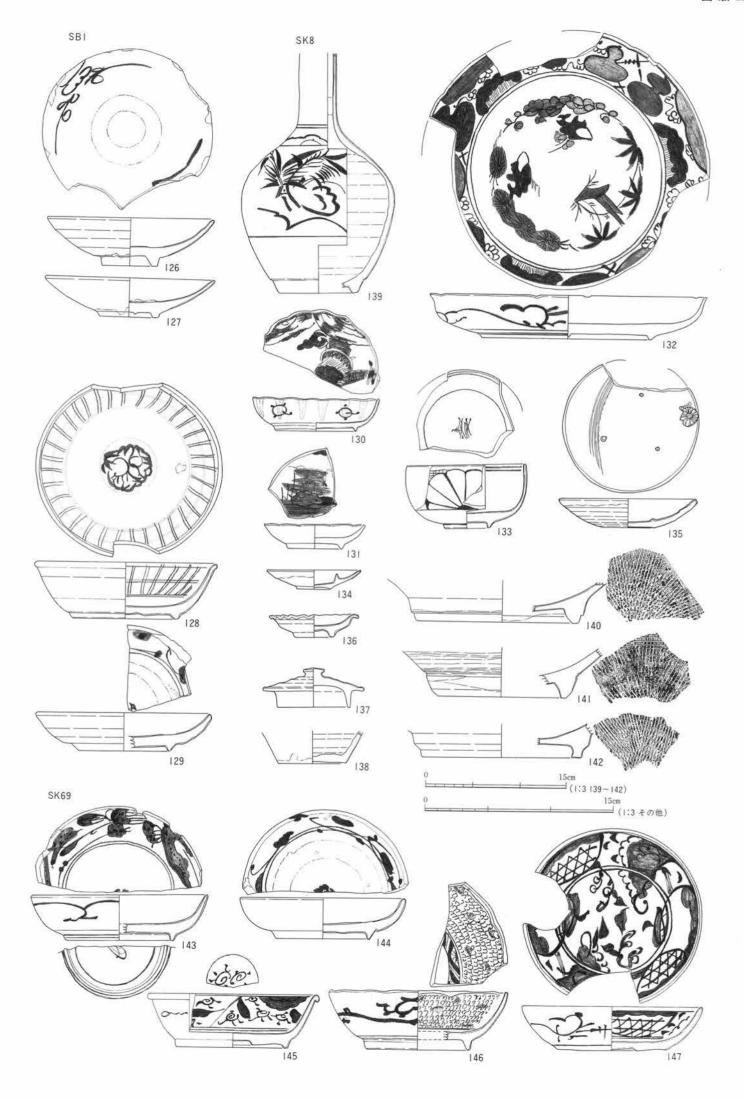


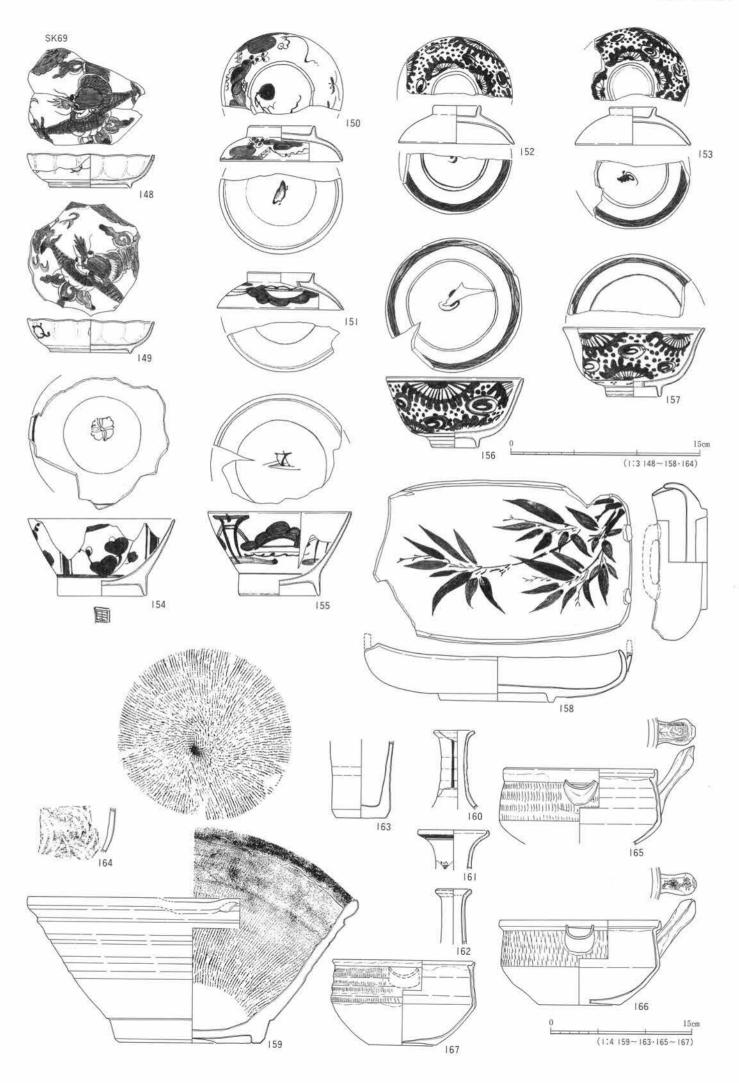


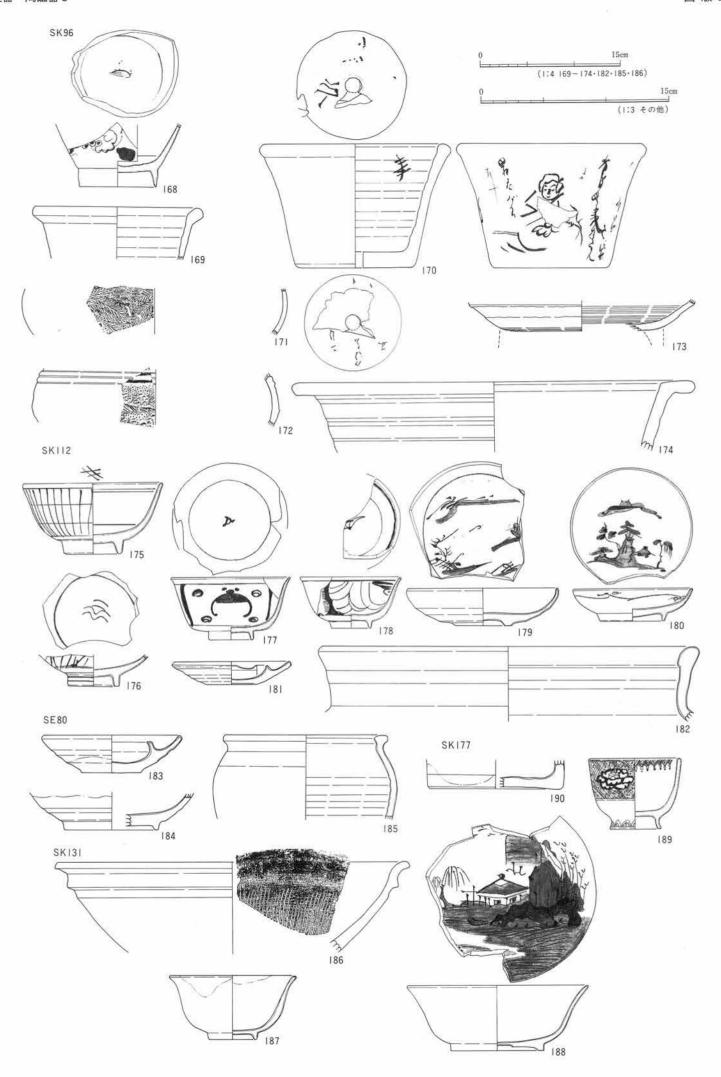


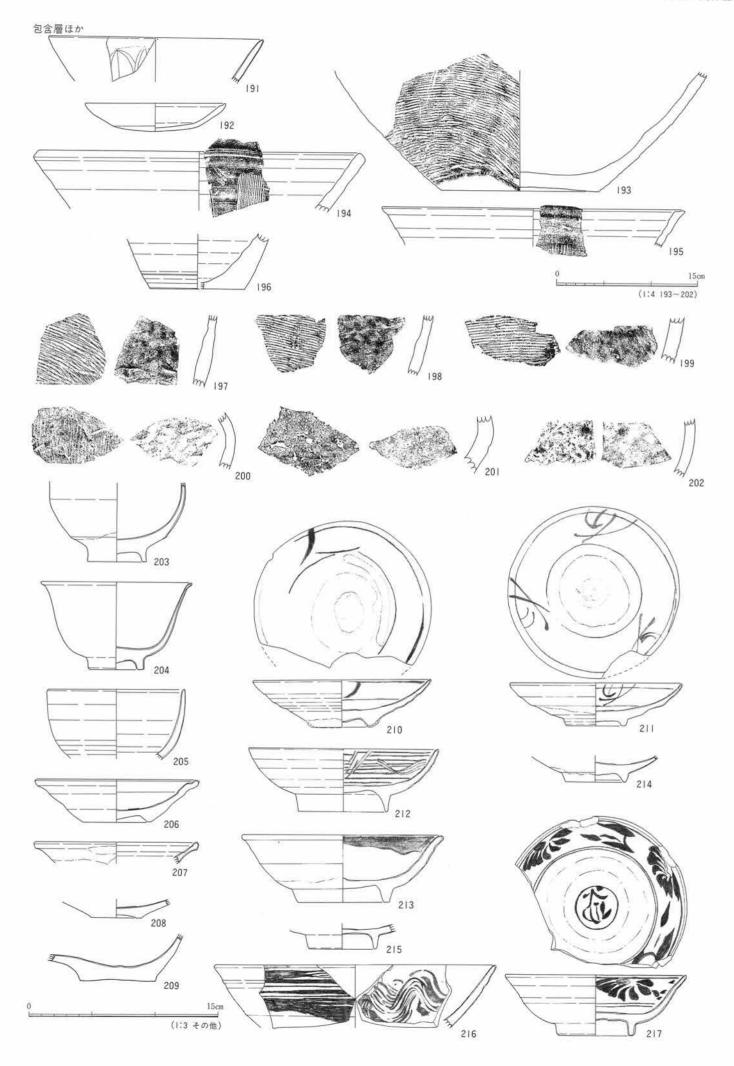


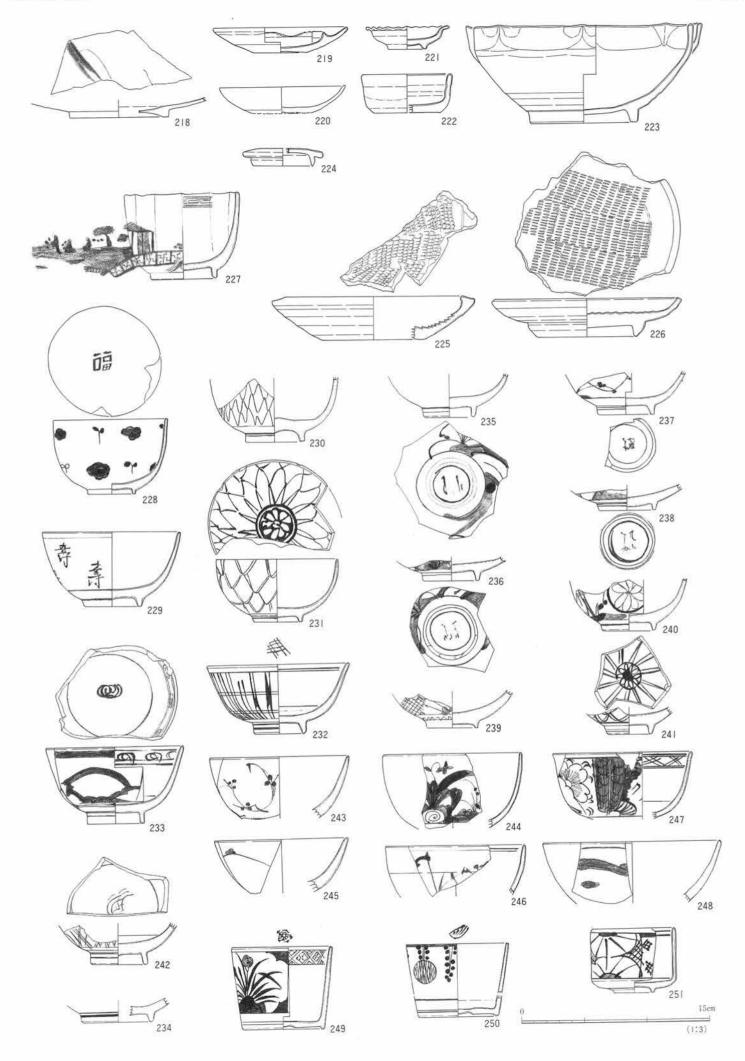


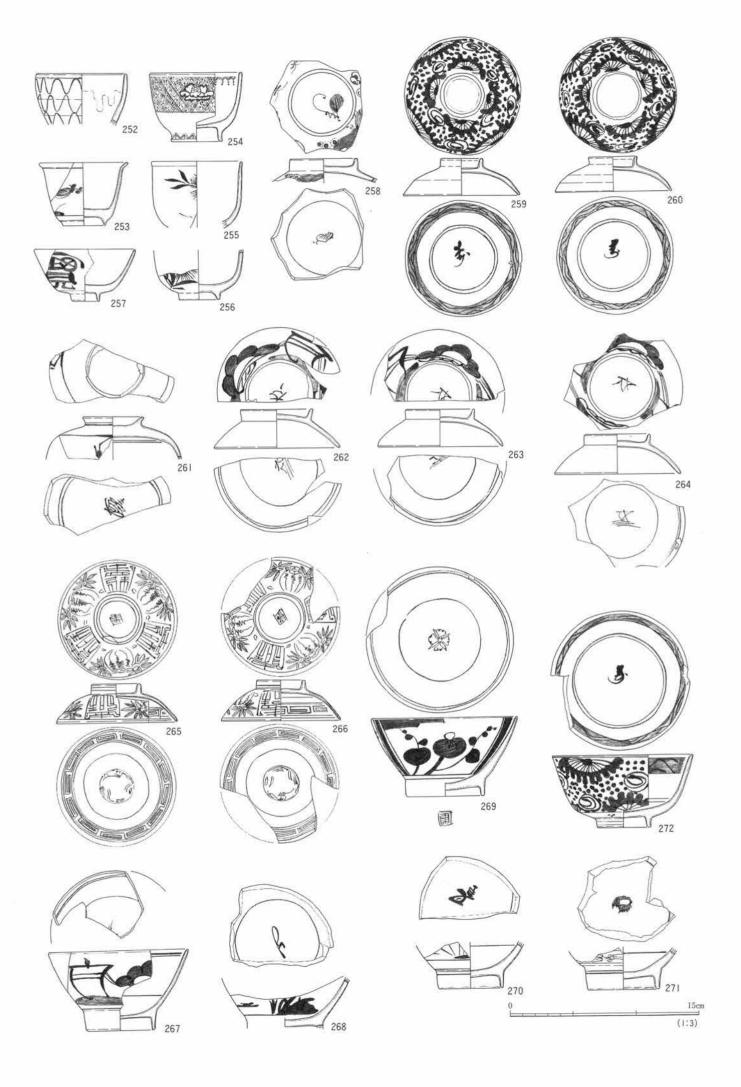


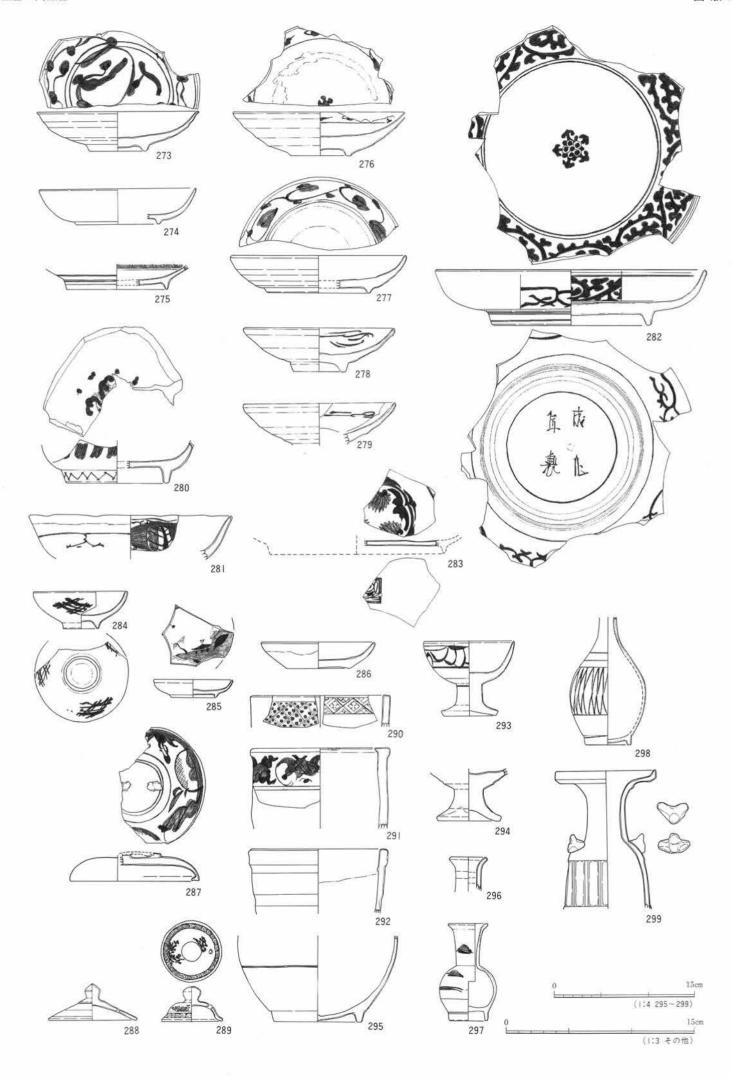


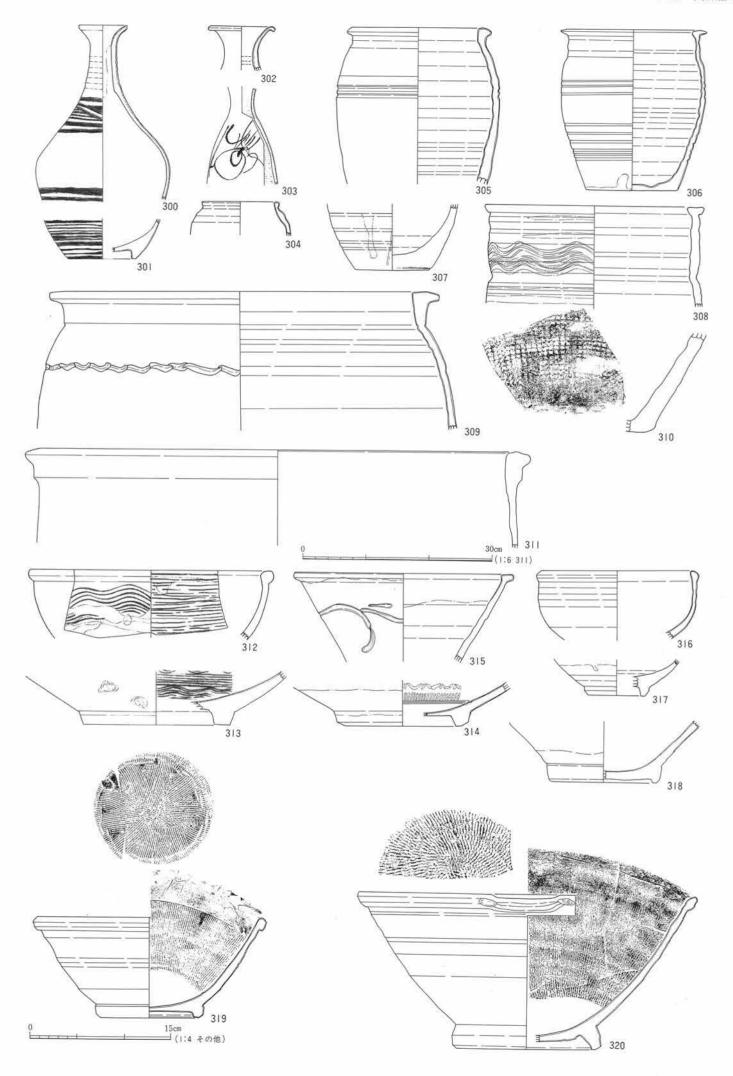


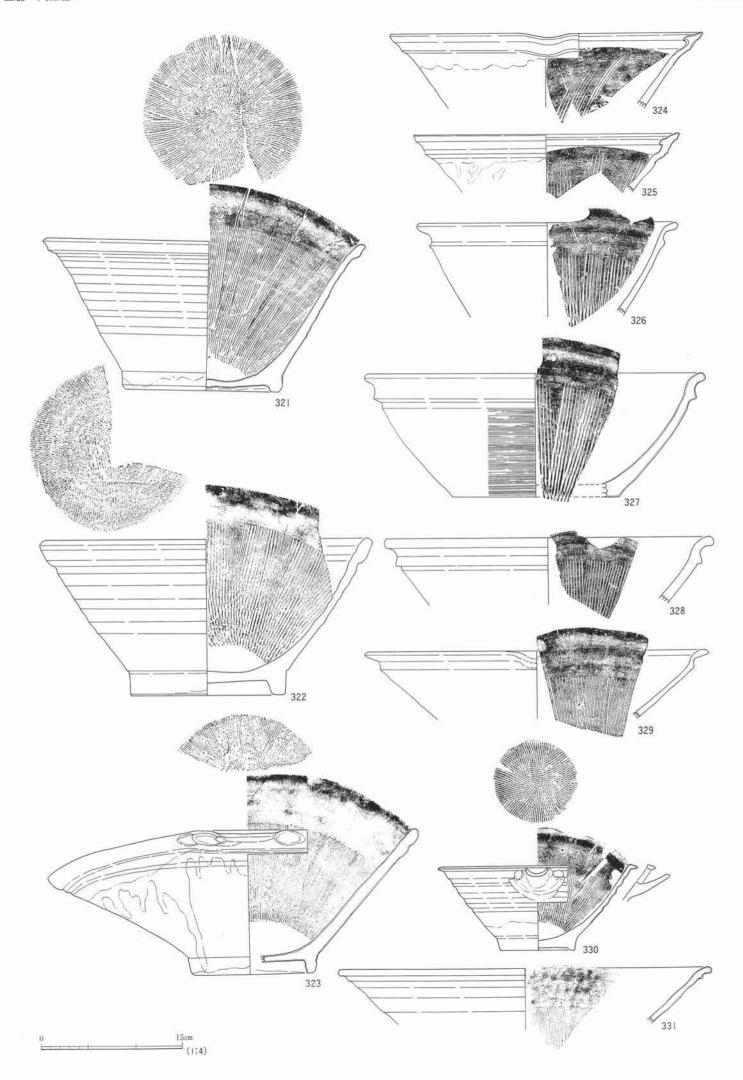


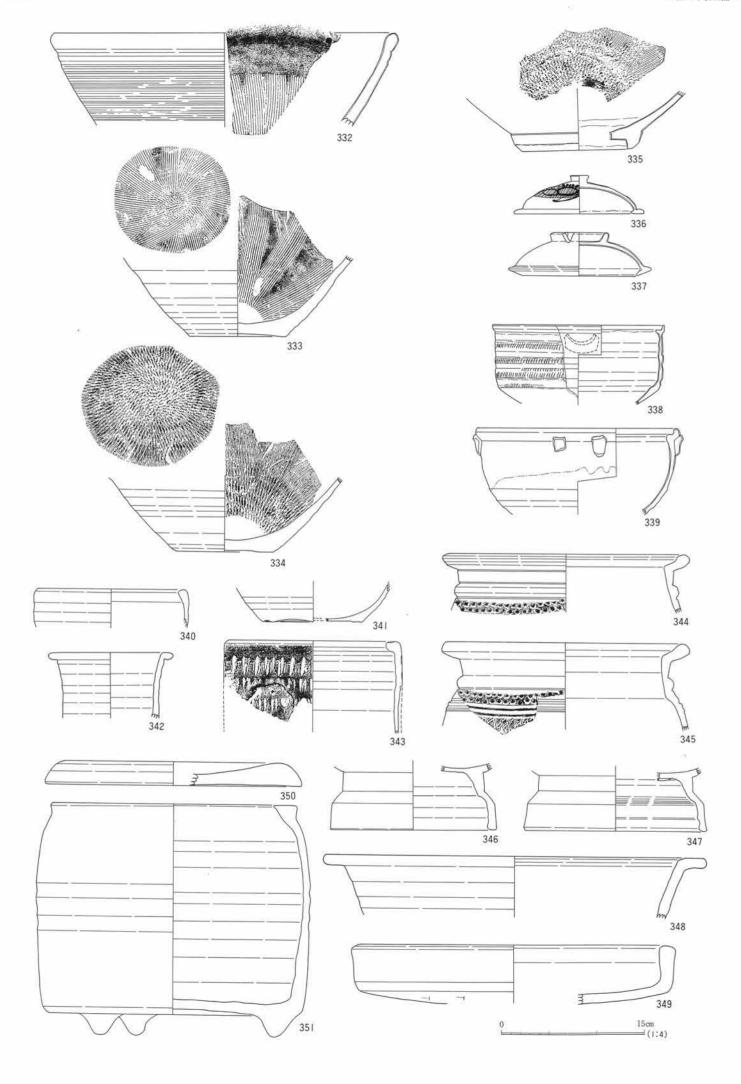


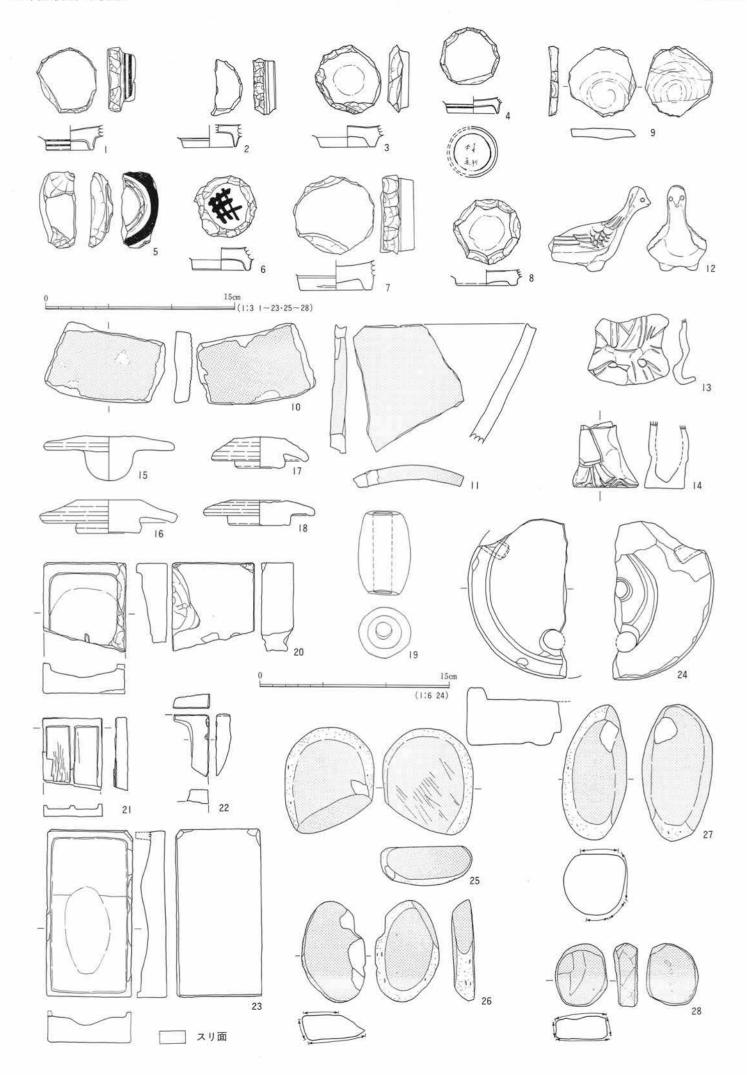


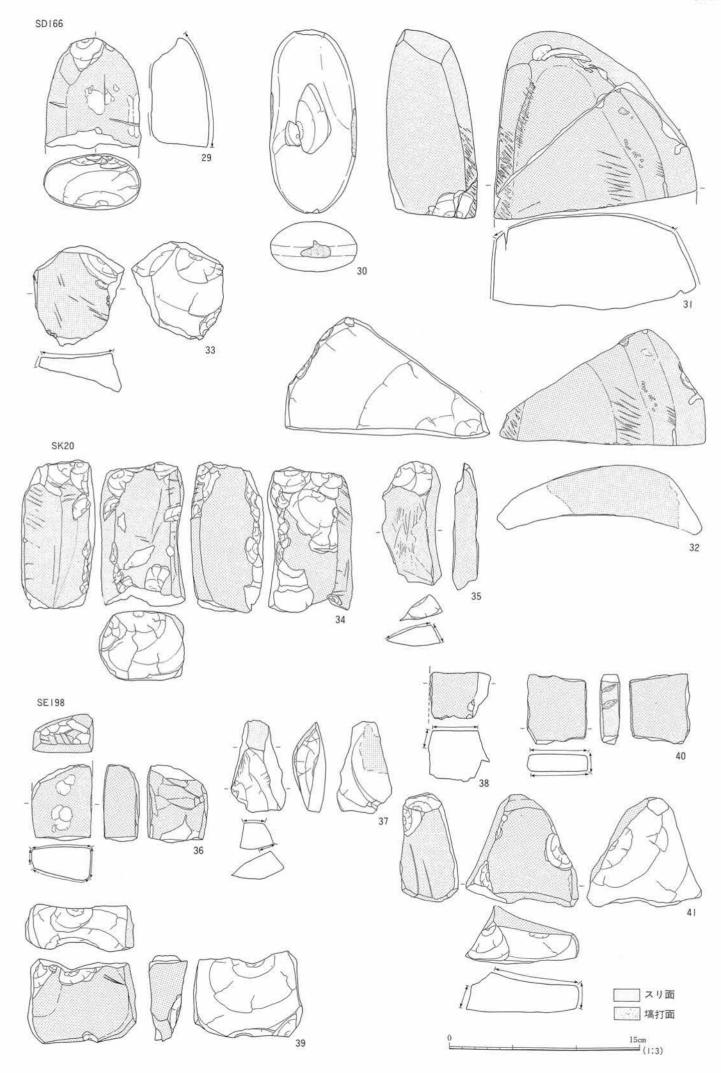


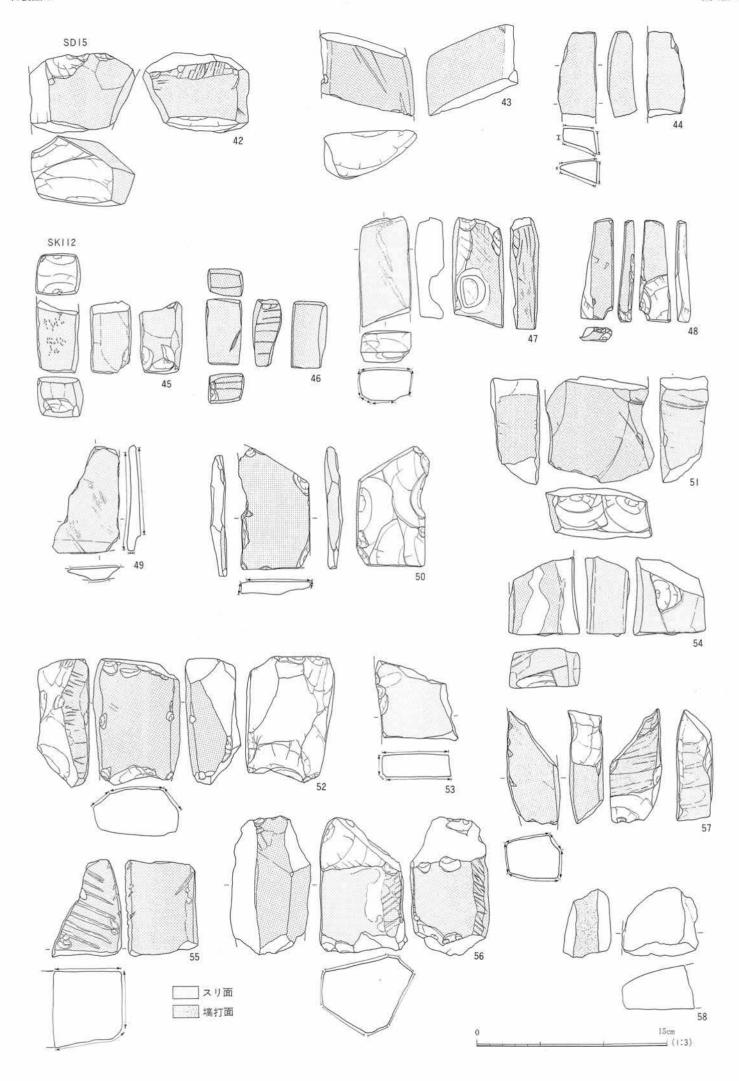


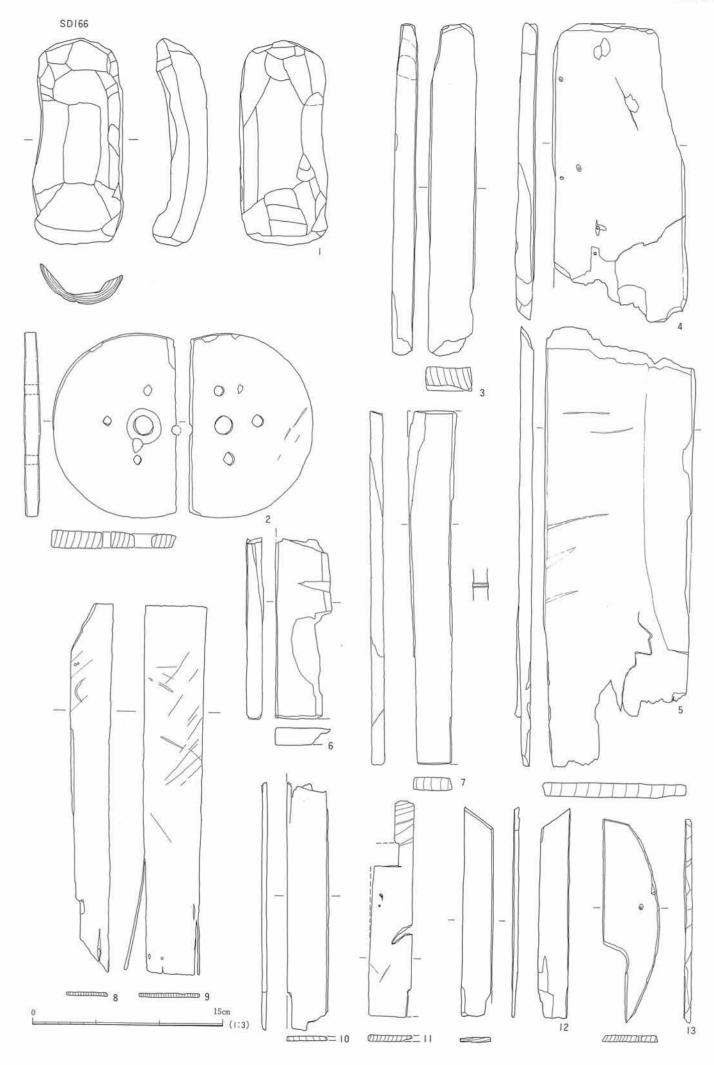


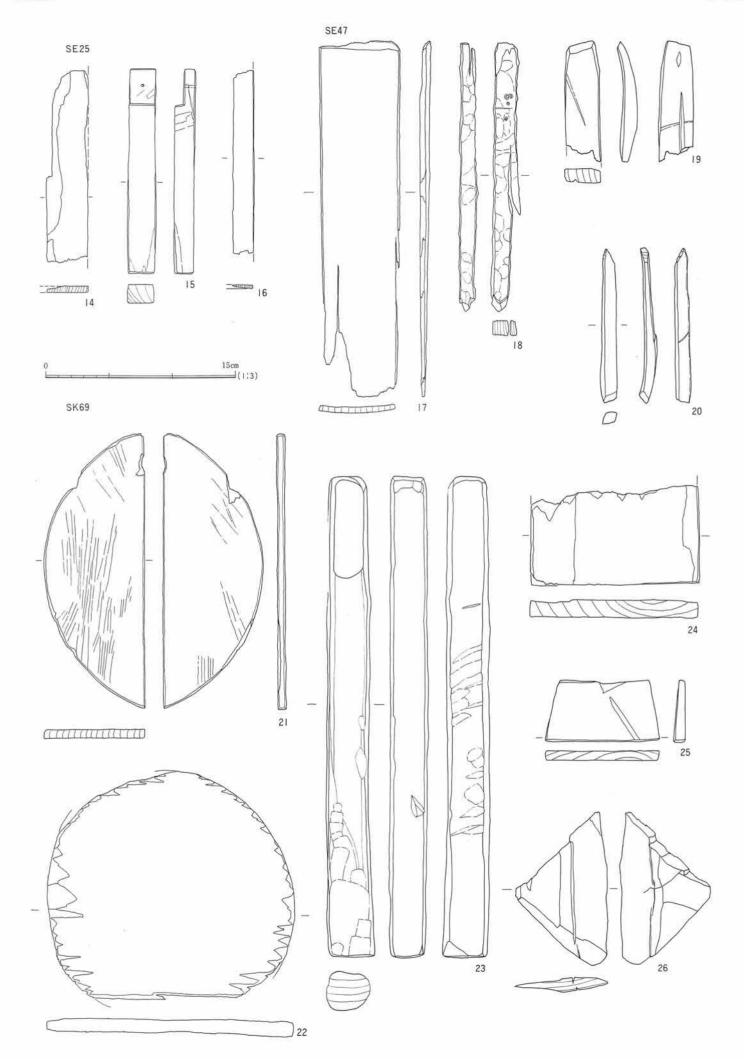


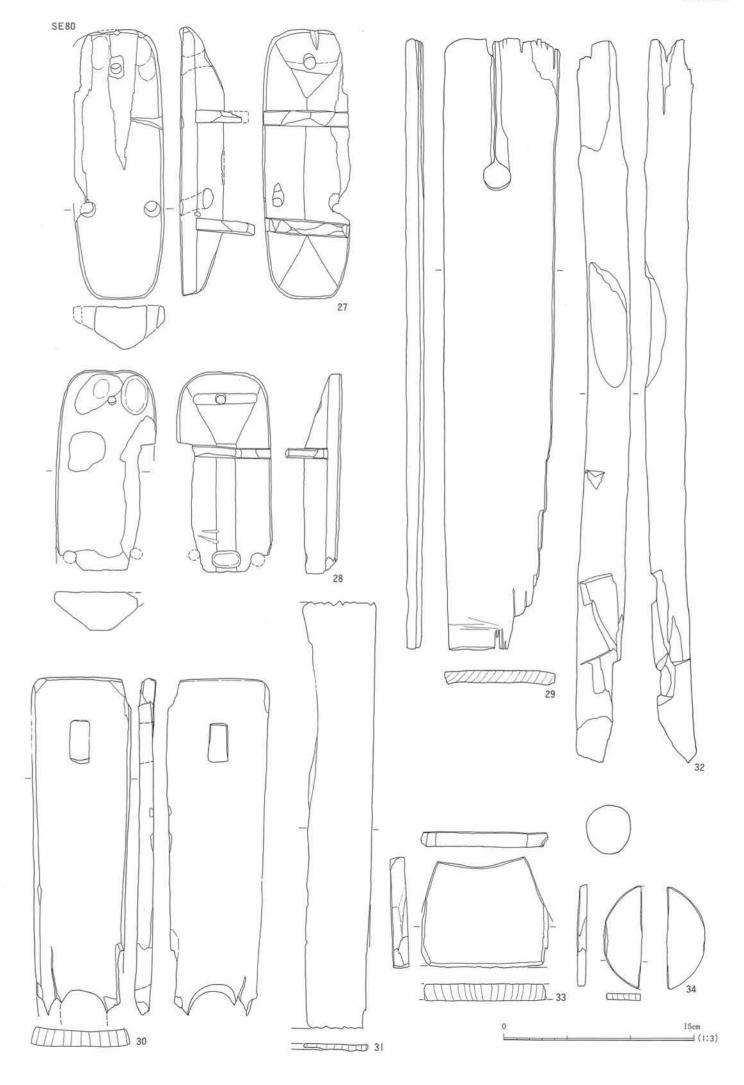


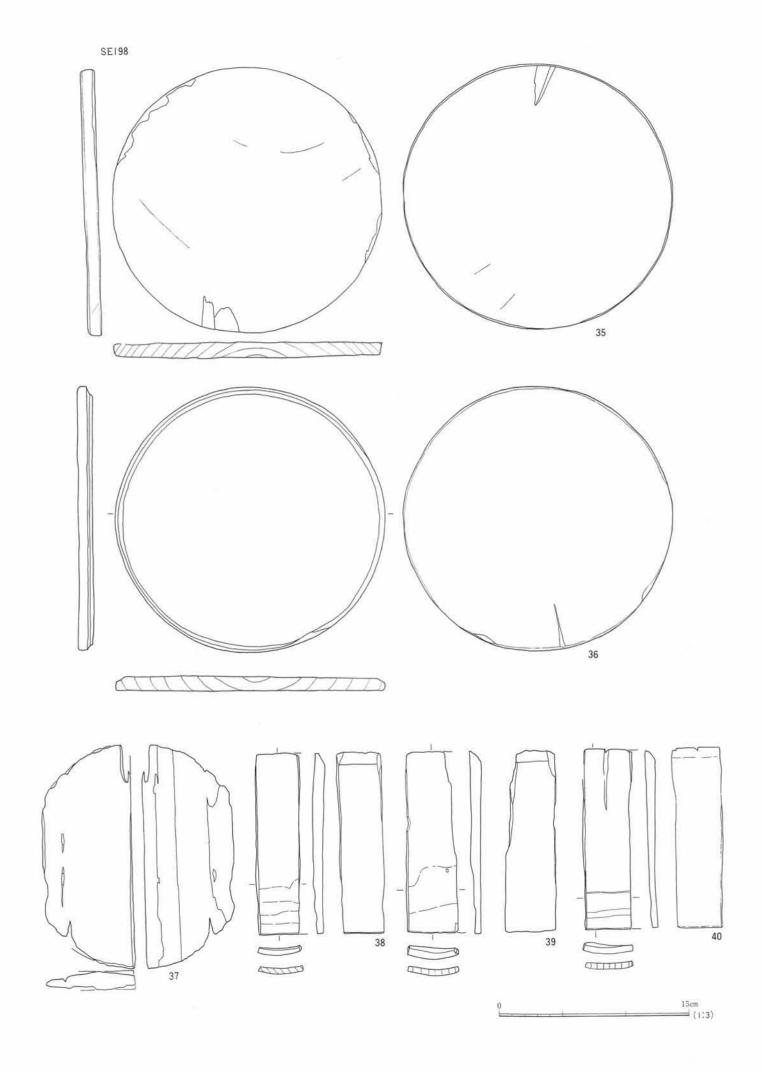


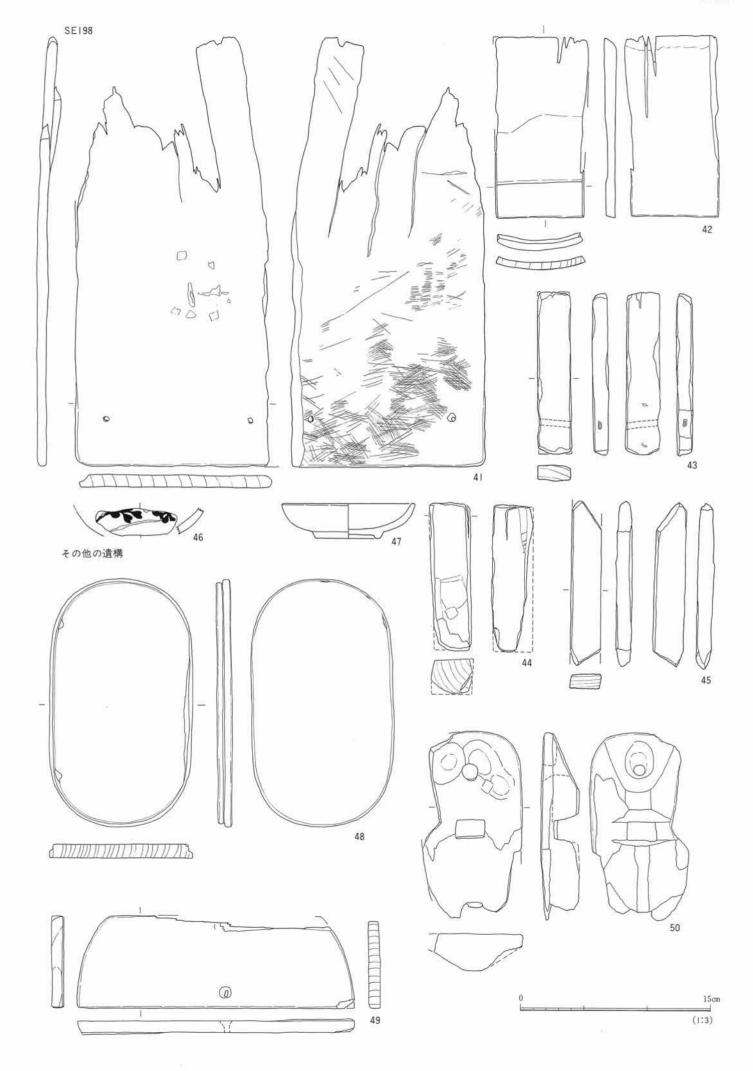


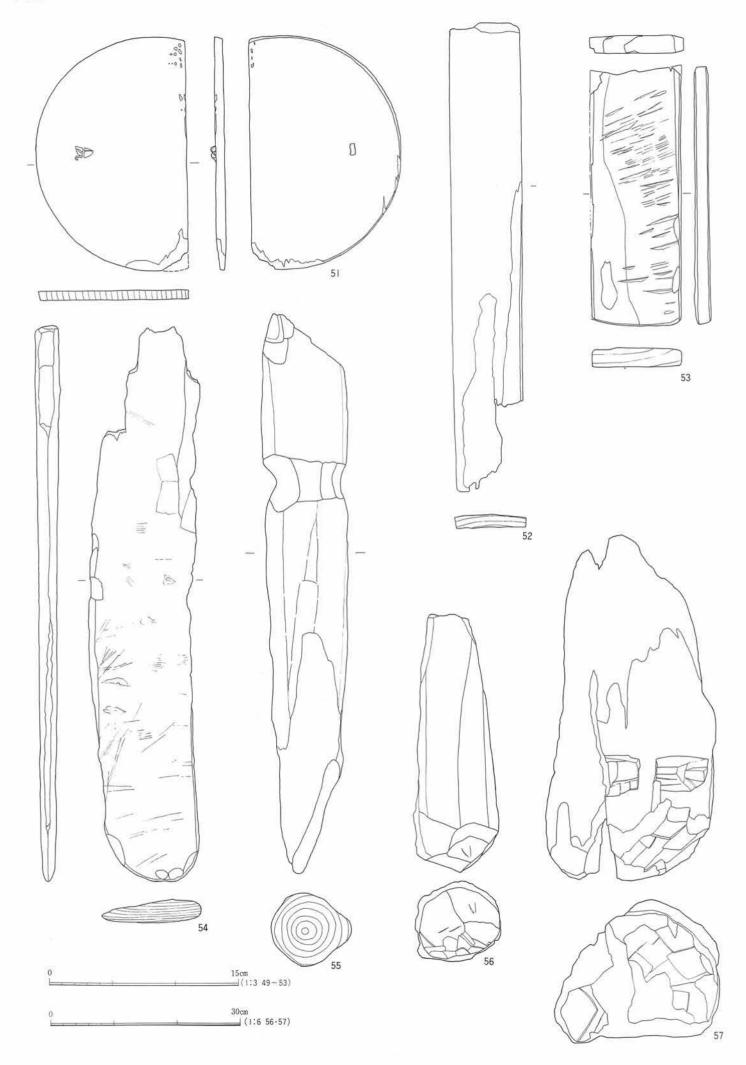


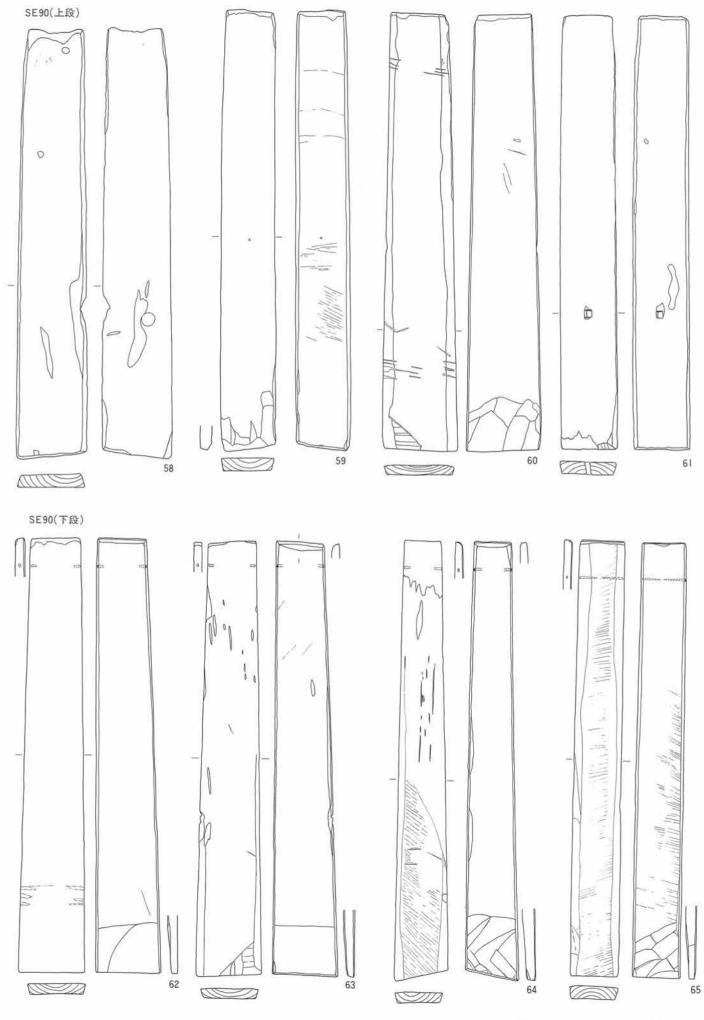




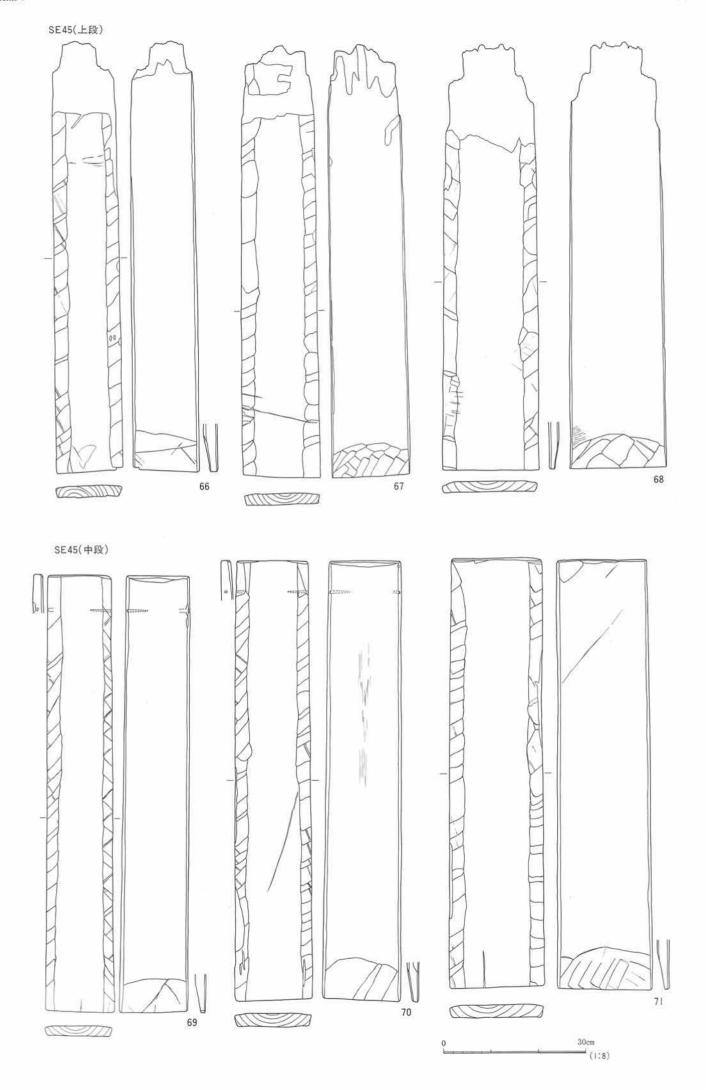


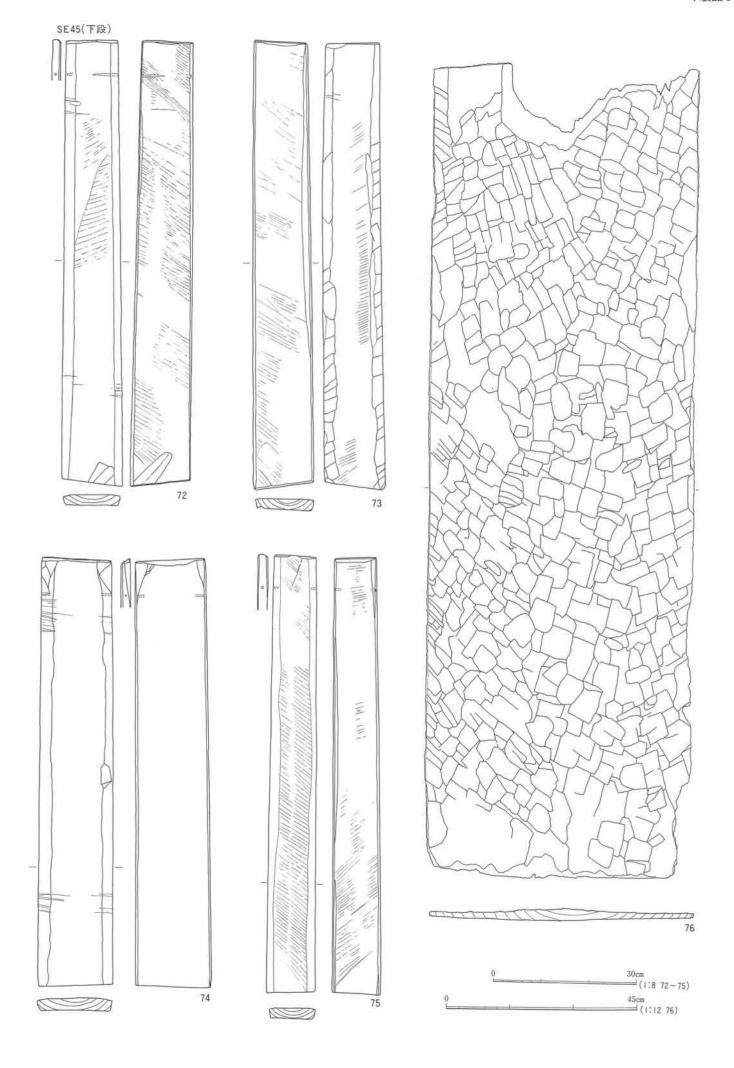


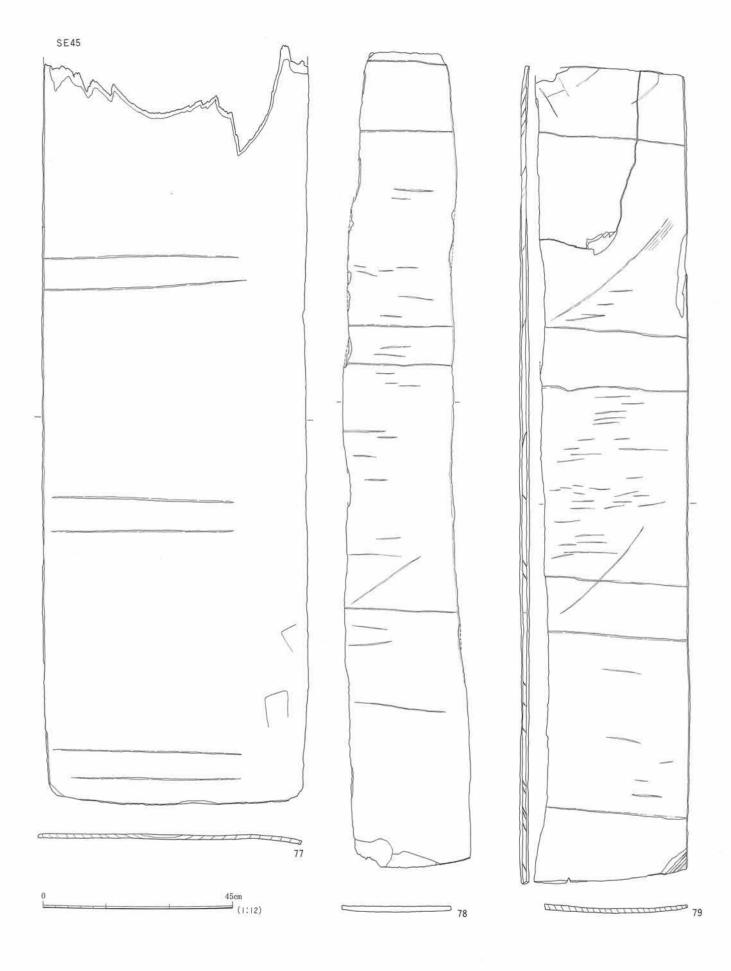




0 30cm (1:8)











1. 土層堆積状況 1 (F8) (北から)



2. 土層堆積状況 2(F5) (北から)



3. 土層堆積状況 3(D1) (西から)



 調査前近景 (東から)

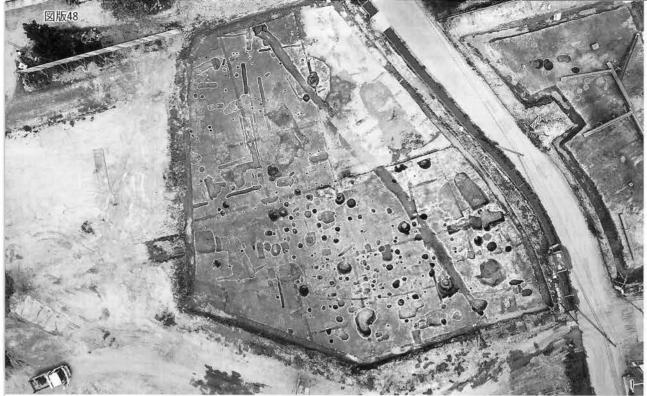


2. 作業風景 (西から)





- 3. 暗集政設工事風景
- 4. ラジコンヘリに よる空中写真撮 影風景



1. A区全景 (上空から)



2. B区全景 (上空から)



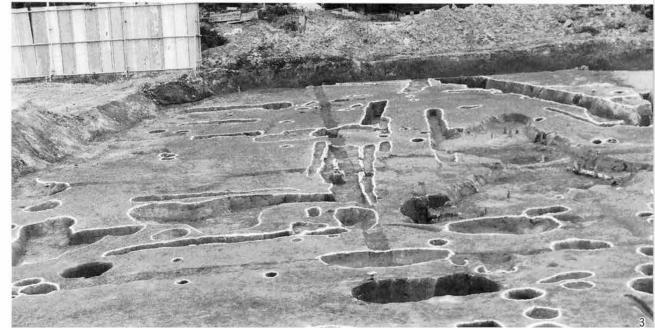
3. D5・6周辺 (南西から)



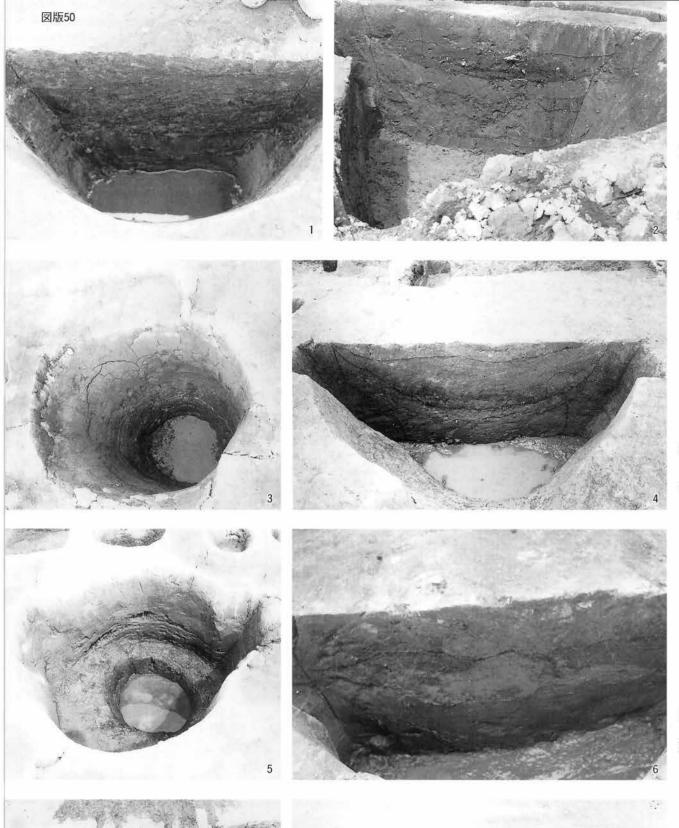
1. E 5 · 6 周辺 (南から)



2. E 7 · 8 周辺 (南から)



3. F 5 · G 8 周辺 (南から)



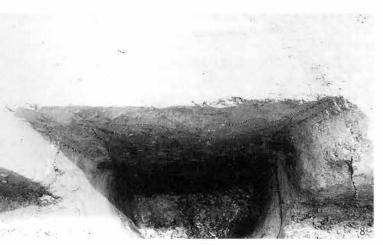
- 1. SE1土層断面 (北から)
- 2. SK 8 土層断面 (西から)



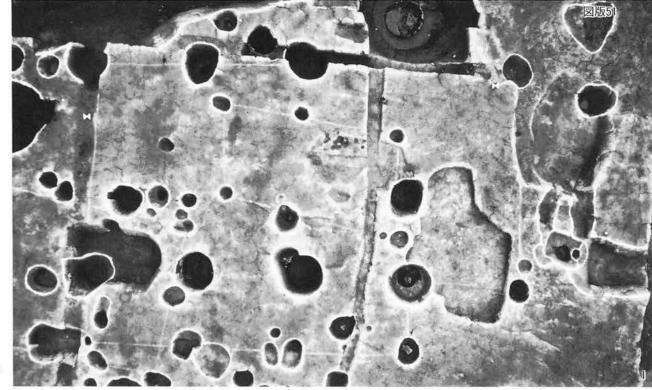
4. SE34土層断面 (東から)

- 5. SE47(東から)
- 6. SE47土層断面 (東から)

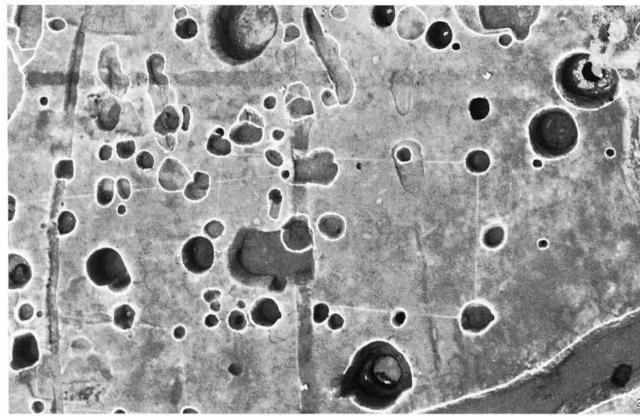




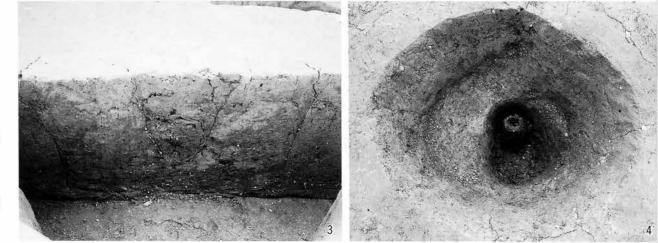
- 7. SE140(南から)
- 8. SE140土層断面 (南から)



1. SB1 (上空から)

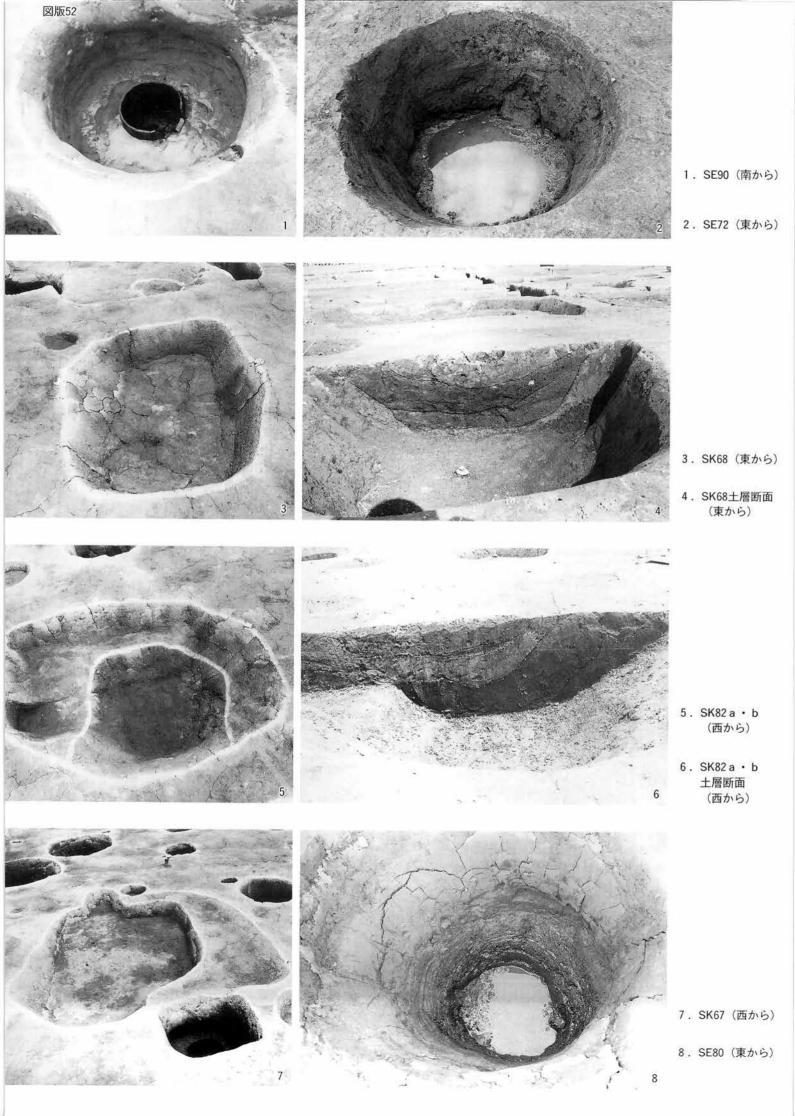


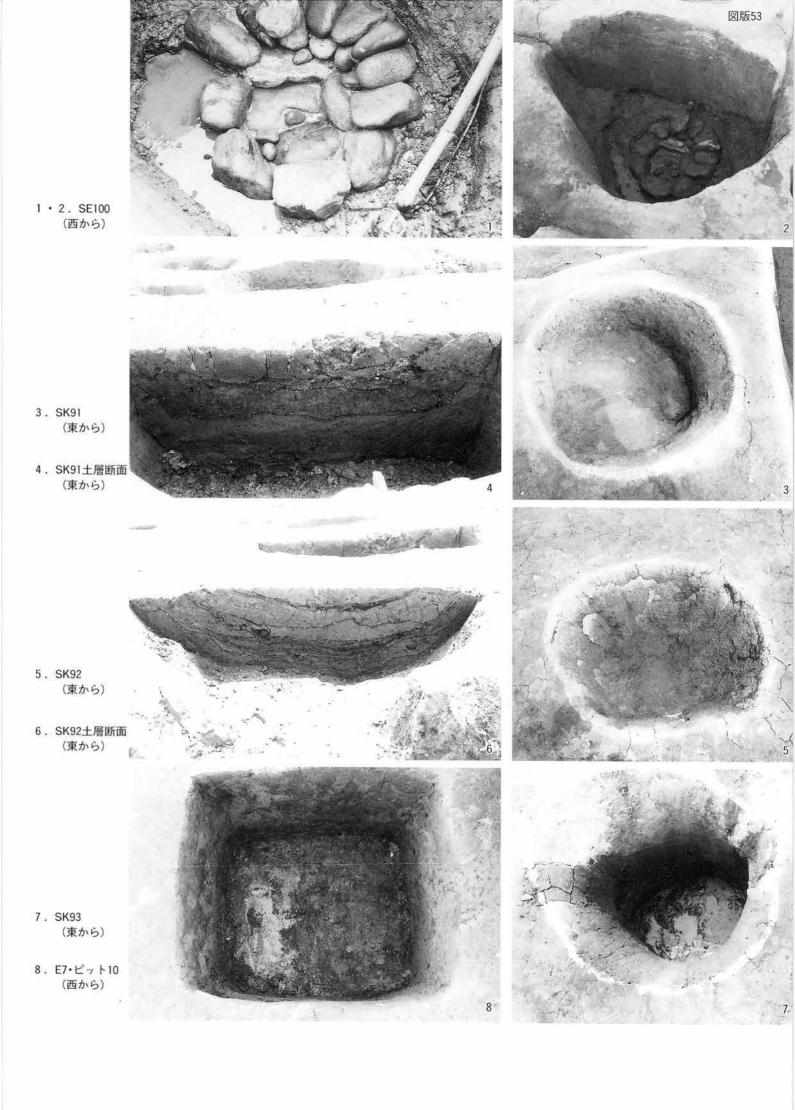
2. SB2 (上空から)

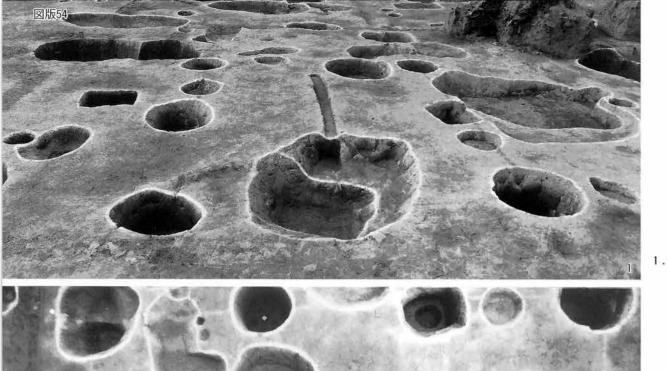


3. SB 1 ・ピット 2 (東から)

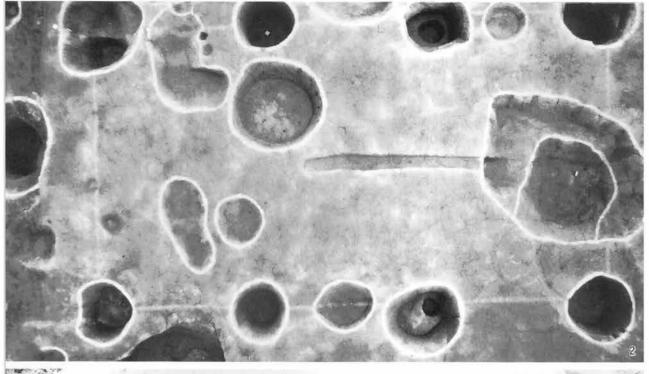
4. SB 1 ・ピット 4 (南から)







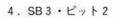
1. SB3 (南から)



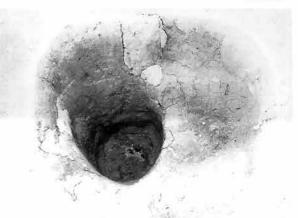
2. SB3 (上空から)



3. SB3・ピット1







5. SB3・ピット4

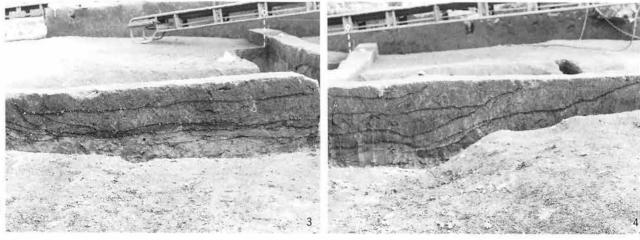
6. SB3・ピット6



1. SK20とSD15 (西から)



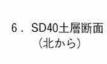
2. F·G 6 周辺

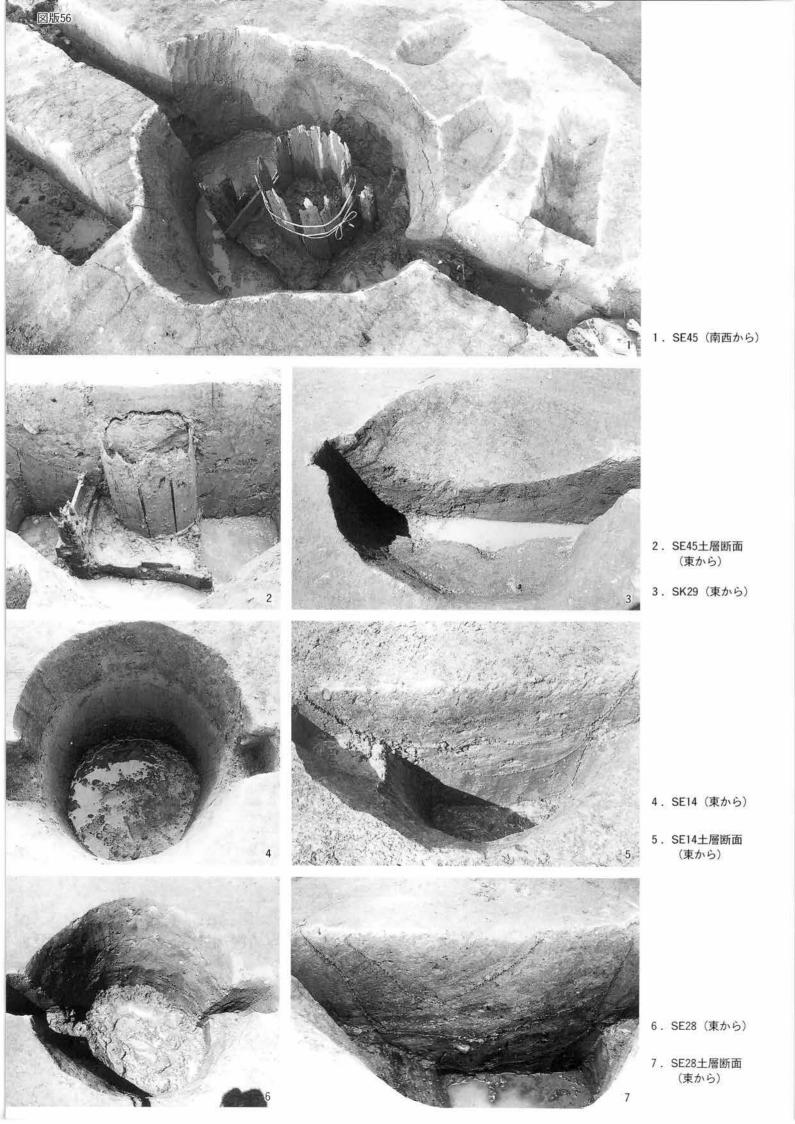


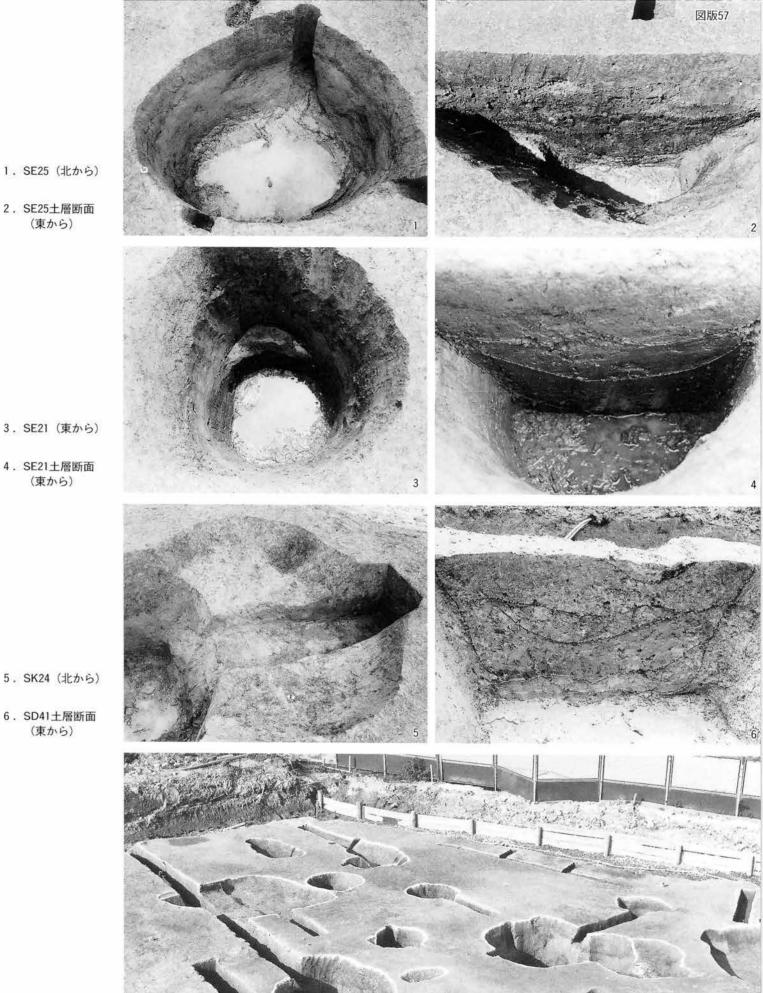
3 ・ 4 、SK20土層断面 (北から)



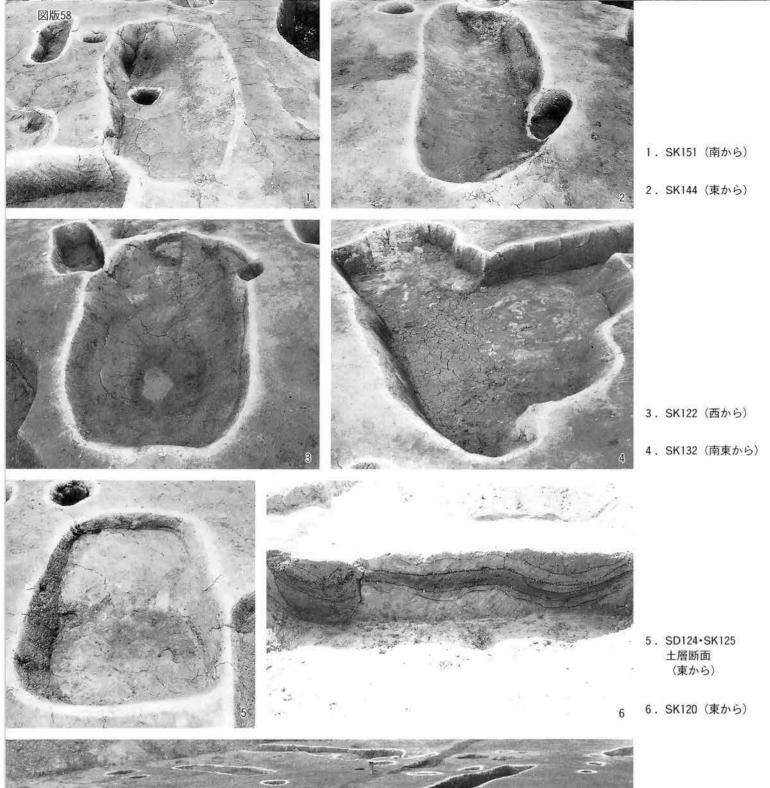
5. SD15土層断面 (東から)

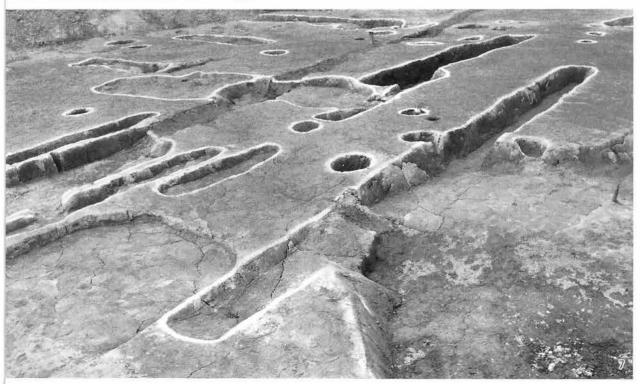




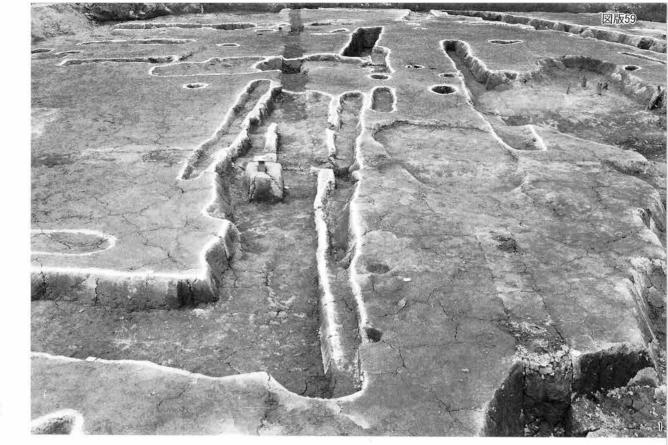


7. G 6 周辺 (南西から)





7. G・H 7・8 周辺 (東から)



 F7・8周辺 (南から)



2. F8周辺(東から)



3. G8周辺(西から)



1. B区全景(北南から)

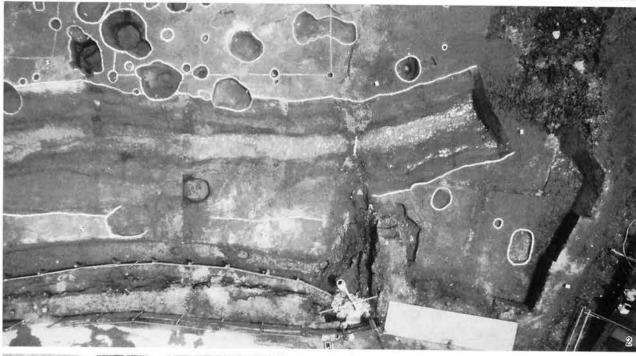


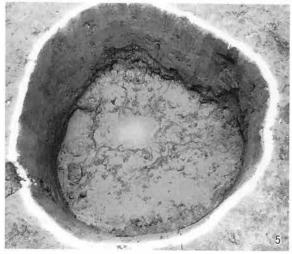
2. G・F・2・3 周辺 (東から)



3. E 2 · 3周辺 (東から)



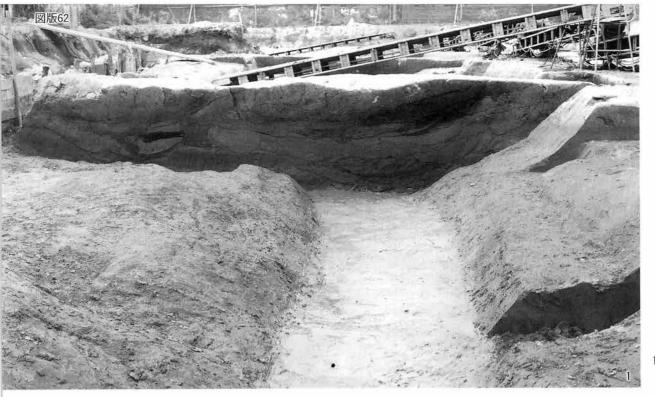






- 1. D2・3周辺(東から) 2. D2・3周辺(上空から) 3. SK226(南から)
- 4. SK226遺物出土状況(南から) 5. SK226完掘(南から)

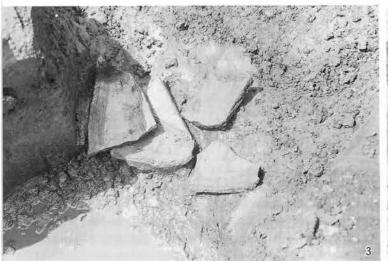




1. SD166土層断面 (南から)

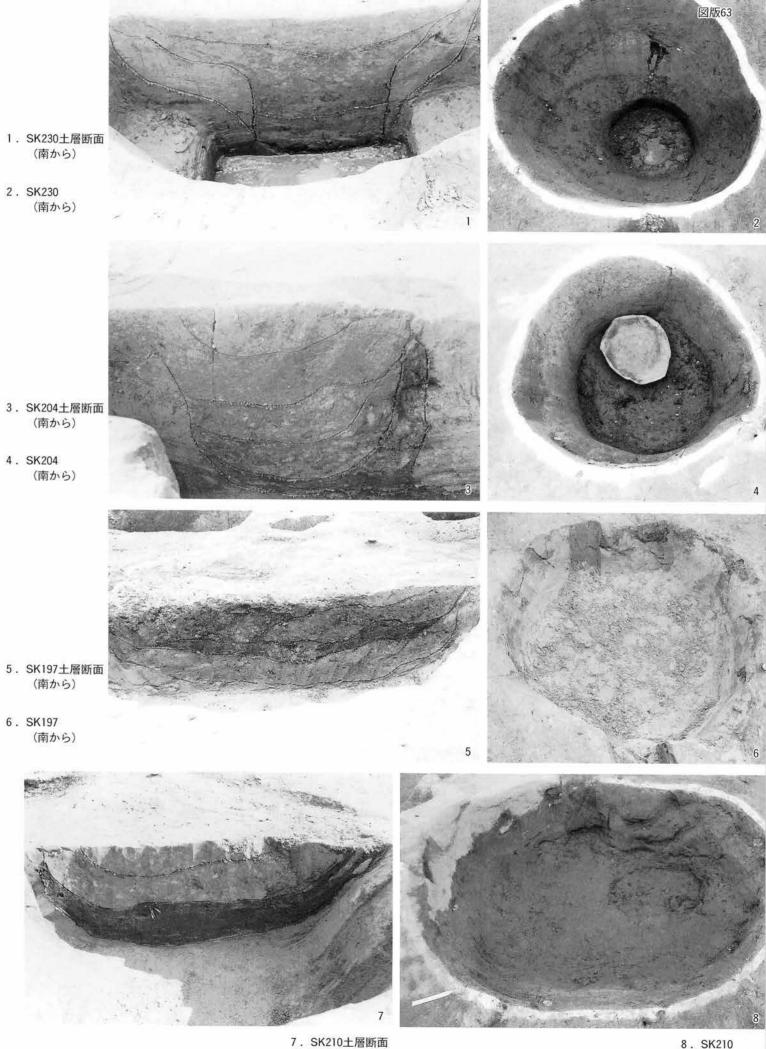


2. SD166 (南から)



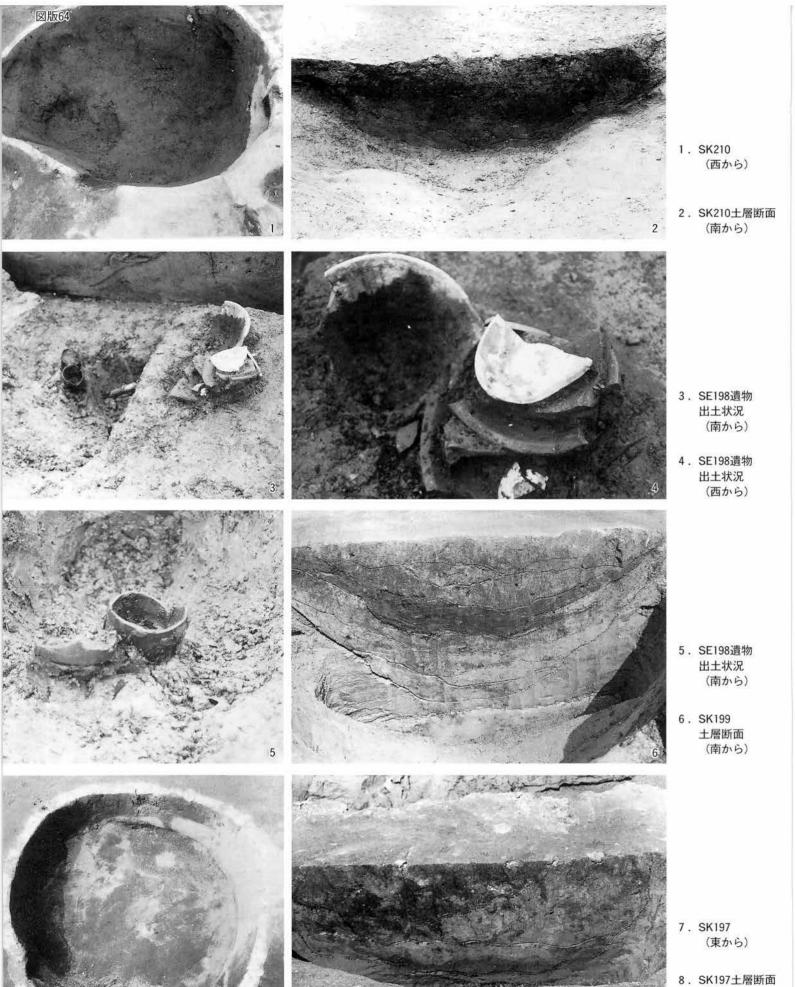


- 3. SD166珠洲出土状況 (西から)
- 4 . SD166珠洲出土状況 (南から)

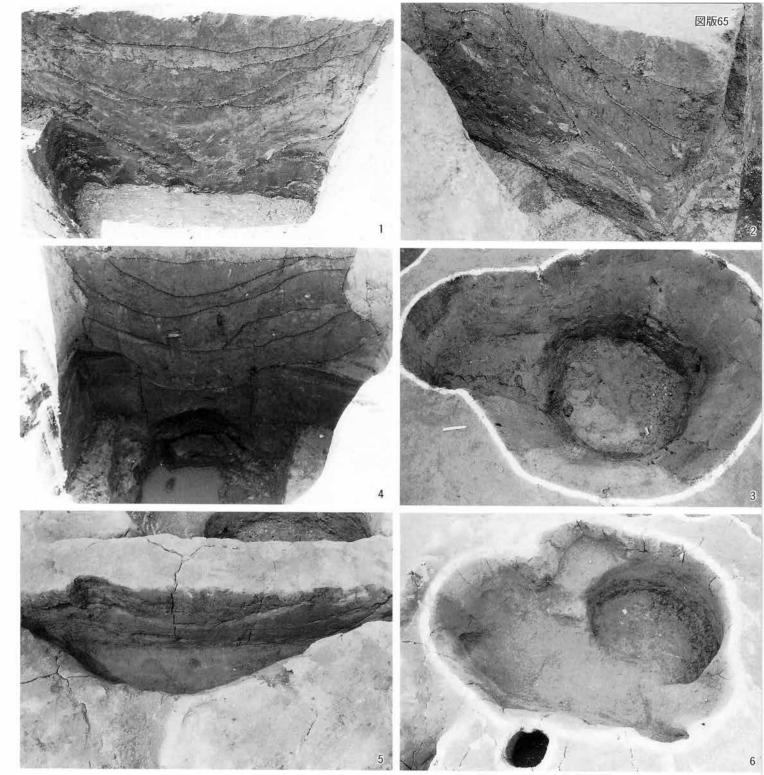


(南から)

8. SK210 (東から)



(東から)

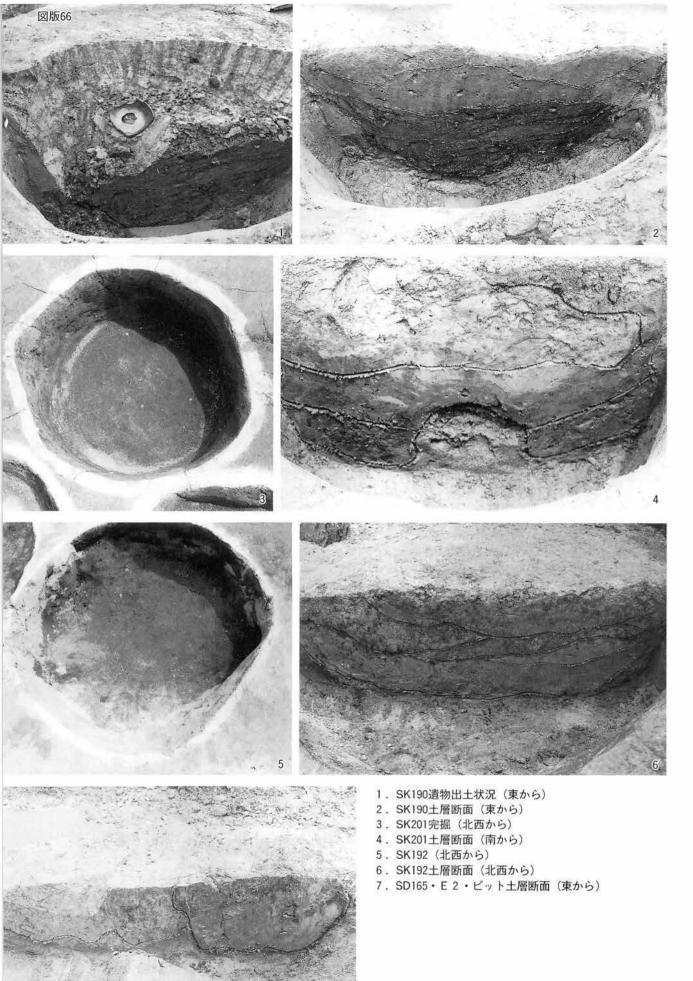


1. SE202土層断面(南から)

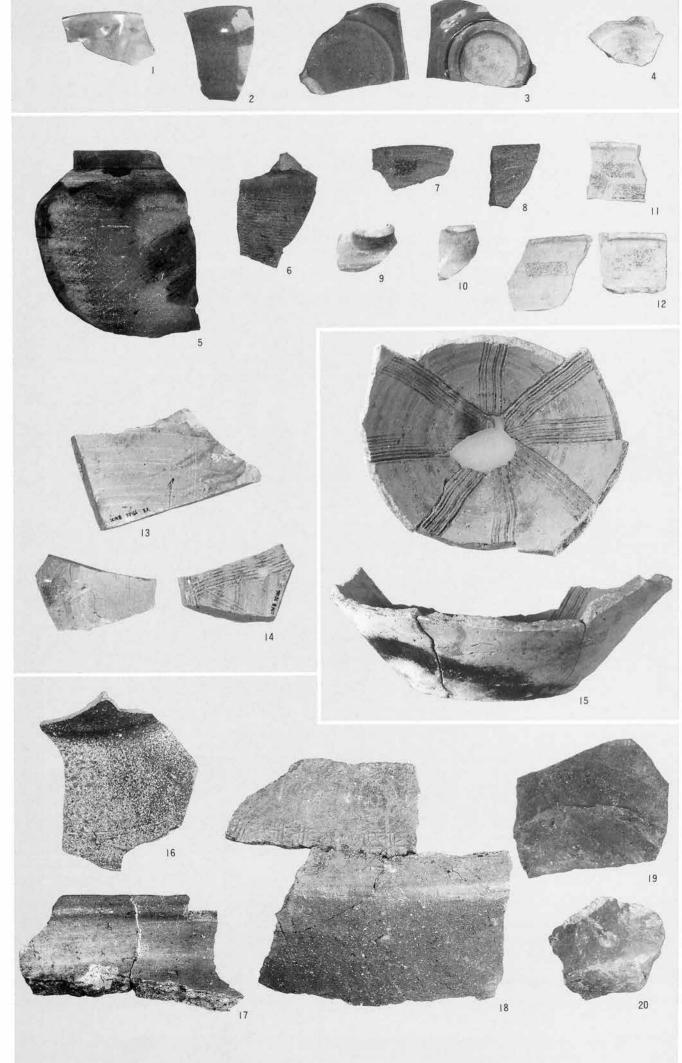
- 2. SK203土層断面(南西から)
- 3. SE202 · SK203 (南東から)

4. SE212土層断面(北東から)

- 5. SK205土層断面(南から)
- 6. SK205 (南から)

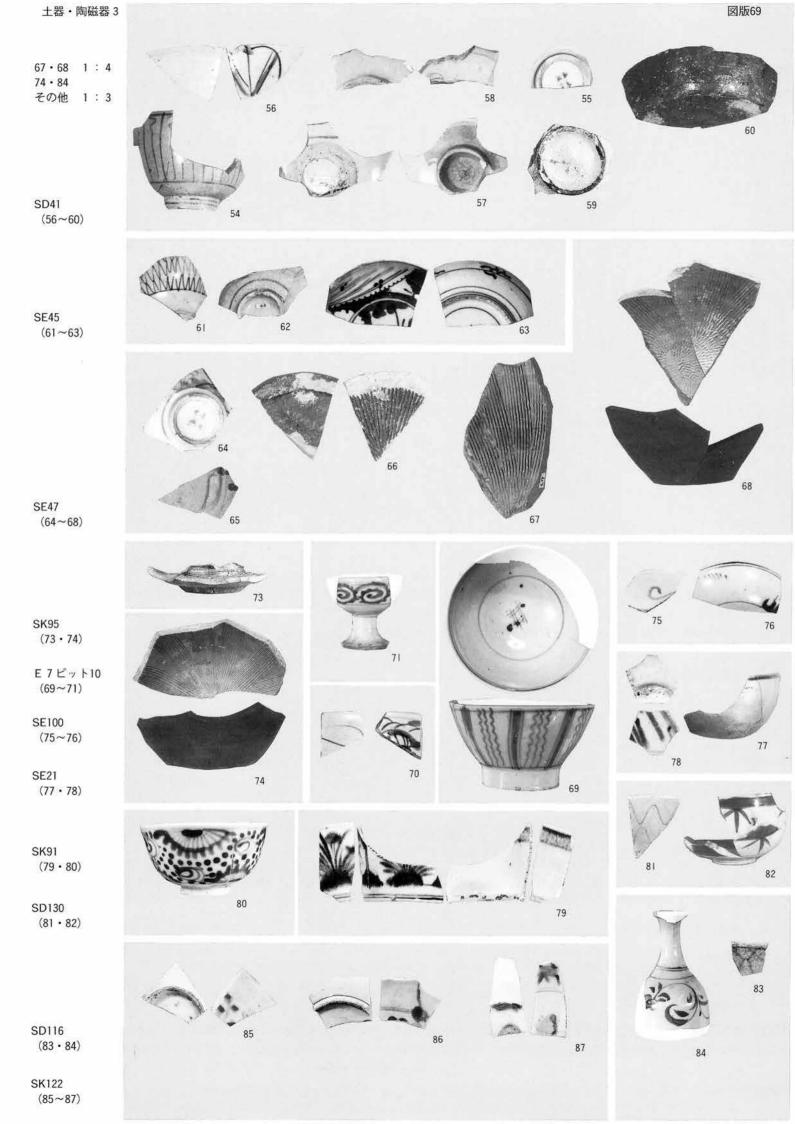


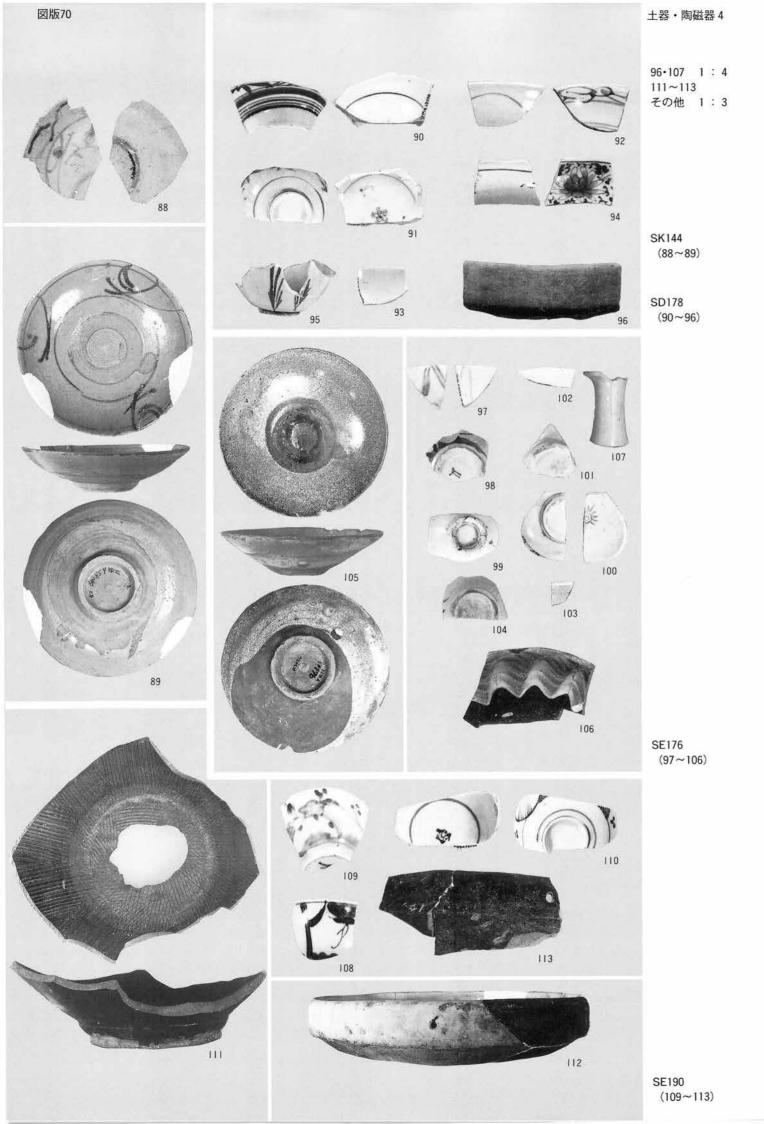
1~4 1:3 その他 1:4



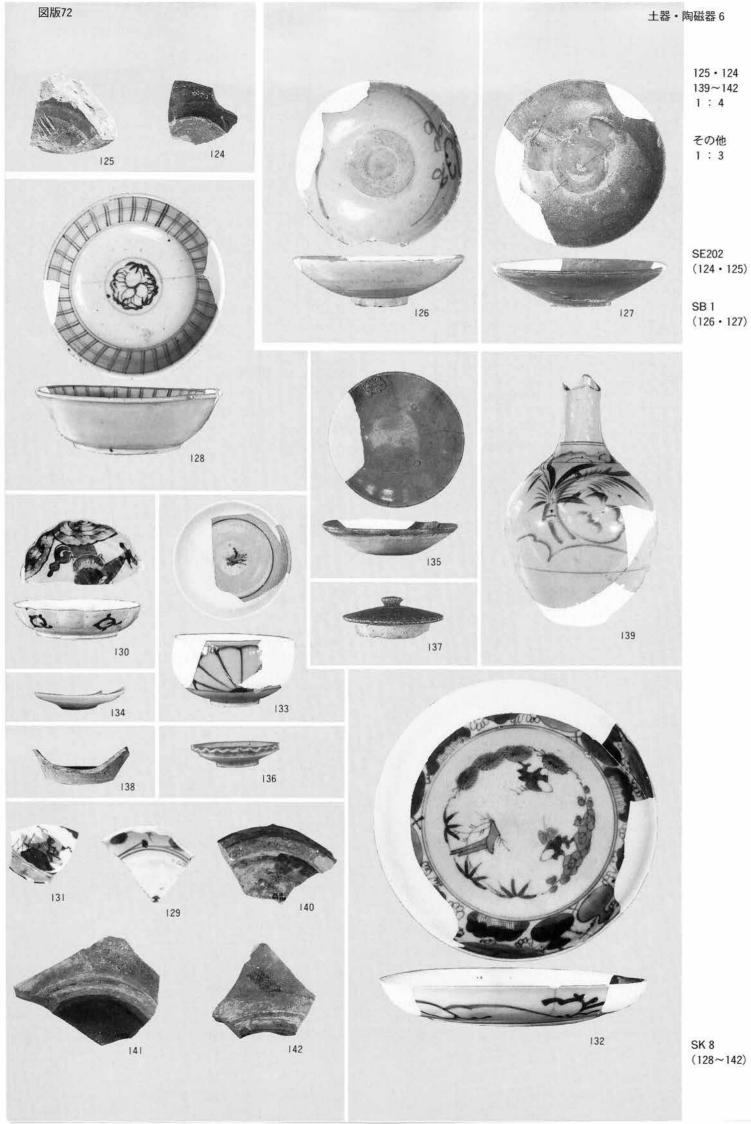


(37~53)



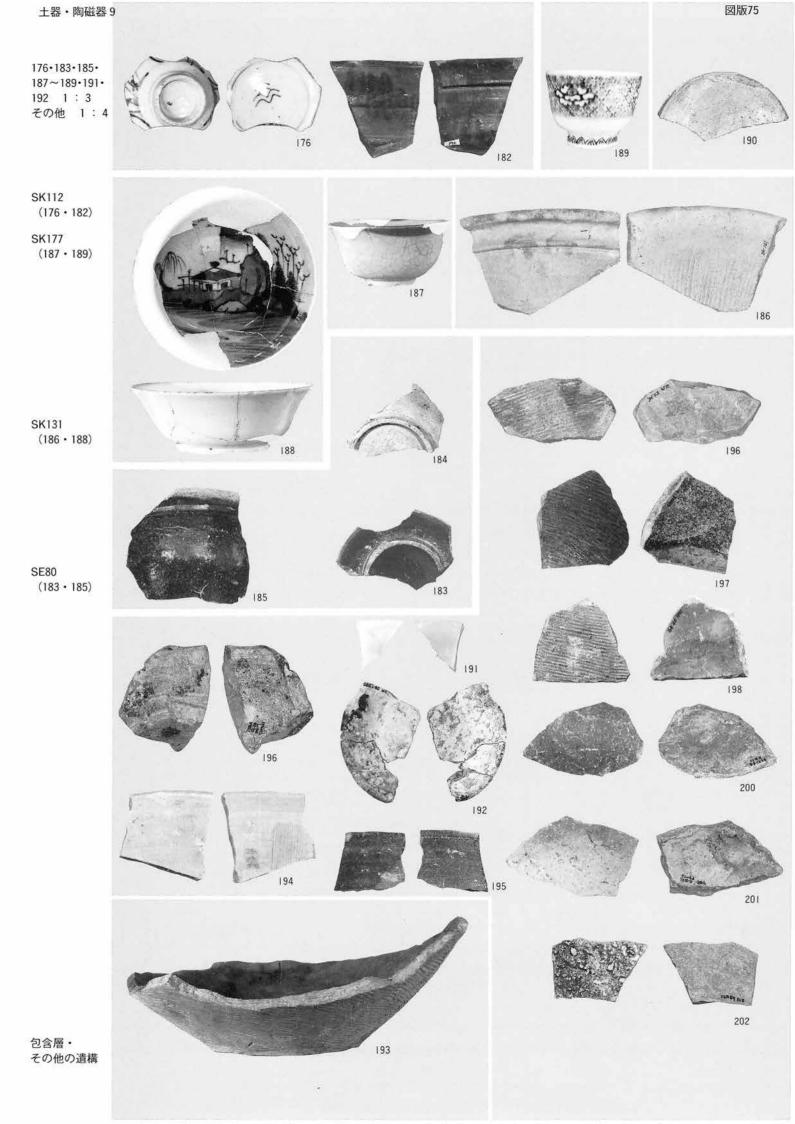


SE198 (114~123)



SK 8 (143~158)

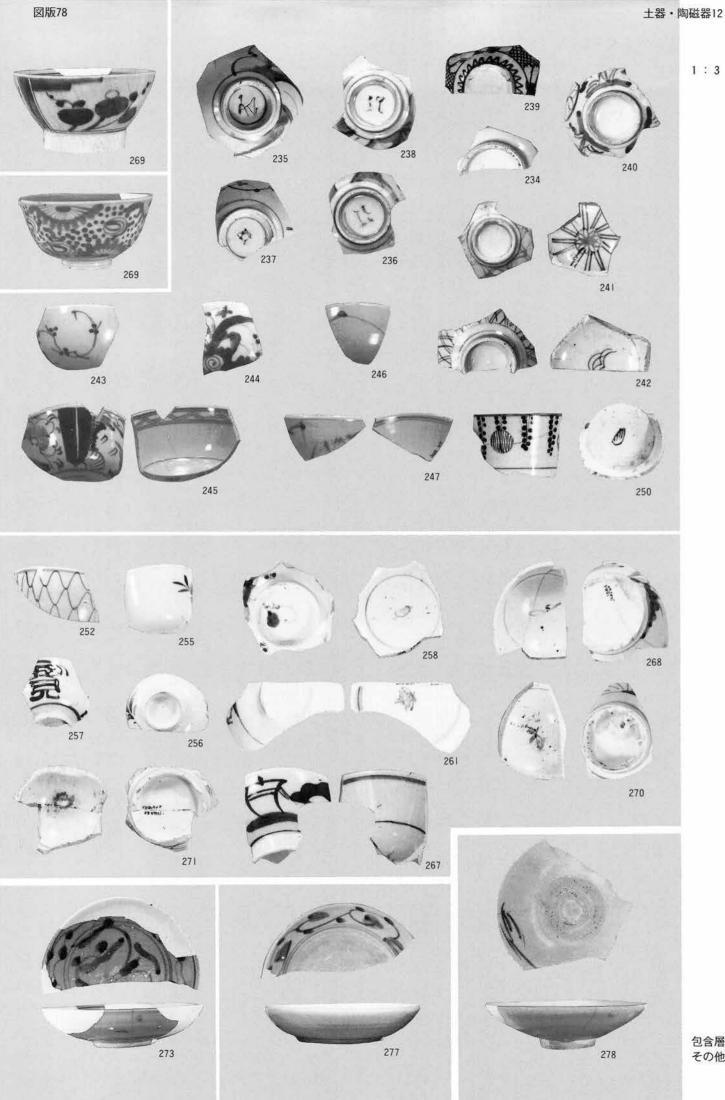




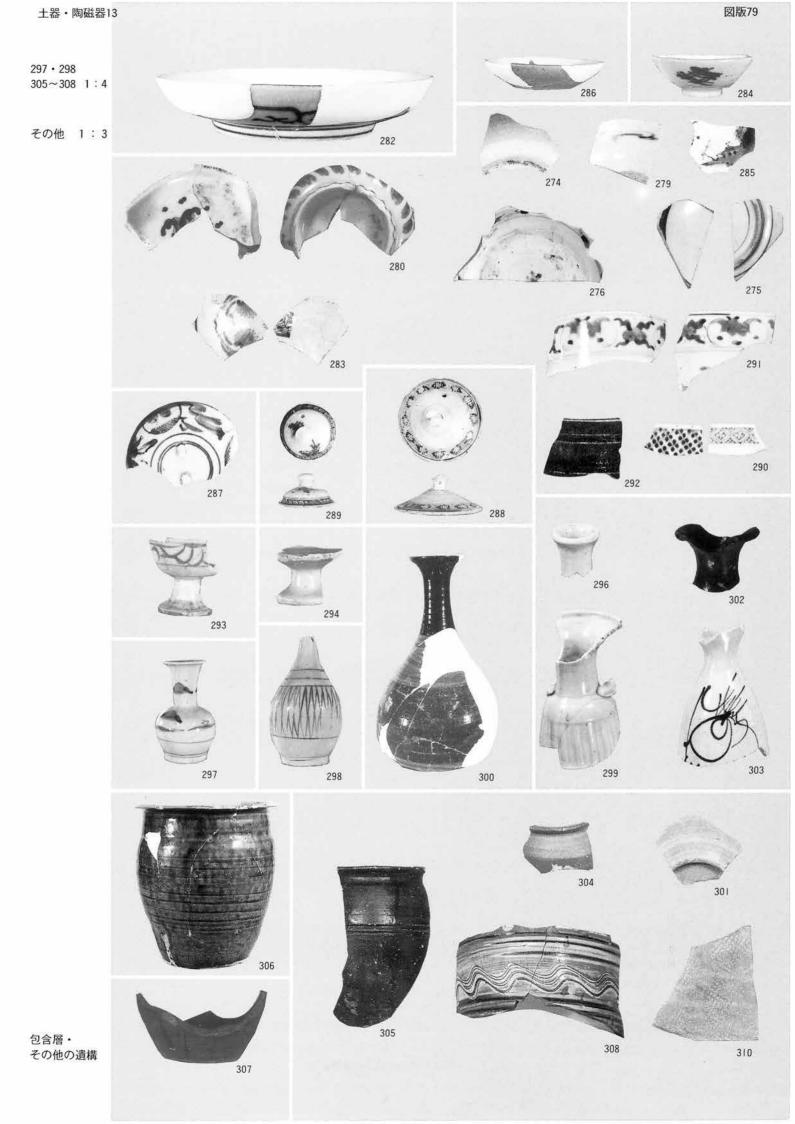
包含層· その他の遺構

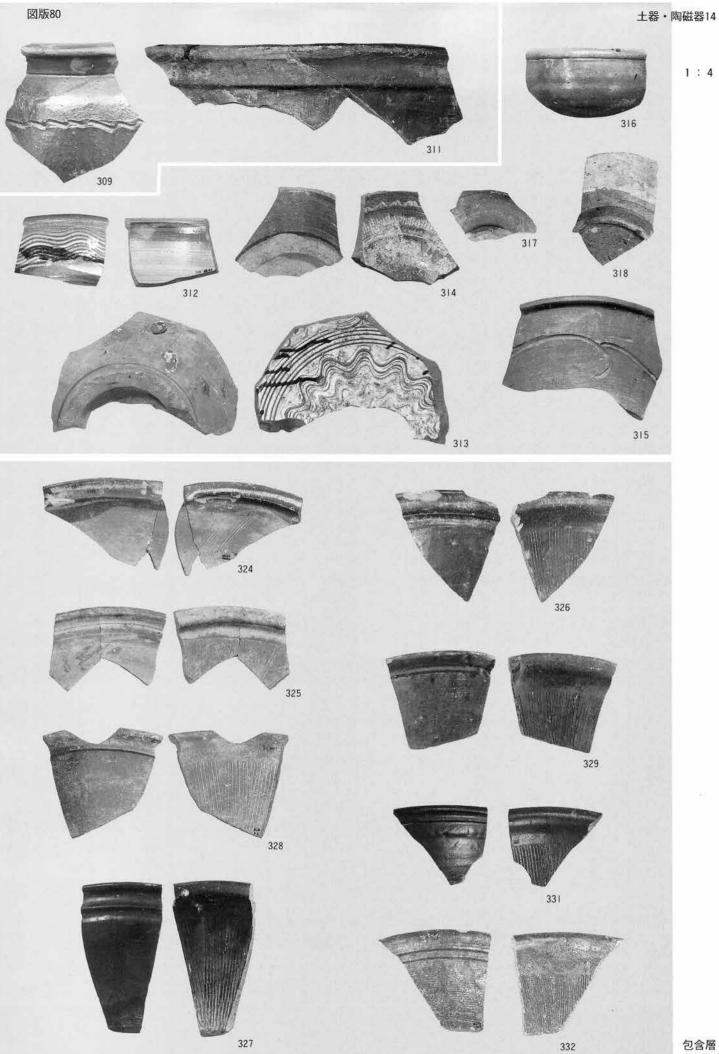


包含層・ その他の遺構

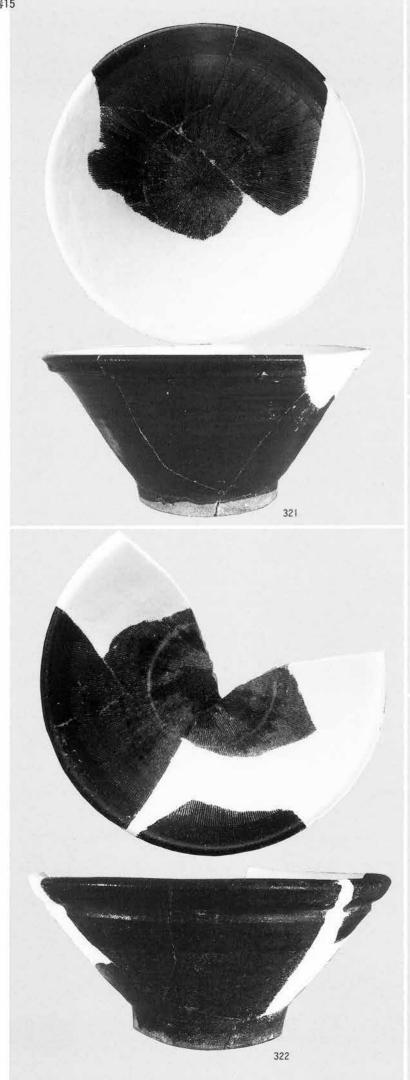


包含層・ その他の遺構





包含層・ その他の遺構





包含層・ その他の遺構

包含層・ その他の遺構

33

E-60 8MG 8 BP 3

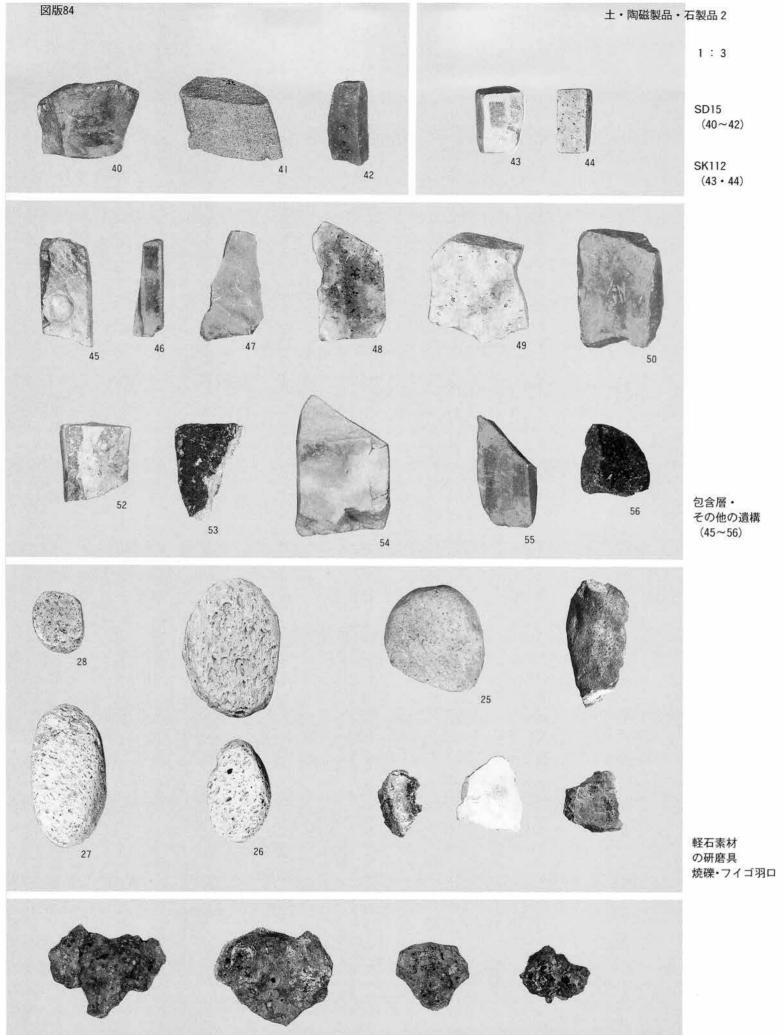
38

36

SD166 (29~33)

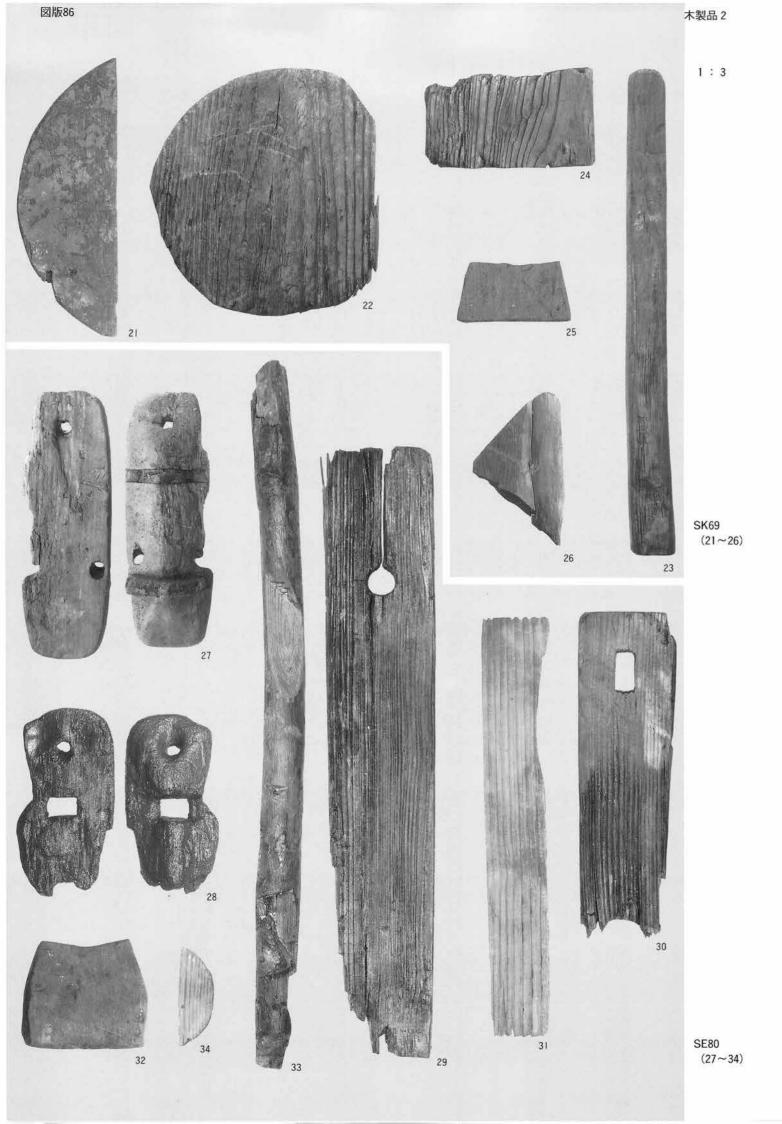
SK20 (34 • 35)

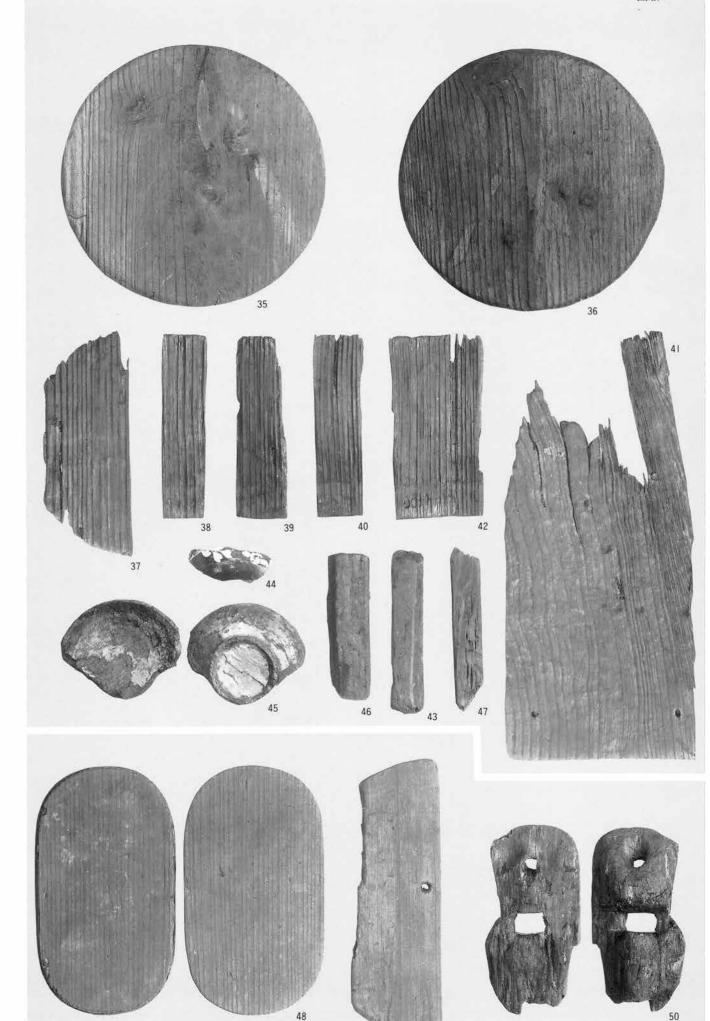
SE198 (36~39)



鉄滓

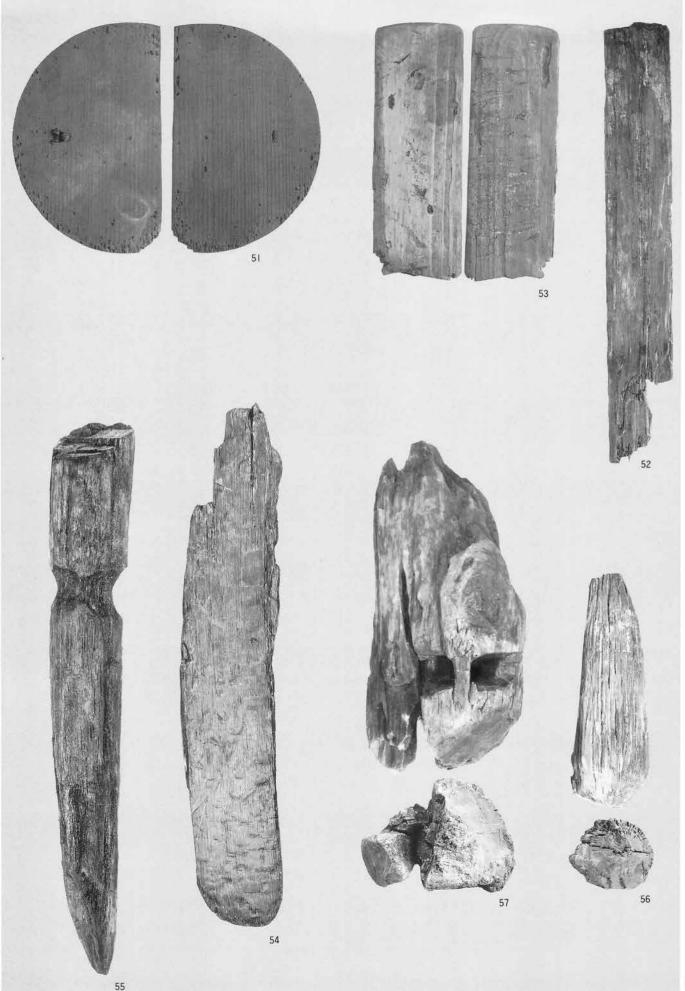
SE47 (17~20)





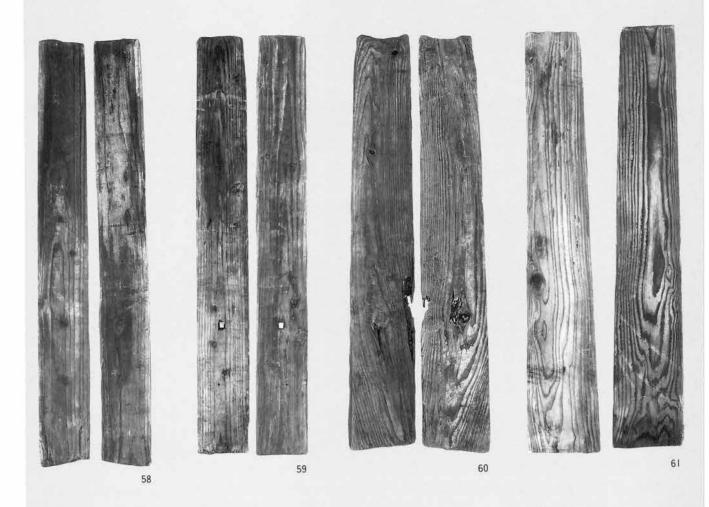
その他の遺構 (48~50)

SE198 (35~47)

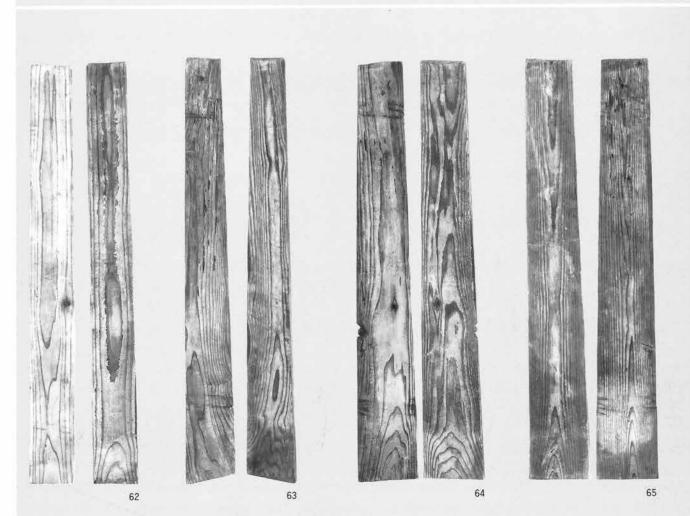


その他の遺構 (51~57)

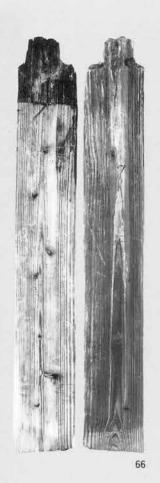
1:8

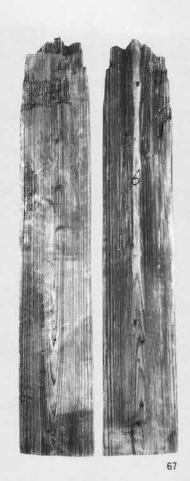


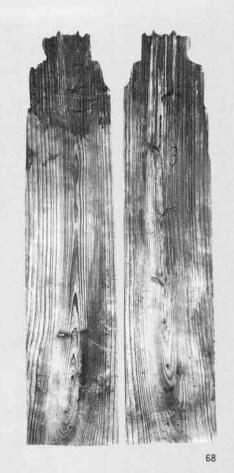
SE90上段 (59~62)



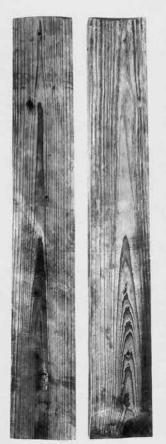
SE90下段 (63~66)

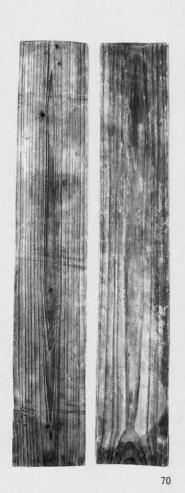


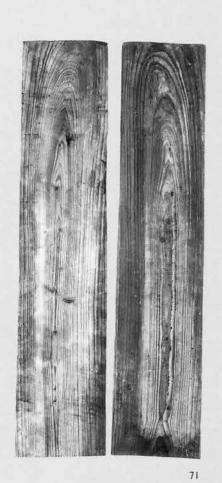




SE45上段 (67~69)

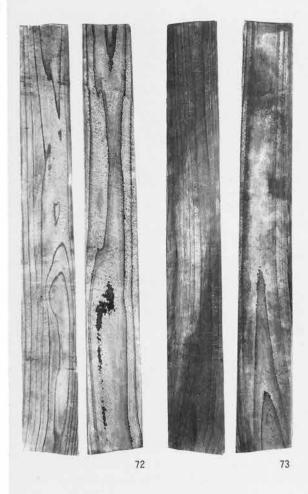






SE45下段 (70~72)

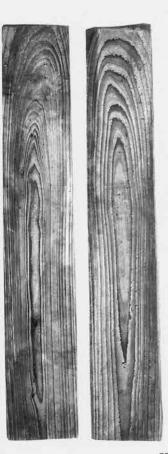
72~75 1:8 76~79 1:12















SE45下段 (73~76)

SE45井戸側 (76~79)

74

75

報告書抄録

書名	(江內遺跡											
副書名	磐越	磐越自動車道関係報告書											
シリーズ名	新潟	新潟県埋蔵文化財調査報告書											
シリーズ番号	第76	第76集											
編著者名	石山	石山精哉・春日真実・佐藤恒・藤田豊明											
編集機関	財団法	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団											
所 在 地 〒951 新潟県新潟市一番堀通町5923-46 TEL025-223-5642													
発行年月日 西暦1996年3月31日													
所収遺跡名	F	近 在 地			- K	小線	東経	調査期間		調査面積		調査要因	
77140280774	,	71 11 75		市町村	遺跡番号	시니까다				W. TT THINK	"	107 且 久 凶	
江 内 遺 跡 新潟県新津市大字川口字江内			15-207	70	37度 49分 10秒		第一次調 19911205~19 19920113 第二次調 19920322~19	3,400m²	道の線)	(磐越阜いわき〜の建設に の建設に 調査	~新潟		
所収遺跡名	種 別	主な時代	主	な遺	構		主な	遺物		特 記	事	項	
江内遺跡	集落	中世 (14世紀)	溝	柱建物 坑	1棟 2条 2基	青磁・珠洲・瓷器系陶 器土師器・木製品・砥 石・フイゴ羽口・鉄滓			,				
		近世 (17~19世紀)	井〕	柱建物 戸 坑	4 棟 27基 46基 22条	土師器・瓦器・陶器・ 磁器・土製品・陶磁製 品・石製品・木製品							

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第76集 磐越自動車道関係報告書

流 内 遺 跡

平成8年3月25日印刷

編集·発行 新 潟 県 教 育 委 員 会 〒950 新潟市新光町 4 - 1 電 話 025 (285) 5 5 1 1

平成8年3月31日発行

.財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団 〒950 新潟県埋蔵文化財調査事業団

〒950 新潟市一番堀通町5923-46 電 話 025 (223) 5 6 4 2 FAX 025 (228) 1 7 6 2

印刷・製本 北 越 印 刷 株 式 会 社 〒940 長岡市福住1丁目6-27 電 話 0258 (33) 0306

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第76集 『江内遺跡』 正誤表

初两个生态人们对确立和自自 3710米 [正门送杨] 正的公										
頁	位置	誤	正							
5 p		第3図	第4図							
抄録	北緯	37度49分10秒	37度49分00秒							
抄録	東経	139度08分20秒	139度07分21秒							